

紀要

沖縄埋文研究 1



論考

- 琉球列島の先史時代遺跡出土の穿孔具考 ······ 盛本 勲 (1)
与那国島トゥグル浜遺跡の編年の位置の再検討 ······ 安里 翠淳 (11)
グスク時代の土壙墓・石組墓-発掘資料から- ······ 濑戸 哲也 (25)
天界寺考-発掘調査成果を参考にして- ······ 山本 正昭 (35)
首里城跡出土銭貨について ······ 知念 隆博 (47)
グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察 ······ 岸本 竹美 (55)
沖縄出土の清朝陶磁 ······ 新垣 力 (73)
造墓史料にみる近世琉球の龜甲墓 ······ 川元 哲哉 (89)

報告

- 稻福遺跡出土鉄製品の保存処理 ······ 青山 奈緒 (97)
文化財関係文献にみる戦争遺跡 (I) ······ 長嶺 均 (103)
沖縄県立埋蔵文化財センターにおける図書記号設定 ······ 仲間 留美 (121)
鷺島海底遺跡体験記 ······ 片桐 千亞紀・中山 晋 (125)
マリアナ諸島テニアン島マルボ遺跡採集資料 ······ 安里 翠淳 (131)
琉球諸島考古学文献散歩 (1) ······ 安里 翠淳 (141)



2003年

沖縄県立埋蔵文化財センター



▲ 遺跡遠景（北西より）



▲ シャコガイ製貝斧



▲ 検出された焼石調理遺構

浦底遺跡（うらそいせき）

浦底遺跡は、宮古郡都町字福里浦底の砂丘上（標高約3m前後）に立地する（写真1）、南琉球新石器時代後期の集落址である。1987～88年の発掘調査により、製作途上品をも含めて200点余のシャコガイ製貝斧（写真2）を出土したことで著名である。

遺跡の堆積層は計6枚が確認されているが、うち文化層はⅢおよびV層の2枚のみで、両層より径50～60cmの略円形状に焼けた小砾群が30基余が検出されている（写真3）。これらの機能としては、焼石調理を目的とした施設とみられている。

他遺跡に比類を見ない多量の出土をみたシャコガイ製貝斧は、法量や形態のバリエーションが豊富なうえ、他遺跡では例のない彫刻刀形の製品等も出土している。石器は極少で、石斧2点と凹石、有孔製品のみである。その他の遺物としてはスイジガイ製利器やホラガイ製有孔製品、貝盤、クモガイ科製品、イノシシの大歯有孔製品、骨針、匏状製品、サメ歯有孔製品等も出土している。

文化層のC14年代測定値はⅢ層が 1880 ± 75 BP、 2180 ± 75 BP、 2200 ± 75 BP、V層が 2340 ± 75 BP、 2520 ± 75 BPである。（盛本歴）



▲ 挖立柱建物群検出状況

熱田貝塚（あつたかいづか）

熱田貝塚は、恩納村宇安富祖小字熱田の海岸砂丘に位置する。1978年の沖縄県教育委員会による発掘調査により、グスク時代の開始時期の様相が明らかになった。

この調査では柱穴が整然と並ぶ大型掘建柱建物群が検出され、遺物ではいわゆるグスク土器と共に縱方向に把手がつくタイプの滑石製石鍋・類須恵器・12世紀の玉線状口縁を有する白磁碗が出土した。このことにより、グスク時代の開始期が現在の大分の見解である12世紀と考えられるようになった。

最近の調査では、読谷村ターシモー北方遺跡や北谷町後兼久原遺跡でもこの熱田貝塚と同様の建物群や遺物が検出され、グスク時代初期の集落様相がさらに明らかになりつつある。

(瀬戸哲也)



▲ 白磁碗出土状況



▲ 滑石製石鍋出土状況

沖縄埋文研究

第1号

目 次

巻頭カラー図版

浦底遺跡

熱田貝塚

論考

琉球列島の先史時代遺跡出土の穿孔具考	盛本 熱	1
与那国島トゥグル浜遺跡の編年的位置の再検討	安里 嗣淳	11
グスク時代の土壙墓・石組墓—発掘資料から—	瀬戸 哲也	25
天界寺考—発掘調査成果を参考にして—	山本 正昭	35
首里城跡出土銭貨について	知念 隆博	47
グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察	岸本 竹美	55
沖縄出土の清朝陶磁	新垣 力	73
造墓史料にみる近世琉球の亀甲墓	川元 哲哉	89

報告

稻福遺跡出土鉄製品の保存処理	青山 奈緒	97
文化財関係文献にみる戦争遺跡(Ⅰ)	長嶺 均	103
沖縄県立埋蔵文化財センターにおける図書記号設定	仲間 留美	121
鷹島海底遺跡体験記	片桐千亞紀・中山 晋	125
マリアナ諸島テニアン島マルボ遺跡採集資料	安里 嗣淳	131
琉球諸島考古学文献散歩(1)	安里 嗣淳	141

琉球列島の先史時代遺跡出土の穿孔具考

Perforators Unearthed from the Prehistoric Sites in Ryukyu Archipelago

盛本 勲

MORIMOTO Isao

ABSTRACT: A variety of shell artifacts is seen in the archaeological and folklore material in the Amami and Okinawa districts with the lagoon environments. This paper attempts to compile the possible perforating implements among the archaeological artifacts of unknown function, and to examine their function as the perforator through observation, folklore investigation and experiments. The material of the possible perforators includes shell and spine of slate-pencil sea-urchin. The form of their functioning-parts is classified in three categories: point, chisel and others. These forms resemble to those of the folklore material, therefore, such perforators must have been used for producing shell weights and so on.

1. はじめに

日本列島の南西端に位置し、サンゴ礁に囲繞された特異な水域環境にある琉球列島では、地域的特性として、先史時代以来、容易に採取可能な貝類を生活用具の素材としたものが多い、ということは先学によって指摘されているところである¹⁾。

この事象は、サンゴ礁の分布や、それと密接に関連している貝類等の天然分布と同様、トカラ列島以北に比して、奄美・沖縄諸島はその頻度がより高い。また、奄美・沖縄の両諸島を比較した場合、より沖縄諸島が高い、ということが指摘できる。

かかる製品は、その種類も多岐にわたり、考古および民具の両物質文化資料を通して見られるが、考古資料においては、その用途や機能が判然としないものも少なくない。

小稿で検討しようとする資料もその一つで、当該地域の先史時代遺跡出土のエゾバイ科：イトマキボラ類やホラガイ科等の腹足綱（巻貝）の殻軸やゴホウラと推されるスイショウガイ科若しくはソデガイ科の外唇部付近の殻の厚い部分、あるいはバイブルニの棘等を用いて、ノミあるいはヘラ状、ポイント状などに加工した製品である。

これらは、木下尚子分類の漁撈・採集・加工工具中の漁撈・採集・加工：刺突具：に属するものである（木下1992）。

なお、後述するように、当該製品の有する属性と追体験等によって使用されている民具資料の有する形状等との比較検討の結果、かかる資料は穿孔具としての機能・用途を有していたものと考え、当該名称を使用する。

2. 資料の概要

管見のところ、琉球列島におけるかかる資料は、11遺跡において14例以上が知られている（図1～3）。

はじめに、各資料の概要を北から順に記す。

1. 鹿児島県大島郡笠利町あやまる第2貝塚（池畠・編1984）

1点の出土がある（図2-1）。標品は、多面体（7面）を有した角柱状の身部の先端に一方向のみ

からの研磨により付刃した片刃のノミ状を呈する製品である。

刃縁端部には、使用痕と思われる刃こぼれが見られ、身部の研磨面には図のように粗い察痕が走っている。

頭部付近には、横位に穿孔を施した痕跡が観察される。欠損はしているものの、研磨面が横位に走っていること等から、完形に近い長さであろう。

全面的に入念な研磨が施されているため、詳細な使用具種は判然としないが、報告者も述べているように、ゴホウラなどのよう、厚みを有したスイショウガイ科、若しくはソデガイ科等の外唇部を使用したものと思われる。

長さ7.2cm、幅1.4cm、重量22.5gを測る。
第6トレンチ2区出土。

2. 沖縄県今帰仁村渡喜仁浜原貝塚（新田・編1977）

1点の出土がある（図2-4）。パイプウニの棘の先端部を両側から加工、付刃した製品である。

全体形状は、小型のノミ状をなす。身部の形状は、素材を活かした棒状を呈し、先端部に付刃された刃部形状は両刃状をなし、当該部の片側には抉りを有する。

法量は長さ5.6cm、幅1.4cmを測る。B地区IV層出土。

3. 沖縄県恩納村仲泊遺跡第IV貝塚（金武・編1977）

1点の出土がある（図3-3）。比較的厚みのあるイモガイ科のアンボンクロザメガイ、若しくはクロフモドキ等の体層部を切り取り、先端部をポイント状に仕上げた製品である。上端部は欠失している。

身部の形状は、幅0.7cm程の細身の板状をなす。残存長3.8cm、幅0.7cmを測る。

岩陰B-Cとその前庭部出土。



図1 出土遺跡分布図

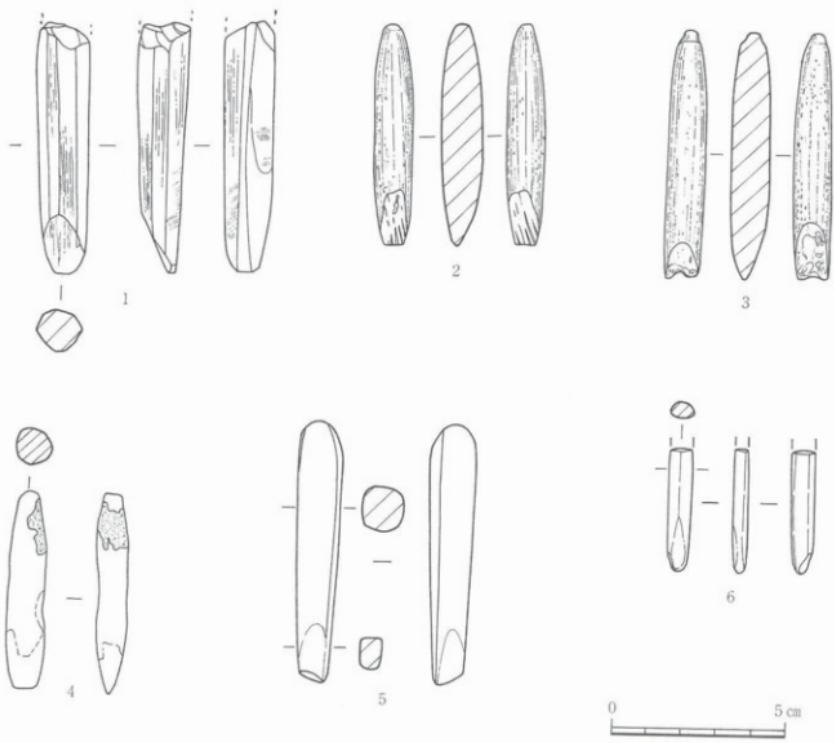


図2 穿孔具実測図・1

4. 沖縄県具志川市地荒原貝塚（大城・大城編1986）

「b. 尖頭状製品」の名称で、3点の報告があるが、うち1点は報告者も述べているように、穿孔を有することや扁平状を呈していることと、他の1点は別の機能・用途を有していたであろう、と考える。

このように、諸点を検討した結果、ここで検討しようとする資料には該当しないものとの理由から、図3-5に示した1点のみについて扱う。

標品はエゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を棒状に整形し、水管溝にあたる部分に付刃した製品である。刃部の先端形状は円錐状を呈す。刃部付近には、縦位に研磨痕が観察される。

長さ5.8cm、幅1.18cm、厚さ0.97cm、重量7.5gを測る。F-17グリッド：II層20-40cmの出土。

5. 沖縄県与那城町宮城島シヌグ堂遺跡（金武・編1985）

「尖頭状製品」の名称で、1点の出土がある（図2-7）。標品は、ゴホウラと推される腹足綱の殻口付近の比較的厚みを有した部分を棒状に切り取り、殻頂の反対方向を尖らせた製品である。

内唇面は研磨痕を比較的著しく残すが、他部には明瞭な研磨痕は観察できない。先端部は比較的緩やかに尖る。残存長10.2cmを測る。M-5・7グリッド：I層出土。

6. 沖縄県読谷村木綿原遺跡（当真・上原編1978）

パイプウニの棘を利用した製品が2点の出土がある（図2-2・3）。両者とも約7cm長の素材の先端部を両面より研磨し、付刃した製品である。2の刃部の研磨面には図のように、比較的荒い擦痕が斜位に走っている。

3は、刃縁部に刃こぼれが認められ、中央部付近が大きく欠損している。両者とも第IV層の第1号人骨近くよりの出土である。

2が長さ6.8cm、幅0.6cm、重量4g、3が長さ7.1cm、幅0.6cm、重量4gを測る。I地区・V-20：IV層出土。

7. 沖縄県具志川市アカジヤンガー貝塚（金武・他1980）

「尖頭状製品」の名称で、1点の報告がある（図3-3）。貝を素材としているものの、風化等が著しく、具体的な種は判然としない。

標品は、頭部を欠失する身部から尖端部にかけての資料である。身部の最大径は3mmと細身で、略円形状なす。残存長3.7cm、幅0.4cmを測る。A地区Ⅲ層出土。

8. 沖縄県宜野湾市宇地泊兼久原遺跡（高宮・他1989）

「貝製利器」の名称で、2点の報告がある（図2-8、図3-1）。図3-1は、OトレントII層出土資料で、エゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を棒状に切り取り、下端部に付刃した製品である。刃部は入念な研磨が施されており、殻軸の状況から腹面は凸状、背面は平坦状をなすノミ形を呈す。

殻軸の上端部から中央部付近にかけて螺旋状に沿って縦位の研磨痕が見られ、上端部で鋭角な研磨が施されている。長さ8.9cm、最大幅2.1cm、重量50gを測る。図2-8は、S・TトレントII層出土資料である。ホラガイ科の殻軸の下端部を両面から研磨し、ノミ状に付刃したものである。刃部は使用によるものか、刃こぼれ様をなすとともに、摩耗している。長さ9.4cm、重量45gを測る。

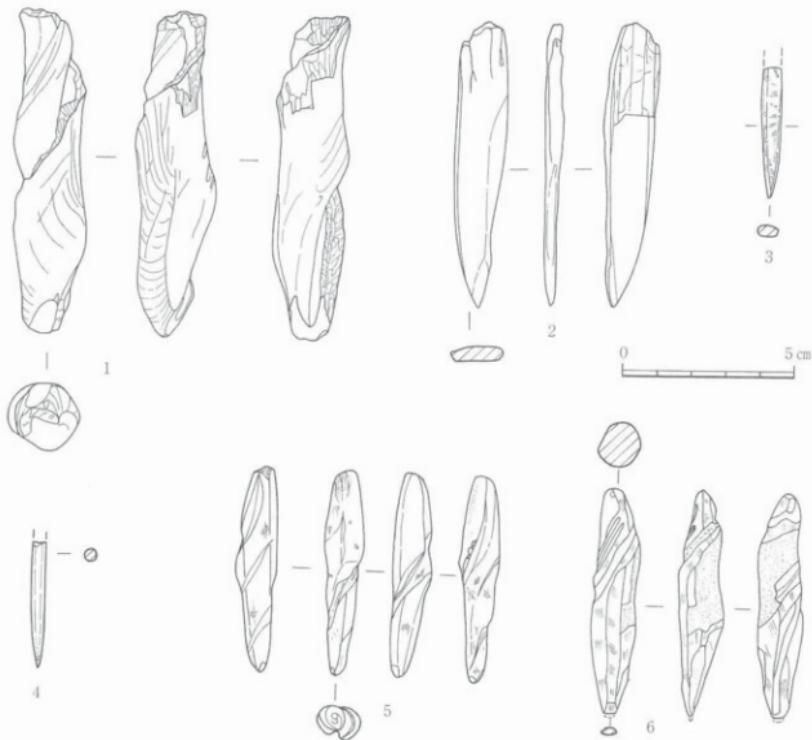


図3 穿孔具実測図・2

9. 沖縄県浦添市嘉門貝塚A（松川・編1991）

「尖頭状製品」の名称で、バイブウニ属の棘を利用した製品が1点得られている（図2-6）。

標品は、長さ約4cm長の素材の先端部を両面から研磨し、付刃した製品である。身部の表面は素材の原形を止め、比較的丸みを帯びるが、裏面は研磨が施され平滑をなす。先端部付近には、研磨痕と剥離が見られる。残存長3.6cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm、重量2.0gを測る。

10. 沖縄県座間味村古座間味貝塚（岸本他・編1982）

エゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を利用した製品が1点得られている（図3-6）。

素材より棒状に切り取って整形後、全面的に入念な研磨によって仕上げている。刃部の両端は鋭く尖っている。法量は、長さ6.7cm、幅1.3cmを測る。II区：第4号住居址内出土。

11. 沖縄県久米島町大原貝塚群第1貝塚（当真・編1980）

イモガイ科の体層部を長軸方向に切り取って板状に仕上げ、その先端を尖らせたものである（図3-2）。先端部は、ポイント状に仕上げられている。表裏面は比較的丁寧に研磨を施すが、縁辺部は部分的に研磨しているのみである。頭部は剥離し、部分的にヒビが入っている。

長さ8.2cm、最大幅1.4cm、重量7.7gを測る。I-22区：II層出土。

他に「ホラガイ系螺軸加工ヘラ状利器」と称した製品が3点出土。長軸に巻かれたホラガイ系の螺層を、殻口付近からかき取り、残った中心の螺軸端部に両面より研磨附刃したものである。2点は殻頂部を残したままであること等から、ここで検討する資料には該当しないが、1点は対象となる可能性がある。平面觀は、平刃状をなす。

12. 沖縄県久米島町大原貝塚群第2貝塚B地点（盛本・編2000）

パイプウニ属の棘を利用した製品が1点得られている（図2-5）。素材の先端部を両面から研磨、加工して付刃した製品である。身部は素材の原形を止め、やや丸みを帯びるが、裏面は研磨が施され、平滑をなす。刃部付近には研磨痕が観察される。長さ7.6cm、幅2.3cm、厚さ1.2cmを測る。

3. 資料の帰属時期

これらの資料で最古例に属するのは、沖縄前IV期前半（縄文後期前葉併行）に位置づけられている伊波式土器及び荻堂式土器に伴出した仲泊遺跡第IV貝塚例である。

当該例はイモガイ科の体層部使用例で、先端形状はポイント状を呈している。この仲泊遺跡第IV貝塚例とほぼ同時期か、あるいは若干後続する段階に属するのが地荒原貝塚例である。伴出土器は、荻堂式土器が主体をなしている。当該例は、エゾパイ科：イトマキボラ類の殻軸を円錐状に加工したものである。

これらに後続するのが、前IV期後半～V期初頭頃（縄文後期後半～晩期初頭併行）に位置づけられている古座間味貝塚と渡喜仁浜原貝塚例である。古座間味貝塚例は、圧倒的主体を占める室川式土器を出土したII区：第4号住居址内よりの出土である。古座間味例はエゾパイ科：イトマキボラ類の殻軸を利用し、渡喜仁浜原貝塚例はパイプウニの棘を素材とした製品である。両者とも先端形状は、両刃のノミ状を呈する。

この古座間味貝塚例及び渡喜仁浜原貝塚例に後続するのが、前V期（縄文晩期併行）に位置づけられているシヌグ堂遺跡例と大原貝塚群第1貝塚例である。シヌグ堂遺跡例は、前V期（縄文晩期併行）中葉頃に帰属する字座浜式土器を主体とする土器群に伴出している。大原貝塚群第1貝塚例は、前IV期後半～V期全般にわたる比較的幅広い時期の土器群に伴出しており、具体的な土器型式は特定できないが、主体をなしている土器群は前V期頃に比定される土器群である。シヌグ堂遺跡例はポイント状、大原貝塚群第1貝塚例は身部が扁平なポイント状を呈する。

以上は、概ね沖縄前期（縄文時代併行期）に属する資料群であるが、この前期の終末から後続する後I期併行期に位置づけられるのが宇地泊兼久原遺跡例である。2例ともイトマキボラ類、ホラガイ科等の巻貝の殻軸を利用し、下端部をノミ状に研磨して付刃した製品である。

次に、沖縄後期の弥生～平安初頭頃相当期の例を見てみると、弥生前～中期相当期（沖縄後I期相当？）に位置づけられるのが、あやまる第2貝塚例である。当該例はゴホウラと推されるスイショウガイ科等の外唇部を使用して棒状に仕上げ、片刃のノミ状に加工した製品である。このあやまる第2貝塚例に後続するのが嘉門貝塚A例である。当該例は、具志原式土器等の乳房状尖底土器を主体をな

す土器群に伴出していること等からして、後Ⅱ期（弥生中～後期併行？）に位置づけられよう。資料は、バイブウニの棘を利用し、ノミ状に仕上げた製品である。この嘉門貝塚A例とほぼ同期に位置づけられるのがアカジャンガー貝塚例と大原第2貝塚B地点例である。アカジャンガー例は貝を素材としたポイント状、大原第二貝塚B地点例はバイブウニの棘に加工した製品である。

4. 用途・機能の検討

用途・機能の検討に入る前に、かかる資料の有する素材、法量、刃部形状等の属性について整理しておきたい。

まず、素材であるが、14例中、エゾバイ科：イトマキボラ類やホラガイ科等の腹足綱（巻貝類）の殻軸の先端部への加工例とバイブウニの棘使用例が各々5例、イモガイ科の体層部使用例2、ゴホウラと推されるスイショウガイ科若しくはソデガイ科の外唇部付近使用例1、貝種不明1例となっている。これらを見た場合、イトマキボラ類やホラガイ科等の殻軸使用例と、仲泊遺跡第IV貝塚、大原貝塚群第1貝塚、宇堅貝塚例のように、イモガイ科等の体層部を使用した扁平若しくは細身の形態のものとは対象とするものが異なっていたであろう、ということは想像に易くない。

次に、法量であるが、完形品が多くなく、資料全体について比較検討を行う段階でない。完形品が少ないとことについては、廃棄後の破損等をも含めて、種々の要因が想定されるが、使用時の欠損も大きな要因であろう。とりわけ、頭部については、道体験では鉄製のハンマー等により、一気に叩いて行うため、考古資料においても、河原礫等を用いたハンマー的な敲石等により、頭部を一撃により叩いているものと思われるのことを考慮にいれると、その可能性が大であろう。

用途・機能を検討していくうえで、これらの特に刃縁の大きさに着目した場合、総じてエゾバイ科：イトマキボラ類やホラガイ科の殻軸使用例、バイブウニの棘使用例、ゴホウラと推されるスイショウガイ科若しくはソデガイ科の外唇部使用例等の比較的幅広の刃縁を有する一群と、イモガイ科の体層部を使用した一群の、前者に比すると幅の狭い二タイプがある。幅広の一群は、さらに細分可能かと思われるが、これらは次に検討する刃縁形状とも密接な関係を有しているものと考えられるので、ここでは概略的に捉えておきたい。

刃縁形状は、基本的なタイプとして、二面からの研磨によって作出するノミあるいはヘラ状のタイプと、さらに二面以上からの研磨を加え、結果として四面、さらに複数面からの研磨によって作出されたポイント状の二タイプに大別できよう。仔細にみると、さらに細分可能かと考えるが、限られた資料の現状ではこの程度に止めておきたい。

これらの内訳は、ノミ若しくはヘラ状タイプ10例、ポイント状タイプ4例となっており、前者が主体をなしていることが判る。

以上、かかる製品の属性について検討を加えてきたが、ところで、これらは何に使用されたのであろうか。従前において、その機能・用途について言及した見解ではなく、唯一、古座間味貝塚出土例に關し、「この種の製品は類例がなく詳細は不明であるが、形状より推してヤスのような機能を有していた可能性がある」と述べられているのみである（岸本他・編1982）。当該地方特有のサンゴ礁海域では、伝統的にヤス漁は未発達であること等を考慮すると、この機能推定には賛同し難い。

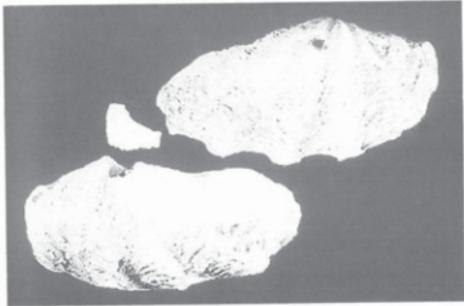
筆者はかつて、シャコガイ等を含めた貝製漁網錘を付した網の使用法、対象魚等に関する民俗学的調査を実施し、事例の比較検討を行うとともに、考古資料に関する課題等に関しての指摘を行ったことがあるが（盛本1981・82）、この事例調査の中で、1980年10月6日に沖縄県座間味村慶留間の仲村徳太郎さん（明治42年生当時71歳）より、シャコガイ製漁網錘装着の網の使用法、対象魚等と併せてそ



写真・1 シャコガイ製漁網錘製作の追体験・1



写真・2 シャコガイ製漁網錘製作の追体験・2



写真・3 追体験によって製作されたシャコガイ製漁網錘

などの鉄製の道具が用されている。ちなみに、これらの先端部形状を見た場合、五寸釘およびアサンザニは角錐すなわちポイント状、タガネにはノミ状若しくは角錐状、すなわちポイント状タイプのものがある。

本格的な鉄製道具の導入以前の琉球列島の先史時代においては、これに代わる素材が使用されていたのであろう。

の製作法についての話を伺ったとともに、追体験により製作していただいた（写真1～2）。

仲村さんは慶留間（島）に生まれ育ち、幼少の頃から漁業に従事するが、慶留間は島民の多くが自給自足的な漁業を営んでいたため、商いとしては成り立たないため、農業も行った。また、昭和6年から終戦までは南洋諸島でカツオ漁に従事していた、とのことである。

この仲村さんの話と追体験は、貝の特性や使用法などとも密接な関係を示唆しているとともに、遺跡出土の同種製品を考えるうえで極めて重要な情報であった。

かかる追体験による情報等と考古資料との検討については、拙稿において述べたことがあるが（盛本1988）、ここではその製作上における道具について検討したい。なお、追体験に使用した資料は、海浜に打ち上げられていたシャコガイ科のシラナミガイを採取してきて行っていただいた。

拙稿でも述べたように、穿孔はアサンザニ（本来、芋掘り用の耨耕具である）や五寸釘、タガネなどの先の尖った道具を使用し、貝の内側面を表にし、鉄製のハンマーで一気に叩く。この穿孔時に失敗することが多いらしく、追体験していただいた際も2例中1例は失敗した（写真3）。

この追体験からも窺えるように、シャコガイ科等の二枚貝の主歯に近い最も肉厚の殻頂部およびその周辺部に穿たれる粗孔製作にあたっては、先端部の尖った道具不可欠である。

そして、民具資料では追体験例にも見られたように、五寸釘やアサンザニ、タガネ

5.まとめ

以上、前節までに琉球列島、とりわけ中部以南の奄美・沖縄諸島の先史時代遺跡出土の「尖頭状製品」「貝製利器」等と報告されている資料を集成し、かかる資料の有する属性と、民俗調査による聞き取りや追体験による実見等との比較検討により、その機能・用途を推定してきた。

出土資料の使用素材には、貝とバイブウニの棘の二種が見られたが、バイブウニの棘は貝類に比して、強度の面で落ちる。したがって、両者を同様に捉えて良いか、ということについては疑問が残らない訳ではない。今後の課題として、記しておきたい。

そして、先端部形状は大別してノミ若しくはヘラ状、ポイント状の二タイプが見られ、その形状をはじめとした全体形状は、追体験によって使用されている民具資料の有する形状と類似することや、シャコガイ等をはじめとした二枚貝製錐などの製作にあたっては、かかる道具が不可欠であることから、それらなどの製作に使用したものであろうと考える。

このように、基本的にはシャコガイ等をはじめとした二枚貝製錐などの紐通し孔（粗孔）を穿つための道具に使用されたものであろうと考える。がしかし、単にそれのみの一元的な使用目的の道具と考えている訳ではないことは多言を要しないであろう。理由は、他の貝製品、例えばゴホウラ製腕輪の未製品の背面に粗孔を穿った資料が見られ、それらは交易品として移出する際の紐通し孔であろう、との解釈もなされているが、その正否は別として、この粗孔を穿つための道具として使用された可能性もあながち否定はできないどころか、むしろ大である。一方、かかる製品と類似の形態を有する石器も多くはないが、出土例が知られており、当該石器も使用されたであろう、ことは想像に易くないが、貝の加工等においては同質のモノがより効果的と考える。

6.おわりに

考古資料には、土器や貝輪、石斧などのように、使用例や着装、着柄例等から、機能・用途が判明しているものも少なくないが、その多くが判然としていない。

これらの判然としない考古資料に対し、その解釈や社会の復元などにあたって、民族学や民俗学的研究の成果を補助的に援用する場合があるが、渡辺誠は「伝統的な考古学的アプローチに固執せず、むしろそれに対する批判的な姿勢を含めて、民族考古学的手法を積極的に行うべきである」（渡辺1985）と述べるとともに、この民俗・民族学的手法も易易には行えず、対象となる民俗・民族学の調査方法が肝心であり、決して單なる残存文化としての調査としてではなく、生態・社会・技術の三者の条件調査として実施し、その一致率を高めたうえで援用すべきであると述べる（渡辺1985）。

筆者もこのスタンスに立脚し、微力ながら、琉球列島の考古学と民具学を繋ぐ物質文化史的構築を試みるための作業仮説として、これまでに調査、研究を進めてきたが、小稿もその一つである。

ここに提示した考えには、偏見のかつ一方的な解釈も少なくないであろう、ことは自明のことであり、他のより説得性の高い考えが提示されれば、修正を行っても良いと考えている。大方のご批正を願うしだいである。

末筆になりましたが、拙稿掲載の挿図の淨書にあたっては、外間瞳さんの手を煩わせた。銘記して謝意を述べるしだいである。

（もりもと　いさお：調査課長）

註

- 考古資料については木下尚子が（木下1992）、沖縄諸島域の民具資料については、上江洲均が（上江洲1990）、その体系な整理を行っている。

【参考文献】

- 池畠耕一・編、1984：あやまる第2貝塚。笠利町文化財報告NO.7。笠利町教育委員会。鹿児島県笠利町。
- 上江洲均、1980：沖縄の民具について。近畿民具。第4輯。pp 2～12。近畿民具学会。大阪。
- 1982：『沖縄の暮らしと民具』考古民俗叢書<19>所収。慶友社。東京。
- 大城慧・大城剛、1986：地荒原貝塚-個人住宅建築工事にかかる発掘調査報告-。具志川市教育委員会。具志川。
- 岸本義彦・他・編、1982：古座間味貝塚範囲確認調査報告書。沖縄県文化財調査報告書第43集。沖縄県教育委員会。那覇。
- 金武正紀・他、1977：仲泊遺跡 1975・1976年度発掘調査報告書。恩納村文化財調査報告書第1集。恩納村教育委員会。沖縄県恩納村。
- 金武正紀・他、1980：宇堅貝塚・アカジャングー貝塚発掘調査報告。具志川市教育委員会。具志川市。
- 金武正紀・他、1985：シヌグ堂遺跡-第1・2・3次発掘調査報告。沖縄県文化財調査報告書第67集。沖縄県教育委員会。那覇。
- 木下尚子、1992：南島古代の貝文化。MUSEUM 東京国立博物館美術誌。NO.491。pp 4～15。東京国立博物館。東京。
- 1996：『南島貝文化の研究 貝の道の考古学』所収。pp427～423。（財）法政大学出版局。東京。
- 高宮廣衛・他、1989：宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告。沖国大考古。第10号。沖縄国際大学文学部考古学研究室。宜野湾。
- 当真嗣一・上原静編、1978：木綿原 沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書。読谷村文化財調査報告書第5集。読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館。沖縄県読谷村。
- 当真嗣一・編、1980：大原・久米島大原貝塚群発掘調査報告-。沖縄県文化財調査報告書第32集。沖縄県教育委員会。那覇。
- 新田重清・編、1977：渡喜仁浜原貝塚 調査報告書 [I]。今帰仁村文化財調査報告第1集。今帰仁村教育委員会。沖縄県今帰仁村。
- 松川 章・編、1991：嘉門貝塚A-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書 II-。浦添市文化財調査報告書第18集。浦添市教育委員会。浦添。
- 盛本 熊、1981：奄美・沖縄諸島における貝製漁網錐の研究。物質文化。第37号。pp27～45。物質文化研究会。東京。
- 盛本 熊、1982：奄美・沖縄諸島における貝製漁網錐の研究(その2)。物質文化。第38号。pp55～61。物質文化研究会。東京。
- 盛本 熊、1988：琉球列島の貝製漁網錐。季刊考古学。第25号-特集：繩文・弥生の漁撈文化-。pp71～78。雄山閣出版会。東京。
- 盛本 熊・編：2000：大原第二貝塚B地点発掘調査報告書。具志川村文化財報告書第3集。具志川村教育委員会。沖縄県具志川村。
- 渡辺誠、1995：『日韓交流の民族考古学』。名古屋大学出版局。名古屋。

与那国島トゥグル浜遺跡の編年的位置の再検討

Reconsideration on the Chronological Position
of Tuguru-bama Site in Yonaguni island

安里 嗣淳
ASATO Shijun

ABSTRACT: In the Neolithic chronology of southern Ryukyu that I had proposed in 1989, I placed the Tuguru-bama site of Yonaguni island in the Late Prehistoric period. I also added a note to demonstrate a possibility that the site might belong to the Early period, because of its geological location. In general, the site of Early Prehistoric period are situated on low hills near the coast, and so is the Tuguru-bama site. The latest examination of the site proved that the upper sand layer that covered the site was the 'Late dune' that belong to the Late period. Therefore, the Tuguru-bama site must be placed in the Early period.

序

八重山の新石器時代の編年については、従来のいわゆる早稻田編年の場合無土器期（第一期）から有土器期（第二期）へという順序で位置づけられていた（西村正衛ほか 1960 p.168）。その後、石垣島の大田原遺跡（第二期）と神田貝塚（第一期）および波照間島の下田原貝塚（第二期）と大泊浜貝塚（第一期）の発掘において、第一期と第二期の層位関係が逆転することが明らかとなった（金武正紀ほか1982,1986）。この事実を受けて、私は1989年に「南琉球無土器新石器期の位置」と題する小文を発表し、宮古諸島を含めた南琉球新石器時代の編年表を提起した（安里嗣淳1989 p.668）。そのなかで与那国島トゥグル浜遺跡は土器を伴わないことから後期に位置づけたが、立地上の理由から前期の可能性もあるのではないかと考え、表の外に「トゥグル浜遺跡は発掘範囲（約1,500平方メートル）は無土器だが、遺跡の立地は石灰岩台地の赤土上に形成されていて、前期的様相を呈している」と註を付しておいた。将来の再検討の余地を残しておきたかったのである。

その後、前期遺跡として石垣島西部のビュツタ遺跡、宮古郡多良間島の添道遺跡が、後期遺跡として竹富島のカイジ浜貝塚、多良間島の西高嶺遺跡、宮古島のアラフ遺跡などが発見され、その立地について再検討できる遺跡が増加している。そこで、かねてから気になっている与那国島トゥグル浜遺跡の編年上の位置について、後期ではなく前期に属するのではないかという観点から再検討してみたい。

1. 1989年に提起した編年とトゥグル浜遺跡の位置づけ

図1aに1989年に提起した南琉球圏（宮古・八重山諸島）新石器時代の編年を示す。この編年は先史時代を前期と後期に区分するものであるが、両時期は遺跡の立地においても異なる特徴があるとした。すなわち、前期は海岸に近い低い赤土台地に、後期は離水した海浜砂丘に遺跡が形成されているという立地上の特徴である。一方、前期は下田原式土器を伴う有土器文化で、後期は土器をまったく伴わない文化という相違点もきわめて大きな特徴としてとらえられる。当該編年においては、この土器文化の有無を最優先すべき基準として与那国島トゥグル浜遺跡を後期に位置づけたのである。トゥ

グル浜遺跡は1983年に発掘調査がおこなわれた範囲からは、土器はまったく出土していない（安里嗣淳ほか 1985）。したがって、土器の有無の基準からすれば後期に属するのである。ところが一方では、海岸の低い石灰岩を基盤とする赤土小台地に形成されていることから、立地を基準にすると前期になる。結局土器が1点も得られていない以上、前期には位置づけられないと判断したのである。それでも当時はたまたま発掘範囲から土器が検出できなかっただけで、実は土器を伴うのではないかという懸念が片隅にあって、当該編年表の欄外註において発掘面積も付したのであった。

2. 國分直一による編年の見直し

いわゆる早稲田編年の第一期と第二期が逆転するのではないかとする見解は、私の編年案提起の前に別の観点から國分直一によって示されていた（國分1989 p.12-17）。國分はすでに明らかとなっていた沖縄県教育委員会による先述の発掘成果を用いずに、1989年に遺跡の地層の分析から早稲田編年の第一期と第二期の序列が逆転すべきことを説いたのである。國分の見解は次のとおりである。

「その根拠は、仲間第二貝塚と第一貝塚は僅かに二〇メートルしか離れていて、共通の暗褐色土層の上にのっているが、仲間第二貝塚は基盤の暗褐色土層の上の黒土層中に包含されているのに、仲間第一貝塚は、仲間第二貝塚の混土貝層を含む黒土層の上の腐蝕土層に含まれている。従って時間的に見て、仲間第一貝塚の形成は仲間第二貝塚の形成期より下降する時期であることは明瞭であろう。波照間島の下田原貝塚は赤褐色の基盤層上にありこの土層は仲間第一、第二貝塚地区の褐色土層に対応する土層とみてよかろう。従って、下田原の貝塚が基盤層に直接載っていて、黒土層下に形成されていることは、仲間第二貝塚の形成期に先行するとしても、遅れることは考えられない。」

國分の引用文にいう「暗褐色土層」、「赤褐色の基盤層」とは一般に石灰岩の上層に形成される風化土壤（沖縄本島ではマージと称する）のことであろう。私がさきの編年表および本文で赤土と称しているもののひとつも、このマージ層である。石灰岩地帯における発掘調査ではこの赤土層が現れると、基盤層に達したと判断している。國分は有土器期の仲間第二貝塚と下田原貝塚の文化層はこの赤土層の直上に形成されているが、無土器期の文化層はさらに黒土層を挟んでその上に存在することから、その前後関係は下田原期（有土器期）を古く、仲間第一期（無土器期）を新しく位置づけるべきだとしたのである。

この見解にもとづいて國分は与那国島トゥグル浜遺跡の時期についても次のように言及している。「八重山一宮古諸島の『無土器文化』といわれているものは、新期砂丘上に営まれているものが多く（中略）、トゥグル浜遺跡の石器文化が、眞の意味における先土器の技術を示すものかどうか。調査にあたった研究者のご教示をえたいと切望している」。國分の慧眼には敬服する次第である。私のこの小論は石器技術にはあまりふれないが、國分が編年の逆転の見解を導き出した地層の検討に沿って述べていくこととするので、回答の一端にもなろう。

3. 南琉球新石器時代の遺跡立地とトゥグル浜遺跡

これまでに発掘調査の実施された南琉球新石器時代の遺跡について、その立地をあらためて概観しておきたい。

3.1 土器が出土した遺跡

3.1.1 大田原遺跡（石垣島）（金武正紀ほか 1980、阿利直治ほか 1982）

名蔵湾の低湿地を囲む丘のひとつで、湾に注ぐ名蔵川の脇に舌状にのびる小丘の先端部に形成されている。丘の基盤は粘板岩層で上層は名蔵砾層とよばれる疊混じりの赤土層である。遺跡はこの赤土

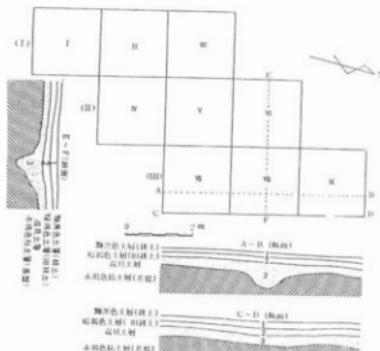
別表3 南琉球圏(宮古・八重山諸島)先史時代の編年

石器の従来段階	新石器時代
時期区分	前期 後期
遺跡の立地	海岸に近い低地石炭岩地帯の赤土台地や、砂礫などの赤土台地に多い。
貝殻や骨器	比較的少種
後石器遺跡	不明(焼石を伴う例はあり)
石器	半磨製・局部磨製が多い。比較的の廣で、小型多い。
土器	下田原式土器 無土器
共伴遺物(在来品)	スイジガイ壳製加工品、サメ革製品
時代表示真跡遺物(在来品)	玉様口縁の白磁碗、乳頭器、滑石製石鏡、開元通寶(銅錢)
遺跡の例	与那國島 未見足 未見足 波照間 下田原貝塚 波照間貝塚 西表島 仲間屋二貝塚 西表島 仲間第一貝塚 石垣島 大田原遺跡 フーコー遺跡 石垣島 瞬桂・赤堀貝塚 宮古諸島 未見足 宮古島 長良貝塚 長底遺跡 波底遺跡

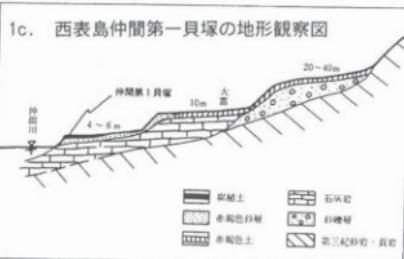
本トマグラフ道路は発掘範囲(約1,500平方メートル)は無土器だが、遺跡の立地は石炭岩台地の赤土上に形成されていて、前の様相を呈している。

1a. 1989年に提起した編年。

(安里嗣淳 1989)

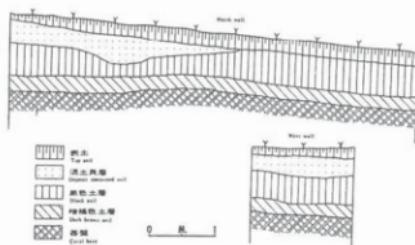


1b. 波照間島下田原貝塚の層序図
(金門丈夫ほか 1964)



第2回 仲間屋付近の地質断面図

(国分直一・古川博恭・三島格「沖縄・仲間第一貝塚採集の石器」『南島考古学』No.7, 沖縄考古学会、1981.12)

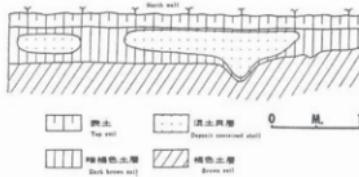


第35回 仲間第一貝塚、IIトレチおよび西壁貝層断面図

Fig. 35. North and west soil sections of the Nakama I, shell-mound.

1d. 西表島仲間第一貝塚の発掘層序

(西村正衛ほか 1960)



第31回 仲間第二貝塚層化剖面図

Fig. 31. Northern soil section of the Nakama II, shell-mound, Iriomote.

1e. 西表島仲間第一貝塚の発掘層序

(西村正衛ほか 1960)

図1 1989年の編年と国分直一の指摘した層序図

層の上、標高約9mの位置にある。遺物包含層の主体は土であるが、名蔵貝塚に由来するとみられるチャートや石英等の角礫を多く含む。

この小丘の下方は名蔵湾の広大な砂地の奥地になっていて、無土器期（後期）に属する神田貝塚があり、丘の麓と接する地点で大田原遺跡の層が下層に、神田貝塚の層が上層に位置することが1978年の発掘調査において確認され、八重山における新石器時代編年を見直す契機となったことで知られる。

3.1.2 平地原遺跡（石垣島）（金武正紀ほか 1980）

大田原遺跡と同じ名蔵湾に面し、南側最奥部の標高約10mの丘に形成される。遺跡の西側を小川が流れ、名蔵平野の砂丘地湿地に注ぐ。丘はパンナ岳の麓にあたり、礫岩層が多くみられる。

3.1.3 フーネ遺跡（石垣島）（新田重清 1979）

同じく名蔵湾に面する。フーネ第一遺跡は標高10m前後の赤土の丘に形成される。調査報告書ではさらに下の段にもあるが、標高は記されていない。しかし、いずれも赤土層の低い丘である。隣接する下方の砂地には、無土器期の文化層が存在する。

3.1.4 ピュツタ遺跡（石垣島）（鳥袋綾野 1997）

島の西海岸、標高5m前後の海岸低地の小平地に形成される。後背地の山麓から降ってくる沢が谷間をつくり、堆積した流土が海岸近くで小さな平地を形成している。遺跡はこの平地にある。土壌は砂地で一見海浜砂丘に間違えるが、後背地於茂登岳の花崗岩を起源とする陸成砂である。したがって、遺跡立地としては他の下田原期における赤土層の小台地と同様、海岸の低い丘の範疇に属するといえる。

3.1.5 仲間第二貝塚（西表島）（西村正衛ほか 1960）

島の東海岸、仲間川の北河口に面した海岸の標高約5mの低い石灰岩上の赤土台地に形成される。畑耕作によってかなり搅乱されているが、当時は赤土面を生活面にしていたことは確かである。

3.1.6 下田原貝塚（波照間島）（西村正衛ほか 1960、金闇丈夫ほか 1964、木下尚子1987、金武正紀ほか1986）

島の北海岸、標高3～9mの低い石灰岩台地に形成される。石灰岩を母岩とする赤土層（マージ）の上に包含層がある。島は南から北にかけてゆるやかに傾斜していて、この貝塚一帯で海岸に至る。隣接して砂地があり、そこに無土器期の大泊浜貝塚が形成されている。その包含層の一部は赤土の下田原貝塚の層に載っていることが判明した。

3.1.7 添道遺跡（多良間島）（岸本義彦 1993, 1996）

島の北側、現在の北海岸より約150m内陸部に入った石灰岩低地の赤土層と砂丘の接点一帯に形成されている。小山を形成する大砂丘の東側（I 地点）と西側（II 地点）とが発掘され、東側は標高9m前後の赤土層の上部で砂混じり層であるのに対し、西側は標高12m前後の砂丘層中に形成されている。この西地点が、南琉球で唯一の海成砂丘に立地する下田原期（前期）の遺跡である。

しかし、このII地点も現在の海岸から約150m内陸部の、しかも標高が12m前後の位置にあり、無土器期（後期）の海浜砂地の様相とは異なるといえる。

3.2 土器を伴わない遺跡

3.2.1 神田貝塚（石垣島）（金武正紀ほか 1980）

名蔵湾の広大な砂地の東奥部、赤土の低い丘に接する地点にあり、貝塚の標高は1.8～3mである。北隣に名蔵川が流れる。上方の丘には有土器期の大田原遺跡がある。

3.2.2 名蔵貝塚群（石垣島）（新田重清 1979、安里嗣淳ほか 1981、鳥袋洋ほか 1985、鳥袋綾野1997）

名蔵湾に面する広大な砂地で、標高2.5～3.5mと低い。貝塚は数カ所に点在しているようであるが、

耕作等によってかなり擾乱されており、本来の状態は把握できない。ところによっては湿地になっている。

3.2.3 フーネ第二遺跡（石垣島）（新田重清 1979）

名蔵湾に面する砂地で後背地の低い丘との接点、標高約3m付近に形成されている。

3.2.4 崎枝赤崎遺跡（石垣島）（阿利直治 1987）

名蔵湾の北海岸に面する広大な砂地に形成されている。屋良部半島のつけ根にあたるところで、貝塚の標高は2～3mである。

3.2.5 吹通川河口遺跡（石垣島）（大浜永亘ほか 1978）

島の西海岸、吹通川の河口一帯の海浜砂丘、標高2～4mの位置に形成されている。砂丘をはさんで両側には標高10mを越える石灰岩の小丘が海岸に向けて突出している。

3.2.6 船越貝塚（石垣島）（岸本義彦 1979）

島の東北海岸の砂丘、標高3～4mの位置にある。貝塚一帯を浦川の支流が流れている。砂丘のつけ根には赤土（マージ）層があり、山手へ向かってしだいに高くなっていく。

3.2.7 嘉良嶽貝塚（石垣島）（盛本勤 1992）

島の東海岸、広大な砂丘のなか標高5～6mの位置にある。基盤砂層は海岸側に向かって枝サンゴ混じり白砂、山手側に向かって疊混じりの黄褐色砂となっている。一帯を小川が流れる。

3.2.8 大泊浜貝塚（波照間島）（金武正紀ほか 1986）

島の北海岸、石灰岩台地がしだいに低くなつて海岸にいたるところに形成された小砂丘である。砂丘の現表面は標高約8mであるが、発掘成果によれば隣の石灰岩台地にある有土器期の下田原貝塚の形成時には砂丘はなかった。その後砂地が堆積するようになり、標高約3.5mのレベルあたりから大泊浜貝塚が形成されはじめ、砂丘と貝塚の堆積をくりかえしながら現況のように石灰岩台地とほぼ同じ標高になったことが判明している。

3.2.9 カイジ浜貝塚下層（竹富島）（金城亀信ほか 1994）

島の南海岸の砂丘にあり、標高約3mの下層が無土器期の包含層である。上層はグスク時代初期に位置づけられる滑石石鍋模倣土器が出土しており、先史時代から次の段階へ移っていく時期の様相を示すものとして注目される。

3.2.10 仲間第一貝塚（西表島）（西村正衛ほか 1960）

島の東南岸、仲間川の河口近くの北岸に堆積した標高5～6mの砂丘に形成されている。下層は石灰岩を基盤とする小台地の無遺物褐色土層になつていて、貝塚はその上の砂層に載っている。

3.2.11 船浦貝塚（西表島）（Richard J. Pearson 1969, 1981, 1990）

島の北海岸の広大な船浦湾に南面し、海岸から約200m内側にある。北側には標高15mほどの石灰岩の露頭がある。貝塚は標高1～2mの砂地である。

3.2.12 西高嶺遺跡（多良間島）（西銘章 2000）

島の北海岸は標高10m前後の砂丘が堆積していて、遺跡はその後背地砂地に形成されている。遺跡一帯の地表標高は12mで、発掘によって確認された後期文化層は7～8mの位置に形成されている。

3.2.13 長間底遺跡（宮古島）（安里嗣淳 1984）

島の東北海岸、後背地を石灰岩台地に囲まれた広大な砂丘のなかに形成されている。後期の包含層は標高1.5mと比較的低い。後背地の中間から湧水が流れだして小川をつくり、遺跡地を通って海に注いでいる。

3.2.14 浦底遺跡（宮古島）（Asato, Shijun 1990）

島の東北海岸、後背地を石灰岩台地に囲まれた広大な砂丘のなかに形成されているのは長間底遺跡に共通する。西側では後背地の中間位置から湧き水が東側では丘の上端近くから湧き水が砂丘地に流れ込んで小川をつくっている。包含層は標高2~3mの位置に形成されている。

3.2.15 アラフ遺跡（宮古島）（江上幹幸 2003）

島の北海岸にあり、立地環境は長間底、浦底両遺跡によく似ていて、後背地に石灰岩台地をひかえた海岸砂丘である。標高は不明だが、離水した広大な砂丘は2~4mの間に位置するものとみられる。

3.3 トウグル浜遺跡の立地

与那国島の北海岸、小川が流れ込む小さな浜の西側、石灰岩の低い岩礁地帯に形成される。包含層のある地域は標高6m前後の赤土の平坦面になっており、それを囲むように周囲には石灰岩の露頭がみられる。この赤土の上に褐色の土層があり、そのなかでもとくに黒色を帯びる層が下部に部分的に形成されているところもある。いずれも遺物包含層である。もともとこの赤土層の上には厚さ1mほどの砂地が載っていて、採砂で失われた後ではあったが、周囲に残された砂層断面中に黒色の腐蝕砂層も観察できた。しかし、その黒色砂層の断面からは人工遺物は検出できなかった。

4. トウグル浜遺跡の編年位置の検討

1985年に刊行された沖縄県教育委員会の発掘調査報告書では、この遺跡の所属は無土器であることを根拠に早稲田編年の第一期とした。また、地層の観察から國分直一が下田原期の可能性を指摘した後にも、私の提起した編年では後期（無土器期）として配置した。その時点では、やはり土器が確認されない以上、前期に配置することに躊躇したのである。しかし、前述したようにその立地条件のこととが気にかかるており、当該編年でもあえてトウグル浜遺跡については前期の可能性も示唆するような注記をしておいた。長年気にかけていたことであるが、このほどかつての國分直一の指摘に沿ってその立地環境を考察し、編年の再検討の根拠とする。

4.1 前期遺跡の立地の特徴

さて、これまでみてきたように有土器である下田原期、私の編年にいう前期の遺跡立地は、前項で概観したように1例を除いて海岸に近い低い赤土小台地および陸成砂地小台地である。下田原期の遺跡が赤土の小台地上に形成されているということについては、古くから多くの研究者によって指摘されてきたが、その後に発見された遺跡も同様の特徴を備えている。石垣島のビュツタ遺跡は一見砂丘のようであるが、花崗岩を源として風化浸食によってできた砂が沢を伝って流出堆積したもので、谷間の出口で小平地をなしている砂質の土壤ともいべきものである。したがって、海岸に面した低い小台地という前期の立地条件に共通している、と解することができる。すぐ前の一段低い海岸は砂地の浜である。

問題は唯一の例外となる多良間島の添道遺跡である。東地点の遺物包含層は石灰岩上の赤土層を基盤に形成されているが、西地点は明らかに砂層中に存在する。発掘調査報告書（岸本義彦ほか1996）におけるF-3・G-3グリッドのV層は下田原期包含層、VI層が地山層であるが、いずれも砂層である。G-7・H-7グリッドの4層は無数の礫を含む下田原期包含層、5層は移行層、6層は地山層で、やはりいずれも砂層である。この包含層の標高は9m前後に位置していて、かなり高く高い砂丘である。また、周知の前期遺跡中もっとも内陸部にある。したがって砂地に形成されているといつても、後期における海浜砂丘とは地形的な様相が異なるといえる。この点についてはあらためて触れる。

4.2 後期遺跡立地の特徴

後期についてもすでに指摘されてきたように、また前項で概観したようにその立地は海浜に隣接し

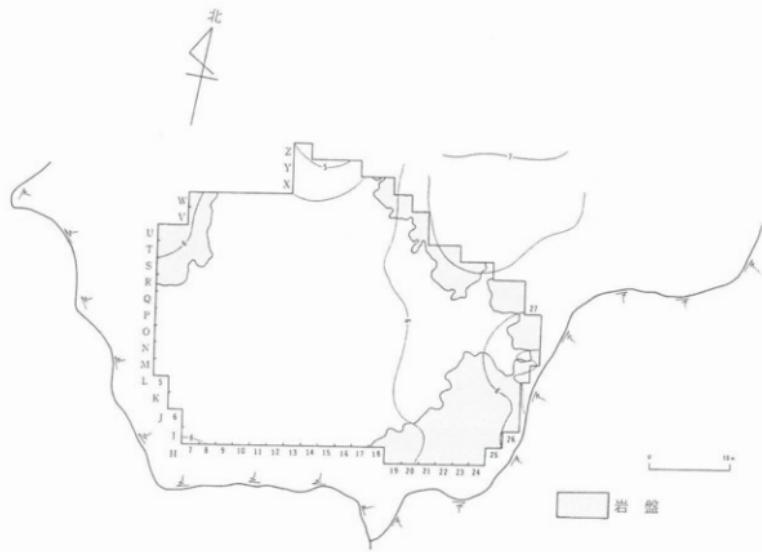


図6 発掘グリッド設定と地形

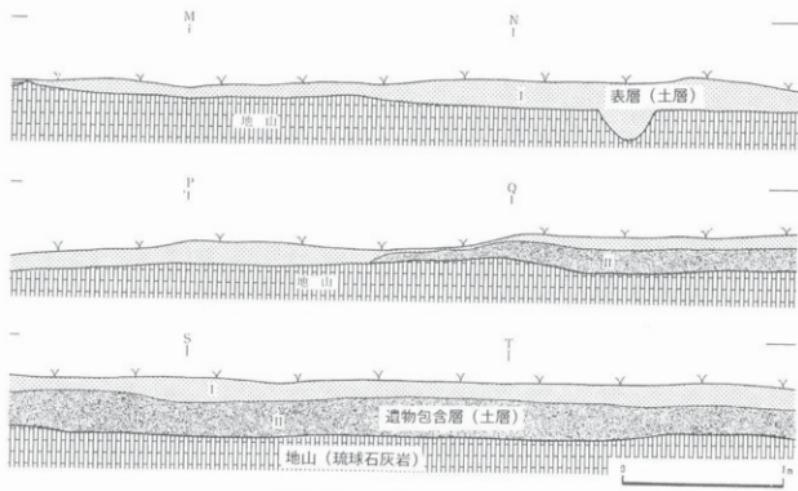


図2 与那国島トゥグル浜遺跡の地形と発掘層序

た新期砂丘である。現在の海浜につながる砂地で汀線より数10m後方の離水した位置にあって、平均的な標高は2~3mである。西表島の仲間第一貝塚は5~6mだが、河口であることから河川の氾濫による川砂の堆積も考慮すると、一般的な海浜砂地よりは高くなることが理解できる。また、波照間島の大泊浜貝塚は標高3.5mのレベルから貝塚の形成が始まり、さらに堆積を続けて約7mに至っているが、ここは北海岸であることから後期と同時進行で「吹き上げ砂丘」的な形成があったものと考えられる。

4.3 トゥグル浜遺跡の立地をどう理解するか

以上の検討によって、南琉球新石器時代の前期は小台地上に、後期は海浜の離水した新期砂丘に形成されるということは基本的特徴として指摘できる。すると、トゥグル浜遺跡は海岸の小台地にあるので、その点だけでいえば当然前期に属するといえる。土器が発見されていないのは現在も変わらない状況ではあるが、結論からいうと赤土層に形成された包含層は前期に含めるべきだろうと考える。それは次の理由による。

前期遺跡は一貫して小台地上に形成されているという地形上の特徴は、重要な要素であり、それは地形形成の年代上の位置をも意味するものとみられる。すなわち、後期の包含層を形成する新期砂丘はこの赤土層の遺物包含層より後に形成されていることは、石垣島における大田原遺跡と神田貝塚の関係、波照間島における下田原遺跡と大泊浜貝塚の関係および西表島の仲間第一貝塚の地層と仲間第二貝塚の地層の比較などから明らかである。この状況をトゥグル浜遺跡にあてはめて考えると、調査報告書に記してあるように赤土層の上にはかつて30~100cmの砂層が堆積していた。この砂地が他の後期遺跡の砂地に相当するものと考えられるのである。新期砂丘に属するもので、下田原期、すなわち前期にはこの類の砂丘はほとんどないか、わずかな堆積にすぎないことは波照間島大泊浜貝塚の砂層観察から明らかである。おそらく、石垣島の大田原遺跡、フーネ遺跡、ピュツタ遺跡などの形成期には遺跡のある小台地は海岸にかなり近く、下方には未だ新期砂丘はそれほど形成されていなかつたのではないか。そして、前期の終末期頃おそらく2千年前をそれほど遅らない時期に離水した新規砂丘を形成しはじめたのではないか。この砂丘において後期の人々の生活が展開され、包含層を堆積していったのであろう。

ここに貴重な報告がある。古川博恭が琉球列島の遺跡の地層を観察した論考で、与那国島トゥグル浜遺跡に隣接する砂丘断面の観察も扱われている（古川博恭 1980）。これによると図2のように標高9mの砂層のなかに2枚の黒色腐植土層があり、上層腐植土層は八重山式土器をともない、下層の腐植土層は無土器層である。しかも下層は明らかに島外から持ち込まれた石が含まれており、年代測定結果も1,620B.P.、1665B.P.の値が得られている。すなわち、後期の無土器期に含まれる年代なのである。古川によれば琉球列島における新期砂丘の形成はきわめて齊一性の高い事件によるものであり、砂丘の大部分は2,400B.P.以降の堆積物であるという。このことに照らしても、トゥグル浜遺跡の包含層の土層は新期砂丘の下部に存在するわけであるから、当然後期より前すなわち前期に属することは明らかである。

この場合、多良間島の添道遺跡は前期に属するにもかかわらず、砂丘に形成されていることに矛盾があるよう見える。しかし、前項で述べたように添道遺跡の存在する砂丘は海岸から約150mも内陸部にあり、標高は9m前後と他の後期遺跡の砂地と比べて約3mも高い。ここは島の北海岸に面したところにあって、北風におおられた吹き上げ浜的な砂丘形成が古くから進行し、前期の時期にはすでに付近の石灰岩台地と一緒にとなった地形を形成していたとみられるのである。つまり、添道遺跡は内陸部の砂地を含めて前期における赤土の小台地と同じような地形であって、たまたま東地点では赤

土の台地に居住し、西地点では砂丘上に居住したものと理解できる。この砂丘は古砂丘に属し、北側海岸の新期砂丘とは形成の年代が異なると解すべきであろう。

前期は海岸に面した小台地に居住していたことについては、現在のところ共通の特徴であることが再確認できる。トゥグル浜遺跡の上層にあった砂層は新期砂丘で、後期の遺跡が形成されるとすればこの砂層でなければならない。もちろん、別の場所の上層にもともと砂層をもたない石灰岩台地においては、後期およびその後に遺跡ができる可能性はある。しかしトゥグル浜遺跡は、新期砂丘の形成が開始された時点で赤土小台地が覆われたということになる。そうすると、擾乱でない限り両層の間にその後の別の層は形成されないはずである。すなわち、発掘調査において確認された赤土由來の土層であるⅠ層とⅡ層の遺物包含層は、後期直前および後期と同時進行で形成された新期砂丘に「時間の蓋」をされているのである。このような事実から1983年に発掘されたトゥグル浜遺跡の年代は前期に属せしめるべきである。

4.4 出土遺物の比較

遺跡の立地からトゥグル浜遺跡は前期に位置づけられるべきだとしたが、土器を除く出土品においても前期的様相がみられるのであろうか。ここで、トゥグル浜遺跡出土品と他の前期・後期遺跡出土品とを比較してみたい。

4.4.1 石器

石器は石斧、石製ドリル、敲打器、すり石、砥石、石皿が出土している。

4.4.1.1 石斧

まず、南琉球の石斧は粗面整形が主であるという共通点が両期をとおしてみられる。粗面整形というのは、從来いわれてきた半磨製、局部磨製などの表現を全体的な器面の状態から表現を変えてみたものであるトゥグル浜遺跡出土の石斧は平面形でみると、全体形が頭部と刃部の角が丸味をもつ短冊形が多く、長さは12cm以下の比較的小型の石斧が多い。三角形のいわゆる撮形は少ない。刃は多くが弧状をなす。厚さは扁平形から稍円形まである。刃が胴部（基部）よりも細い狭刃形石斧も多い。（報告書では尖斧の用語を使用し、南方との関連の可能性を指摘したが、高宮廣衛氏の論考によれば海外における尖斧との混同の恐れがあるので、同氏が命名した狭刃形石斧の名称を用いる）。断面が方形で片刃の磨製石斧は出土していない。

他の遺跡においては、平面形撮形は前期に少ない傾向があり、狭刃形石斧は両期によくみられる。磨製柱状片刃石斧がわずかながら崎枝赤崎貝塚、船越貝塚にみられ、後期特有の可能性がある。断面が方形をなす石斧自体は前期・後期をとおして存在するが、この2例とは趣を異にする。

4.4.1.2 石錐

トゥグル浜遺跡で細長く小さな石製品を石製ドリルとした。これに類するとみられるものは下田原貝塚（前期）にあり、尖頭器および鑿状利器として報告されている。他の遺跡では未発見である。

4.4.1.3 敲打器・磨石

両期によく出土する。

4.4.1.4 砥石

トゥグル浜遺跡以外ではビュツタ遺跡、下田原貝塚（以上前期）と仲間第一貝塚、名蔵貝塚群（以上後期）で出土している。しかし、これは石皿としているものと区別がつきにくいこともあるので、器名は再検討をする。

4.4.1.5 石皿

トゥグル浜遺跡以外では下田原貝塚、フーネ遺跡、ビュツタ遺跡（以上前期）で出土している。後

期では唯一嘉良嶽貝塚で大型の石皿が得られている。

4.4.2 貝器

貝器はトゥグル浜遺跡では剥離痕をもつヤコウガイ蓋、貝珠、貝匙、有孔卷貝が出土している。ほかにクモガイ突起部加工品と、シャコガイ製貝斧とみられるものが表面採集で得られている。他の遺跡で両期に共通し後期に多い、スイジガイ棘状突起加工品は出土していない。

4.4.2.1 剥離痕をもつヤコウガイ蓋

トゥグル浜遺跡では446個も出土している。自然形も含めると1,529個も出土しており、きわめて特異な状況といえる。ところが身（本体部）の方は推定最小個体数が95個、総重量が62kgと蓋の数に比べるとかなり少ない。ヤコウガイが交易の対象であったのかと思われるようなデータだが、本論的目的ではないので触れない。他の遺跡では下田原貝塚（前期）の22個のみが知られる。

4.4.2.2 貝珠

主にイモガイ科の小さな貝の殻頂部を小玉状に加工したものである。全体的に出土数は少ない。下田原貝塚（前期）では比較的多量だが、名蔵貝塚、浦底遺跡、アラフ遺跡（以上後期）でわずかに得られているだけである。

4.4.2.3 貝匙

トゥグル浜遺跡ではわずかに1個だが、イモガイ科のニシキミナシガイとみられる卷貝の腹部を打割してスプーン状に切り取り、周縁を加工したものがある。貝種は異なるが、他の遺跡では下田原貝塚（前期）でオオベッコウガサガイ製、大型のタカラガイ製が、大泊浜貝塚（後期）ではヤコウガイ製が得られている。総数はかなり少ない。

4.4.2.4 有孔貝製品

わずかに卷貝と二枚貝が各1個だけだが、卷貝はオニコブシ貝に、二枚貝はリュウキュウサルボウ貝に孔を穿ったものである。他の遺跡ではサそのほかに有孔のヒメジャコ、シレナシジミなども得られている。両期にまたがる。

4.4.3 骨牙器

トゥグル浜遺跡の骨牙器にはサメ歯製品、骨錐、骨針がある。サメ歯製品には北琉球のような貝や石で模倣したものは得られていない。また、猪牙歯製品も出土していない。

4.4.3.1 サメ歯製品

トゥグル浜遺跡で6点、下田原貝塚（前期）で20点の他、宮古島の浦底遺跡、アラフ遺跡（以上後期）からも出土している。まだ遺跡数は少ないが両期にまたがる。

4.4.3.2 骨錐

イノシシの骨を利用したもので、トゥグル浜遺跡で3点得られた。他に下田原貝塚の10個以外は後期のみで、隣の大泊浜貝塚、宮古島の長間底遺跡、浦底遺跡から少量得られている。両期に共通する。

4.4.3.2 骨針

トゥグル浜遺跡で2点、他の遺跡では前期の下田原貝塚で13個得られているだけである。

4.4.4 外来品・模倣品

後期の後半に中国唐代の銭貨「開元通寶」が、終末期に奄美徳之島産カメヤキ、九州産滑石製石鍋およびその模倣品、中国産玉縁白磁が南北琉球諸島に流布しているが、トゥグル浜遺跡では出土していない。

4.5 出土遺物からみたトゥグル浜遺跡の傾向

前項で出土遺物から前期と後期の比較をしてみたが、明確に相違を指摘できるのは土器が前期に、

南琉球新石器時代遺跡出土資料比較表

○印は出土が確認された遺跡と資料 △印はグスク初期の土器

時 期 区 分	前 期										後 期										アラフ遺跡	
	平地	大田原	ピュネツタ	仲間	下田原	添道	トウグル浜	名貝塚群	神田貝塚	崎枝赤崎貝塚	嘉良嶽貝塚	大泊浜貝塚	仲間第一貝塚	船浦貝塚	カイジ浜貝塚	船越貝塚	西高嶺貝塚	長間底貝塚	浦底遺跡			
遺 跡 名	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	遺跡	アラフ遺跡	
石 器	石斧	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○○	
	石錐						○		○													
	石鑿					○																
	有孔石塊								○	○												
	磨石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	敲石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	砥石					○	○		○									○				
貝 器	石皿	○	○	○	○	○	○														△	
	貝斧								○		○										○○	
	ヤコウガイ蓋						○	○														
	スイジガイ利器						○	○	○		○	○					○	○	○			
	有孔卷貝		○	○	○	○		○	○				○							○○		
	有孔二枚貝		○	○	○	○		○	○			○	○	○							○	
	貝刃	○	○																			
	貝珠				○	○	○		○	○										○○		
	貝盤										○									○		
骨歯牙器	貝匙		○	○					○				○									
	サメ歯製品						○	○												○○		
	骨針					○		○														
	骨錐					○		○								○				○○		
	有孔椎骨					○																
外 来 品	猪牙歯製品					○													○	○		
	鉄製品															○	○	○	○			
	開元通寶										○	○		○								
	滑石製石鍋												○									
	石鍋模倣土器																○					
	カメヤキ													○								
玉縁白磁碗													○									

注 トウグル浜遺跡で貝斧が発掘地区外から表面採集されている

シャコガイ製貝斧が後期に特有のものであるという点だけである。石錐、石鑿、剥離したヤコウガイ蓋、貝刃、骨針などにも時期的偏りがみられるが、ヤコウガイ蓋を除いては数量的に少なく、判断が難しい。剥離したヤコウガイ蓋は北琉球においては後期に集中している。もしもトゥグル浜遺跡が前期に属すると、南琉球では前期にのみ見られるということになる。

有孔石塊および大型の貝盤は後期特有のものだと考えるが、ここでは保留しておきたい。石斧についてはその形態により若干の時期的相違があるようみえるが、統計的な傾向があり、個別の石斧それ自体によっては区別しがたい。このことは高宮廣衛の研究によても明らかである。むしろ粗面整形という特徴が両期をとおして指摘でき、基本的には前期と後期に明瞭な相違はない。よくいわれる短冊形石斧、狭刃形石斧も両期に共通するのである。したがって、ここでは石斧の細分による比較は表示しなかった。なお、岸本義彦も指摘するように、厚手の磨製柱状（方角）片刃石斧も後期特有だという印象をもっているが、下田原貝塚（前期）に出土例があり、後期に限定されない。

前期には土器があり後期にはないこと、後期には貝斧があり前期にはないことはおそらく不動の特徴であろう。

さて、これらの状況とトゥグル浜遺跡の出土品とを比べると、いくつかに前期との共通性がみられるが、未だ不確定要素のある資料項目であり、これをもって前期に属するとみることはできないだろう。しかし、一方で貝斧や有孔石塊、それに大型貝盤がトゥグル浜遺跡にないことは、この遺跡を後期に属させる決定的な根拠も欠いているといえる。

4. 6 トゥグル浜遺跡採集のシャコガイ製貝斧

調査期間中、発掘地区のすぐ外の地表からシャコガイ製の貝斧とみられるものを採集した。刃部を欠いているので決定的ではないが、残存部の形態からまず貝斧とみてよいだろう。貝斧は発掘においては得られていない。それではこの貝斧はどこに属するのであろうか。ここで、上層にかつて存在した砂層について考えたい。発掘地区的西側には砂層があり、そのなかに黒色の層もみられたが、断面からは人工遺物は検出できなかったことは前述した。この砂層には後期の包含層とみられる腐植砂層が存在していたことは古川博恭の論考で指摘したとおりである。後期の遺跡の場合、なかなか人工品を検出できないことがある。宮古島の長間底遺跡、アラフ遺跡も調査範囲のわりには人工品がかなり少ない。多良間島の西高嶺遺跡は黒色砂層のなかに火成岩礫の集中、焼土面、獸骨の出土をみながら、結局人工品の発見には至らなかった。そもそも貝斧を伴う遺跡は石斧がかなり少ない傾向があるのである。トゥグル浜遺跡表面採集のシャコガイ製貝斧は、付近に後期の遺跡が存在することを示唆するものとして位置づけたい。

結

以上、トゥグル浜遺跡の立地、出土品について他の南琉球新石器時代遺跡との比較をしながら検討してみた。土器が発見されていないという点をのぞけば、トゥグル浜遺跡は前期に位置づけても十分にその条件を満たしているといえる。また、それは後期であるとする決定的な状況をもっていないことも確認された。石灰岩を基盤とする赤土の小台地に生活面をもち包含層を形成していること、その上にかつて存在した砂丘は新期砂丘であり、年代的にもその砂層下の赤土中の包含層は後期よりも古い時期であるべきことも確認した。むしろ、地層からすると後期のままでは問題があるとさえいえる。

現状は、土器が出土すれば前期として確定できる状況にあるといえる。そうすると、前期に土器を製作使用しない集団や文化が存在したのかということになる。現時点では、そのように解するのではなく、いずれ隣接地域で土器が発見されることを期待したい。土器を欠いているという重要な弱点を

かかえつつも、私の編年表にトゥグル浜遺跡を後期に位置づけたことを撤回し、前期に属する可能性がきわめて強い遺跡として扱いたい。

(あさと しじゅん：所長)

註

- 安里嗣淳ほか 1981 『名蔵貝塚群発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。
1985 『与那国島 トゥグル浜遺跡』—与那国空港整備工事に伴う発掘調査報告、沖縄県教育委員会。
安里嗣淳 1984 『長間底道跡発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。
1989 『南琉球文化圏における無土器新石器期の位置』『琉中歴史関係論文集』、第2回琉中歴史関係
国際学術会議実行委員会編
Asato,Shijun 1990 " THE URASOKO SITE ", A Sketch of the Excavation in
Photographs , The Gusukube Town Board of Education,
阿利直治ほか 1982 『大田原遺跡』、石垣市教育委員会。
阿利直治 1987 『崎枝赤崎』、石垣市教育委員会。
江上幸幸 2003 『速報 アラフ遺跡』、『考古学ジャーナル』No.497, 1月、ニューサイエンス社
大城 慧 1979 『12.平地原遺跡』、『石垣島の遺跡』、沖縄県教育委員会。
大浜永亘ほか 1978 『吹通川河口遺跡の調査概要』、沖縄県教育委員会。
金闇丈夫ほか 1964 金闇丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文『琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査』、『水産大
学校研究報告（人文科学編）』9号。
岸本義彦 1979 『ナガタ原貝塚・船越貝塚発掘調査報告書』、沖縄県教育委員会。
1993 『第5章第1節 多良間添道遺跡』、『多良間村の遺跡－村内遺跡詳細分布調査報告』、多良間
村教育委員会。
1996 『多良間添道遺跡発掘調査報告』、多良間村教育委員会。
木下尚子 1987 『八重山下田原貝塚出土石器』『地域文化研究』、地域文化研究紀要2、梅光女学院大学
金武正紀ほか 1980 『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告－大田原遺跡・神貝塚・ヤマバレー遺跡・附編：
平地原遺跡表面採集遺物』、沖縄県教育委員会。
1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第1・2・3次発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。
金城亀信ほか 1994 『竹富島カイジ浜貝塚－竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告』、沖縄県教育委員
会。
国分直一 1989 『八重山の古代文化観書』『地域と文化』第53・54合併号
島袋綾野 1997 『名蔵貝塚はか発掘調査報告』、石垣市教育委員会。
島袋洋ほか 1985 『名蔵貝塚群発掘調査報告書－県道改良工事に伴う緊急発掘調査』、沖縄県教育委員会。
西村正衛ほか 1960 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚「八重山の考古学」瀧口宏編『沖縄 八重山』、校倉書
房刊
西銘 章 2000 「第3章 新多良間空港整備予定地周辺の調査」、『空港整備予定地周辺の遺跡』、沖縄県教育委
員会。
新田重清 1979a 『11.名蔵貝塚群』、『石垣島の遺跡』、沖縄県教育委員会。
1979b 『15.フーネ遺跡群』、『石垣島の遺跡』、沖縄県教育委員会。
古川博恭 1980 『琉球列島における文化遺跡包含層の層序と編年』『第四紀研究』第18卷第4号、日本第四紀学

会。

- 盛本 熱 1992 「新石垣空港建設計画予定地内の遺跡分布調査」、『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡』、沖縄県教育委員会。
- Richard J. Pearson 1969 "Archaeology of the Ryukyu Islands", University of Hawaii Press, Honolulu, Hawaii.
- Richard J. Pearson 1981 Ryukyu Archaeological Research Team "Subsistence and Settlement in Okiawan Prehistory, Kume and Iriomote." Laboratory Archaeology, University of British Columbia, Vancouver, Canada.
- Richard J. Pearson 1990 ピアソン・リチャード 1990・安里進「久米島と西表島における遺跡の発掘」『文化課紀要』第6号、沖縄県教育庁文化課。

追 記

本稿脱稿後に、県立埋蔵文化財センターより依頼していたトゥグル浜遺跡出土の貝殻を試料とした年代測定の結果がもたらされた。結果は以下のとおりである。とくにこのことについて検討する時間がないので、データの報告にとどめる。

年代測定値（補正をおこなっていない値）

① シャコガイ R-22 グリッド II a層 3770±40 y BP

② ヤコウガイの蓋 M-21グリッド II a層 3890±40 y BP

測定者 パリノサーベイ株式会社（東京都中央区日本橋橋本町1-10-5）

依頼者 沖縄県立埋蔵文化財センター

測定期日 2003（平成15）年2月～3月

グスク時代の土壙墓・石組墓—発掘資料から—

Pit Burial and Rock-walled Grave of Gusuku Period – Excavated Examples –

瀬戸 哲也
SETO Tetuya

ABSTRACT: As well as the other cultural aspects, the burial practices in Okinawa are unique and are different from those in the mainland Japan. The recent excavations of Gusuku-period sites; however, have been recovering the pit-burial and the rock-walled graves that did not appear in the Modern period. Such types of burial show some similarities with the mainland types in form, burial method and site location. This fact indicates that the cultural influence from the east Asian districts including mainland Japan was increased at that time, effecting not only the material culture but also the customary practices such as burial.

1. はじめに

沖縄県の墓制では、一定の間風葬により遺体を白骨化させ、その骨を洗い藏骨器である厨子甕に納め、掘り込み墓・亀甲墓等に最終的に葬るというものが基本とされる。この墓制は、近世17世紀には広く行われたとされるが、庶民階層までに広がるのは18世紀それも後半になってからだとされる。この墓制の始まりを考える上で最も古い資料として、最近の調査で13世紀後半に遡る可能性が考えられる浦添ようどれがあるが、近世・近代に行われた葬法と完全に同一かとどうかは判らない。

それでは、近世の前時代であるグスク時代では、どのような墓制が行われていたのであろうか。近世以降の墓制につながると思われる岩陰などに埋葬し、その骨を集め骨する墓制は貝塚時代から引き続いて見られる。一方、近世以降には主流ではない土壙墓や石組墓といった墓制が、類例は未だ多いとは言えないがグスク時代には発掘調査により確認されている。これらの墓制は同時期つまり中世期の日本本土にも見られ、沖縄の墓制または当時の社会を考える上で、非常に興味深いものである。このような認識のもとに、グスク時代の墓制の土壙墓・石組墓を検討することにしたい。その方法として、まず前代の貝塚時代の墓制資料を概観した上で、次に当該期の墓制について土壙墓・石組墓を中心にしてその特徴をまとめることとする。最後に、この墓制を日本本土との比較することで、その共通・相違点を浮かび上がらせ、今後の研究の課題を導いて行きたい。

2. 貝塚時代の墓制の概観

グスク時代の墓制を検討する前に、その前時代である貝塚時代の墓制を概観し、大まかな墓制の変遷をつかむことにする。

1) 墓制の概観

貝塚時代の墓制として、岩陰・洞窟への埋葬と、箱式石棺墓・土壙墓が挙げられる。岩陰・洞窟への埋葬するものとしては、貝塚時代中期（縄文時代晚期）の北谷町クマヤー洞穴遺跡（北谷町教育委員会1989）、伊是名村具志川島遺跡群岩立地区（安里・木下・中村他1979）などがある。これらの遺跡では、改葬や集骨葬が行われている。一方、箱式石棺墓・土壙墓は、貝塚時代中期末～後期初頭（縄文時代末～弥生時代前期）の読谷村木綿原遺跡（当真・上原他1978）、これよりやや時期が古い貝塚

時代前期末～中期中葉（縄文時代後期末～晩期中葉）の宜野湾市真志喜安座間原第1遺跡（呉屋他1989）等で検出されている。この箱式石棺墓については、弥生時代の北西九州からの影響によるものとする意見が多くあった。しかしながら、時津裕子は奄美諸島の例を含めて考察しており、南西諸島の箱式石棺墓は九州からの一方的な影響だけでなく在地の要素をより重要視している（時津2000）。

2) 箱式石棺墓・土壙墓

さて、グスク時代の墓制を考える上では、箱式石棺墓・土壙墓、つまり改葬を伴わない土葬墓がより重要と思われる。そこで、この墓制についてその特徴を簡潔にまとめる。

時期的には、箱式石棺墓については先に挙げた木縄原遺跡、真志喜安座間原第1遺跡のようにおおよそ貝塚時代中期である。しかしながら、土壙墓の方は、貝塚時代後期中葉の宜野湾市真志喜安座間原第2遺跡（呉屋他1989）で2基、貝塚時代後期後半の渡名喜島西底原遺跡D地点（当真他1981）で8基と、貝塚時代後期にも見られる。

葬法としては土葬であり、その埋葬姿勢は足を伸ばしたままの伸展葬が多い。また、埋葬施設には土壙のみや、いわゆる箱式石棺、またはおそらく組み合わせと思われる木棺がある。立地としては、集落よりやや離れた場所に數～数十基の墓が営まれ、集團墓地となることが多い。墓群としての構成は、数基の墓がゆるやかな列状の単位として配列されている。現状では、顕著な遺構の切りあいが見られるものはない。副葬品としては、土器や貝製品等が見られるが、各墓に大きな差は見られない。

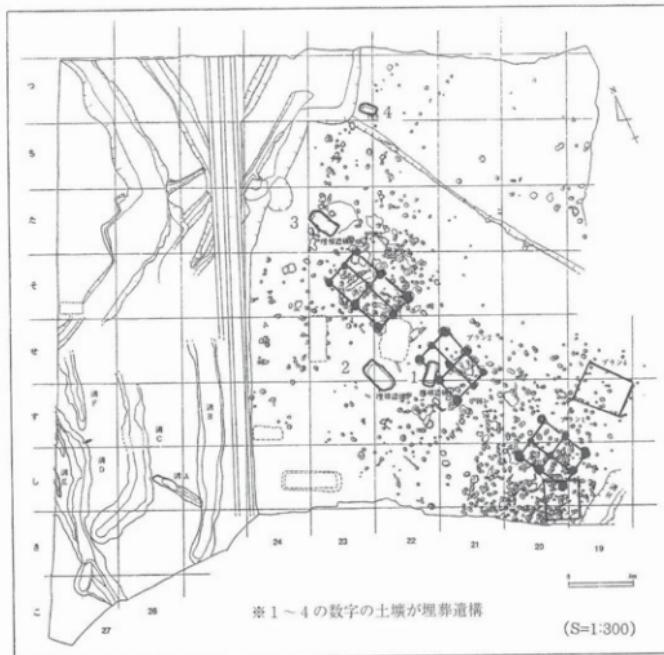


図1 伊佐前原遺跡第9面遺構図（當銘2001一部改変）

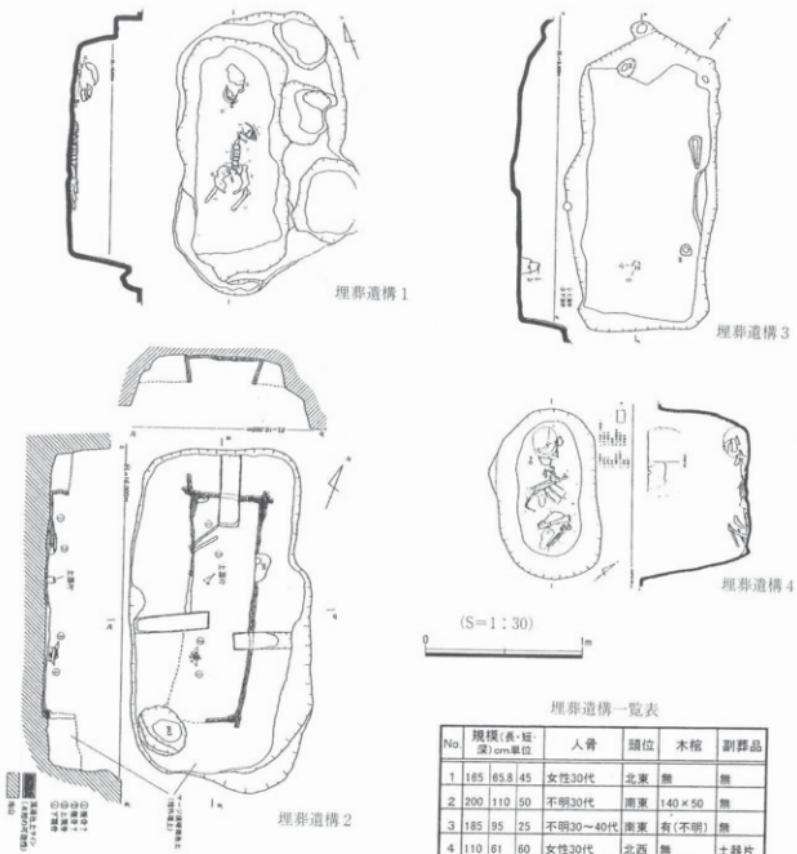


図2 伊佐前原遺跡出土墓 (當銘2001一部改変および作成)

また、箱式石棺自体にも大きな個体差はなく、強いて被葬者の階層差を強調するならば、土塙墓との違い程度と思われる。

3) 小結

簡単に貝塚時代の墓制をまとめると、岩陰・洞窟への埋葬と、箱式石棺や土塙に伸展葬による土葬の両者が、少なくとも貝塚時代中期からあった。これらの墓制は両者とも、集落とやや離れた場所に複数基の墓で構成される集団墓地を営むことが特徴である。また、両者とも墓の内容、副葬品等に大きな違いはなく、子供の埋葬も見られるので、集落構成員の通常の墓地という位置付けが妥当と思われる。両者の墓制の違いは、おそらくその集落の立地的な違いが一つの要因と思われるが、被葬者の集団や時期的な差など、これから更に検討する必要があろう。しかしながら、真志喜安座間原第1遺

No.	規模(長・短・深)cm単位	人骨	頭位	木棺	副葬品
1	185 65.8 45	女性30代	北東	無	無
2	200 110 50	不明30代	南東	140×50	無
3	185 95 25	不明30~40代	南東	有(不明)	無
4	110 81 60	女性30代	北西	無	土器片

跡では土壙墓・箱式石棺墓が大半であるが、他に改葬を伴う土器棺墓や集骨墓等も検出されており、この両者が全く排他的なものとは言えないであろう。

3. ゲスク時代の土壙墓・石組墓

ゲスク時代の墓制については、発掘資料では土壙墓・石組墓の他に、前代で見られた洞窟・岩陰への埋葬も見られる。冒頭で述べたように、土壙墓・石組墓は日本本土でも同時期に見られており、ゲスク時代は他地域との交流・影響により様々な社会変化が起きた時代である観点から、この墓制について中心に検討していきたい。特に、事例的に増加しつつある土壙墓についてより詳しく見て行きたい。

1) 土壙墓

土壙墓の事例としては、後兼久原遺跡（北谷町教育委員会1997）、伊佐前原遺跡（當銘他2001）などがある。正式報告されている伊佐前原遺跡の例を中心に検討する。

伊佐前原遺跡は、宜野湾市伊佐の石灰岩段丘の前縁に存在する11世紀末～14世紀代の集落跡である。遺構としては、多数のピット群から復元された掘立柱建物5棟、耕作痕跡、埋葬遺構4基が検出されている（図1・2）。

この埋葬遺構は、全て土壙墓であるが、木棺を使用したものが2基ある。注目すべき点としては、まず全て屈葬の姿勢を取って埋葬されているということである。次には、女性と判別している埋葬遺構1・4には木棺の使用がなく、木棺を使用している埋葬遺構2・3よりも土壙の規模が小さいことが挙げられる。このことから考えると、埋葬遺構2・3は男性が葬られた可能性が指摘できよう。副葬品は見られず、埋葬遺構4の頭部の周辺にゲスク土器片が被せるように検出されたのみである。このゲスク土器の出土により、詳細な時期は限定できないが、集落の存続期間もしくは前後に営まれたのは確実である。

次に土壙墓と建物群の位置的関係について見ておく。まず、各土壙墓は2間×2間総柱建物3基の周辺に一定の距離を持って散在している。そして、各土壙墓の主軸方向であるが、この建物群と大体同一の方向をもつものが多い。このような位置関係と先述したゲスク土器片が出土したことと合わせると、土壙墓と建物群は同時性がある可能性が高いと思われる。そして、よりその時期を限定するならば、図面・写真を検討すると埋葬遺構を切っている柱穴があること、報告書によると総柱建物群は集落の古い時期に当たる可能性が高いことから、この土壙墓もやはり集落の存続時期でも古くなると思われる。

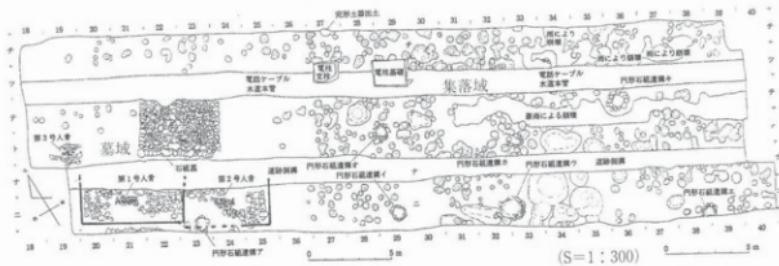


図3 石垣貝塚遺構図（下地・阿利1993一部改変）

一方、後兼久原遺跡でも、4基の土壙墓が検出されており、墓の内容および建物群との時期（12～13世紀）・位置関係などは同様の特徴を持っている。この遺跡でも、土壙墓を切っている柱穴があり、やはり集落の古い時期と考えられる。他に注目すべきこととして、子供の埋葬が見られる。

グスク時代の土壙墓の特徴をまとめると、屈葬による埋葬であること、集落に近接して営まれること、墓の数が数基でそれぞれは密に隣接することがないこと、建物群と主軸がほぼ同一であることが挙げられよう。このことから考えると、これらの墓の被葬者は集落構成員全体ではなく、その一部の人々である可能性が考えられよう。しかしながら、墓には副葬品はないことから考えると、この土壙墓自体がそれほど顕著な階層差を表しているとも思えない。また、この2例では集落の古い時期にこれらの土壙墓が営まれた可能性があることも注目すべきである。

2) 石組墓

次に石組墓の例として、石垣市石垣貝塚（下地・阿利1993）を検討する（図3）。この石垣貝塚では、15世紀後半ごろの墓が4基検出されている。これらの中で特に注目すべきものは、一辺約5mの方形石組の下層に焼骨が検出されており、火葬墓とすれば興味深い。さらに、3体の人骨が石棺や土壙に屈葬されたものも検出されており、先の石組墓を意識したように位置している。つまり、ここでは土葬および火葬という二者の葬法が見られる。

この墓群は、その東側に柱穴と思われる多数のピット群が見られ、集落に近接している。この石組みを構築するためにはそれ相当の労働力および土地が必要であると思われ、集落の有力者の墓である可能性も考えられよう。この石組墓は先の土壙墓と地域は異なるが、時期的には後出するので少なくともこの時期には階層的に差がある墓が現れてきた可能性も指摘できよう。



北谷町後兼久原遺跡1号人骨（北谷町教育委員会1997）



大阪府西の辻遺跡第9次木棺墓1（福永他1996）

写真1 12・13世紀の土壙墓比較

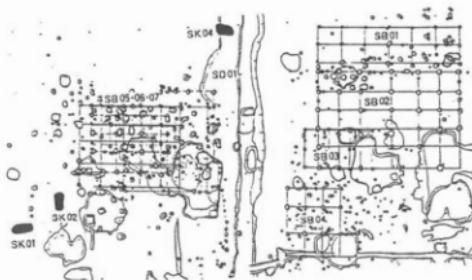
3) 小結

これら土壙墓・石組墓の他にも、14~15世紀の那覇市ヒヤジョー毛遺跡（金武1994）のように岩陰で多数の人骨が埋葬された事例があり、先の貝塚時代および近世以降の墓制と共通したものである。また、この遺跡では、集落より離れており、多数の埋葬が行われる集団墓地であることもそれを裏付ける。

さて、ここまで検討してきた土壙墓は、先の貝塚時代のものと土壙を掘削する点は共通しているが、伸展葬という埋葬姿勢、集落に近接するという位置、各墓が密集しないことなど、異なる点が多い。一方の石組墓については、石組という視覚的な示標を構築する点で現状では前代には全く見られないものである。また、火葬人骨が見られるというのは葬法的にも異なったものが現れたということである。これらの相違点については、周辺地域の一つ日本本土の中世墓との比較を行うことで、よりその特徴を浮かび上がらせたいと思う。

また、浦添グスク、勝連グスクでは城壁の下から人骨が出てくる事例もあり、グスク時代においてもやはり多様な埋葬が見られる。

4. 日本国土の中世墓との比較
前項で見てきたグスク時代の土壙墓・石組墓の特徴をより明確にする一つの方法として、この時期により密接な交流・影響があったと考えられる日本本土の中世墓との比較を行いたい。まずその前に、日本本土の中世墓の概要について述べることにするが、日本本土でも地域によって特色があるのは当然である。しかしながら、中世期の発掘資料が増大している中において、概ねの墓制の変化・傾向については大きな一つの傾向があることが判明してきた（藤澤1995）。ここでは、筆者の管見により具体的な資料は、主に西日本のものを使用しながら、中世墓の概略を述

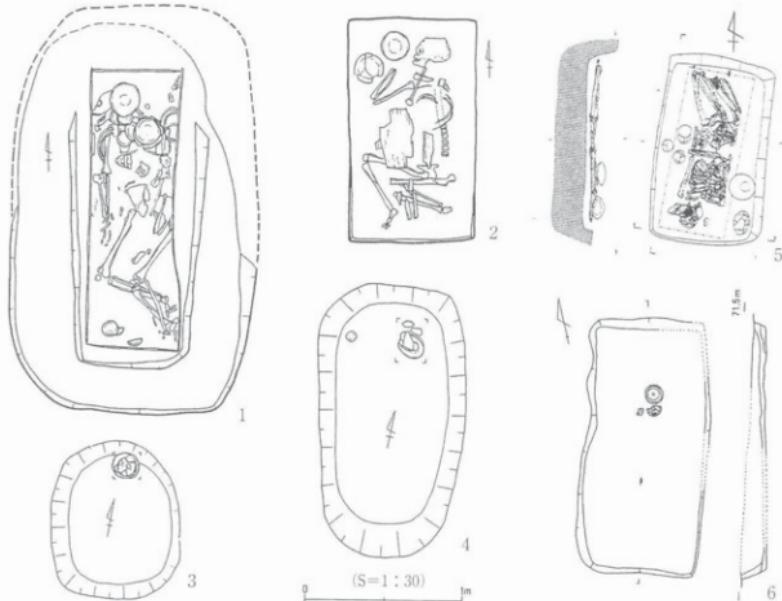


兵庫県福田天神遺跡（橘田1991）



大阪府栗生間谷遺跡（瀬戸1999）

図4 12~13世紀の西日本における土壙墓検出集落



1. 福岡県大宰府学校院地区SX863 2. 同SX864 3. 大阪府日置莊遺跡（その3）土塙墓1
4. 同土塙墓2 5. 大阪府西の庄遺跡第9次木棺墓1 6. 大阪府栗生間谷遺跡（その3）墓3

図5 12～13世紀の西日本における土塙墓（江浦1988・瀬戸1999）

べる。

1) 中世墓の概略

11～13世紀には、集落に隣接して1～数基で構成される土塙墓が、東海・北陸から四国・北部九州、つまり主に西日本各地で広く営まれるが、特に近畿地方ではこの時期の集落では通常検出される。この土塙墓を、文献史学の研究を援用してその集落の開発者が葬られたとされ、屋敷神信仰の現れとして「屋敷墓」と言われる（勝田1988、橋田1991）。また、この時期には集団墓地の事例がほとんど確認されておらず、この屋敷墓の動向と合わせて検討する必要がある。

13～14世紀には、数十～数百基の墓で構成される大規模な集団墓地が形成され、葬法は火葬墓が増え始める。例えば、筆者が担当した大阪府栗栖山南墳墓群では14・15世紀の火葬・土葬の割合は約7：3であり、地域による違いはあるが、火葬墓が増大する傾向は全国的なものである。そして、16・17世紀には一部の地域を除き、全国的に土葬墓が多くなるという傾向が見られる。

グスク時代の墓制の類例を考える上で、土塙墓と石組墓についてそれぞれ詳細に見ていくたい。

2) 土塙墓

先ほど見たように、グスク時代の土塙墓は、おおよそ12～13世紀に営まれている可能性が高い。そこで、西日本の中世前期（11～13世紀）の土塙墓、いわゆる「屋敷墓」について概略してみる。

西日本の土塙墓の葬法は、屈葬による土葬で、木棺の使用も見られ、グスク時代のものと形態的に

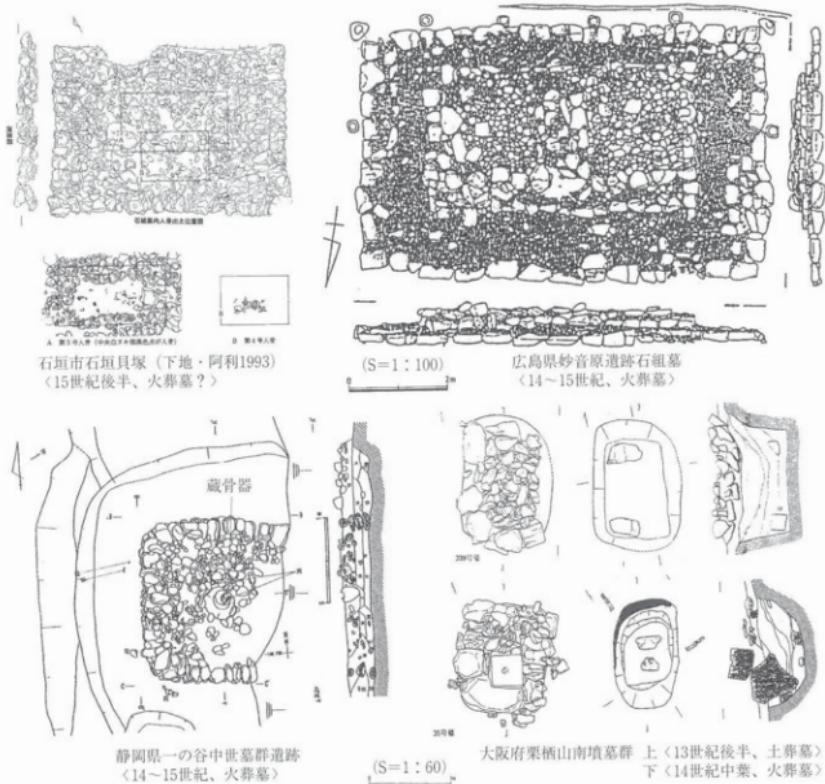


図6 日本各地における石組墓

も非常に類似している（写真1）。土壤の規模で見ると、西日本の土壤墓は1.5~2.0mのものが多く、グスク時代とやはり類似している。その立地であるが、1~数基の墓が近接する建物群と主軸を合わせて営まれる（図4）。墓の時期は、建物群の時期幅に営まれるので、やはりその同時性は指摘されている。また、土壤墓が集落の古い時期に当たるものも見られる。

以上、グスク時代と本州の土壤墓は立地・葬法の点で共通点が見られるということを挙げた。しかし、異なる点としては、副葬品の有無である（図5）。沖縄のものには確実に副葬したという例がない。一方、本州はこの時期の土壤墓には、短刀・和鏡・化粧箱・土師器皿・陶磁器といった品々が副葬されることがまま見られる。ただ、本土のものにも副葬品がない土壤墓はある。

さて、このような本土の土壤墓の位置付けであるが、1集落に見られる墓の数が少なく、青磁や白磁、和鏡などの量的には土器などと比べると少ない品物が埋葬されることから、その集落の有力者の墓と考えられることが多い。

今まで挙げたように、沖縄と本土のグスク時代相当期の土壤墓は、立地・形態・葬法の点で共通性

が高いことを指摘した。しかしながら、この比較は表層的なレベルで留まっており、人骨形質等の検討を経なければ、これらの被葬者を直接本土との関係を触れるのは危険であるのは言うまでもない。ただ、この土壙墓が検出される12~13世紀は、先述の伊佐前原遺跡や後兼久原遺跡、または読谷村ターシモー北方遺跡（仲宗根2001）などで確認されている貝塚時代後期にはなかった画一的な建物群の登場、滑石製石鍋やカムイ焼の出土など、かなり日本本土との交流もしくは影響が見られる時期である。このため、これらの土壙墓も同様の文脈で検討する必要はある。

いずれにせよ、数基の墓のみが集落に近接して営まれることは、一部の家族のみ一定の墓制に葬られるという階層的な差が現れてきたことの傍証として見ることはできよう。

3) 石組墓

日本本土では、13~14世紀ごろに石組墓が増大する傾向にある。葬法は、火葬が多いが、土葬のものもある。石組墓には、サイズの大小や、いくつかの石組が連結されひとつの墓になっているものなど様々なものがある（図6）。階層的には、有力農民である名主層から、僧侶、在地領主層まで広く営まれるが、14~15世紀にはより下位の階層（村落構成員・百姓層）まで営まれるようになる。

この視点で石垣貝塚の石組墓を見ると、日本本土のものでも非常に大きな部類に入るといえ、かなり有力な階層の墓と考えられよう。また、土葬・火葬の両者の葬法が行われている可能性があることも、日本本土からの影響を考える上で、非常に興味深いといえよう。しかしながら、この時期の日本本土では集落より離れた場所で集團墓地として営まれる点では異なっている。また、火葬であったとしてもそれが仏教の普及によるものかも不明である。ただ、単純に形態的には非常に類似したものとは言えるであろう。

5. おわりに

ここまで、グスク時代の墓制特に土壙墓・石組墓を、その特徴を本州の同時期のものと比較しながら検討してきた。その結果、これらの土壙墓・石組墓は形態の点では類似したものと言う事が出来よう。特に、土壙墓は集落・建物群との関係、時期といった点でも非常に類似しており、日本本土との様々な交流・影響により登場したことは確実と言えよう。いずれにせよ、貝塚時代と比べると、墓の階層性が現ってきたものであろう。

以上、類例が少ないながら強引な見解を述べてきたことと思うが、墓というその被葬者の階層などを色濃く表すと考えられるものについて、様々な側面から検討することにより、その当時の社会構成を想定できる一つの方法としては有効なものではある。

（せと てつや：調査課 専門員）

参考・引用文献

- 安里嗣淳・木下尚子・中村 恵 1979 『具志川島遺跡群（岩立地区埋葬造構群の調査）第3次発掘調査報告書』
伊是名村教育委員会
- 江浦 洋 1988 『中世土壙墓をめぐる諸問題』『日置莊遺跡（その3）』財團法人大阪文化財センター
- 勝田 至 1988 『中世の屋敷墓』『史林』第71巻3号
- 橋田正徳 1991 『屋敷墓試論』『中近世土器の基礎研究』Ⅶ
- 金武 正紀 1994 『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市文化財調査報告書第26集 那覇市教育委員会
- 呉屋義勝他 1989 『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市教育委員会
- 静岡県考古学会 1997 『静岡県における中世墓』

- 下地 優・阿利 直治 1993『石垣貝塚』石垣市教育委員会
- 瀬戸哲也 1999 「箕面市栗生間谷遺跡の屋敷墓について」『大阪文化財研究』第16号
- 瀬戸哲也・市本芳三 2001 「栗柄山南墳墓群で出土した石造物について」『日引』第1号
- 北谷町教育委員会 1989 『砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡』範囲確認調査報告書 北谷町文化財調査報告書第9集
- 北谷町教育委員会 1997 『後兼久原遺跡展』
- 当真嗣一他 1981 「渡名喜島の原始・古代図録」沖縄県立博物館・渡名喜村教育委員会
- 当真嗣一・上原 静他 1978 『木總原』読谷村文化財調査報告第5集
- 當名清乃他 2001 『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 時津裕子 2000 『南西諸島における箱式石棺墓の再検討』『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』
(上巻) 同刊行会
- 仲宗根 求 2001 『ターシモー北方遺跡』読谷村教育委員会
- 福永信雄他 1996 『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』財团法人東大阪文化財協会
- 藤澤典彦 1993 「夫婦墓の成立と展開－中世墓地成立の画期－」『元興寺文化財研究』No.47
- 藤澤典彦 1996 「中世後期墓地の諸問題」『中近世考古学を語る会』
- 森屋美佐子・瀬戸哲也他 2000 『栗柄山南墳墓群』財团法人大阪府文化財調査研究センター

天界寺考－発掘調査成果を参考にして－

Analyses on Tenkai-ji Temple –from the Excavation Results–

山本 正昭

YAMAMOTO Masaaki

ABSTRACT: The Tenkai-ji, one of the major temples in Ryukyu dynasty, had been excavated for four years since 1995 to 1999. The precise history of the temple had not been clarified until the excavation that yielded some aspects of discussion. This paper attempts to describe the history of Tenkai-ji, based on the excavation results and archives such as illustrations and texts.

那覇市首里金城町1丁目の玉御殿の東隣、守礼門の南西側に首里三大寺のひとつである天界寺が明治期まで存在していた。景泰年間（1450～56）に尚泰久が創建した寺院で琉球列島の中でも多くの伽藍が棟を連ねる大規模寺院であったことが文献資料の中から窺うことができる。又、沖縄県内においては首里城の北隣にある円覚寺が最大規模を誇る寺院としてついに有名であるが、天界寺も首里城に隣接する寺院としては大規模の部類に入り、また琉球史における位置付けも非常に重要なことは、古くは『朝鮮王朝実録』、『使琉球録』、近世においては『球陽』、『中山伝信録』、『琉球国史略』、『琉球國由来記』といった史料に頻出したことから明らかである。

前置きが少々長くなつたが、琉球列島で代表的な寺院として位置付けられる天界寺は90年代後半から広範囲におよぶ発掘調査が実施されている。那覇市教育委員会が1995～98年に天界寺境内の中心部の発掘調査を皮切りに、沖縄県立埋蔵文化財センターが境内の東、西側を、加えて綾門大道跡の1999年度発掘調査において天界寺に関わる遺構を検出している。このように各機関、各調査区でそれぞれの報告がなされているためか、かつての天界寺の全体様相については些か把握し難い状況となっている。他人の揮で相撲を見るつもりは毛頭無いが、過去に報告された天界寺関係の報告書を再検討し、天界寺という寺院跡の構造並びにその性格に関して若干の考察を行っていきたい。

第Ⅰ章 遺構の検討

まず各機関が調査した区域について簡単に触れておく。那覇市教育委員会による調査区は天界寺跡のほぼ中央を南北方向の、帯状の区域となっている（図1）。『首里古地図（1700年頃、以下『古地図』）』（図2）や『冠船御座之図（1866）』所収「冊封御規式之時守礼門御城御座之図（以下、御座之図）」（図3）に描かれた天界寺仏殿が存在していた部分に相当する。次に那覇市教育委員会の調査区の東側、すなわち先の史料で見られる天界寺松尾を1996年に、当該地区の西側、仏殿から三門へ至る参道部分を1997年に沖縄県立埋蔵文化財センターが調査を行っている。そして最後にこれらの調査区の北側、すなわち城西小学校までの間を1999年に同センターが綾門大道跡発掘調査の一貫として実施している（図1）。

このように1995年から始まった天界寺跡の発掘調査の結果、調査面積3161m²の範囲内に石積み、石列、石敷き、石畳、石段、石囲い遺構、石溝、基壇、柱穴、土坑、円弧状遺構等、多様な遺構が確認されている。しかし、これらの遺構全てが天界寺に関係する遺構とは言い難く、天界寺周辺にかつて存在していた諸施設の遺構である可能性も十分に考えられる。また、先に挙げた遺構全てが同時期に



図1 天界寺並びに各調査区位置図（那霸市教育委員会1986に加筆）

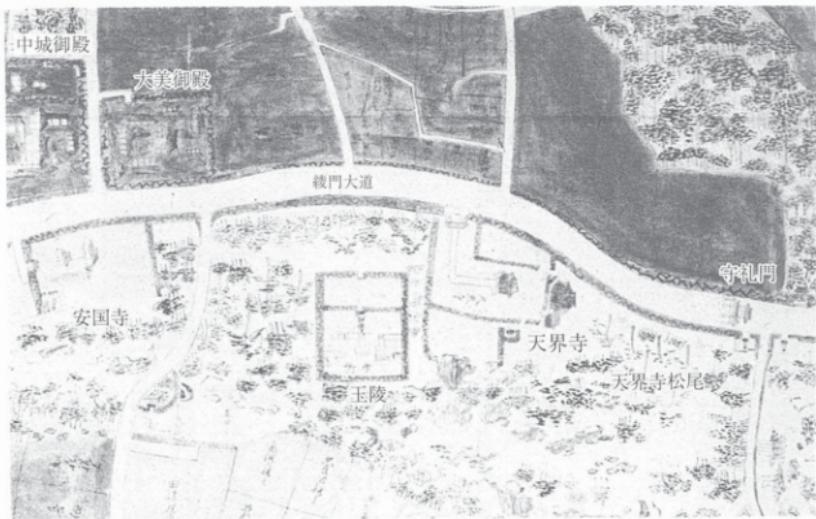


図2 首里古地図 天界寺周辺（沖縄県教育委員会1994）

存在したのではなく時期差を有して存在していた。本章においては各遺構の検討を時期別に行っていき、天界寺創建の以前か以後か、そして天界寺のどの時期に相当する遺構であるのかを検証していきたい。

1. 14世紀後半～15世紀前半

天界寺創建以前の遺構である。基本的に最下層並びにその周辺から検出された遺構で柱穴、円弧状遺構、竪穴状遺構が挙げられる。地山の赤土層並びにその直上の黒褐色土層に掘り込まれた遺構で、それらの密集度から天界寺創建以前の集落跡として報告書では想定している（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）。

最も多く確認されている遺構として柱穴がある。調査区全体に見られ、とりわけ西側に密集している。柱穴は径の大小並びに深さも区々で、一部に近世のものも見られるが大半がこの時期に相当する。報告書ではプランを3棟復元しているが、その多くはプラン不明の柱穴群である。

次に円弧状遺構であるが那覇市教育委員会の報告書によるとその性格は不明としながら形状の特異性から天界寺の遺構と考えている（那覇市教育委員会2000）。しかし、この遺構は一般的に考えておそらく竪穴式住居跡と考えられる¹⁾。すなわち平面形が円弧状を呈する小溝は床面の排水と湿気抜きの用途とされる（宮本1996）。柱穴とセットとなって検出されている点も共通しているが、当該遺跡においてはそのセット関係を明瞭に把握することはできない。柱穴と同レベル並びに天界寺跡の古い時期の遺構とされる石列Dと溝状石列（図4）より下部にあることから天界寺創建以前に存在した集落に関わる遺構であった蓋然性が高い。調査区西側で6基、調査区北側で1基確認されており、15世紀中頃以降の天界寺創建のための地均し等により調査区中央辺りは確認されていないがかつて一連のまとまりであったものと考えられる。加えて西側の調査区外にも柱穴が広がっていくことから、かなりの数の円弧状遺構が存在していたと考えられる。

2. 15世紀後半～16世紀前半

天界寺創建当初に関わる遺構をここで取り上げていく。所謂、16世紀後半頃の造成層とされる赤土を主体とした層が調査区の東側、石垣Aより北側一帯で確認されており、その下層から溝状石列と石列Dが検出されている（図4）。これらの遺構は先の柱穴より上面から検出されていることをあわせて考えると、創建当初の遺構である蓋然性が極めて高い²⁾。そして綾門大道と天界寺との間を区切る石牆も調査区の北側で確認され、柱穴の直上で確認されたことと、周辺状況から創建当初に構築された可能性が高い（沖縄県立埋蔵文化財センター2003）。前項で記した柱穴群の中ととりわけ径が大きい柱穴が検出され、一部、並んで確認されている。天界寺創建以前の柱穴とは明らかに異質であり、創建当初の遺構である可能性が極めて高い。残念ながら正確なプランが確認されるものは見られないため、どのような正確な建物であったのかは判断できない。しかし、この柱穴は調査区の西側へ広がる様相を見せており、おそらく現在の玉陵東側まで天界寺の境内であったのものと見られる³⁾。

ところで調査区の中央やや西寄りから礎石、基壇が確認されており、『古地図』に描かれた仏殿の基壇に比定されている。那覇市教育委員会はこの遺構を出土遺物から17世紀後半と報告しており、この時期において確実に天界寺の中心となる仏殿が存在していたと言える（那覇市教育委員会1999）。



図3 「冊封御規式之時守禮門御城御座之図」（福島1998）

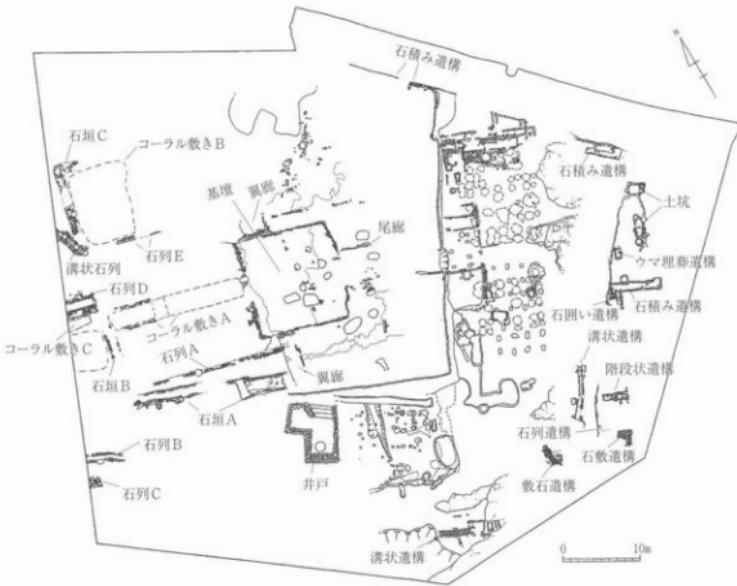


図4 天界寺遺構図 (上：天界寺創建以前 下：天界寺創建以後)

しかし、その構築時期に関しては触れられていないので、その検証をここで行いたい。基壇の構築状況としては地山を壇状に削り残してその上に拳大の石灰岩礫を密に敷き詰めて整地し、礎石を据え置くといった構造となっている（那覇市教育委員会2000）。石灰岩礫の整地面下から旧地形が確認されていることから基壇を最終的に改修した時期は近世以降であったとしても、創建当初からこの場所に基壇建物が配置されていた可能性が指摘できる。また、この基壇はその南北から翼廊と思われる縁石を伴う高部があり（図4）、基壇との接合部に蓋石を被せた排水溝が取り付く。また基壇の東側には切土成形によって造り出した尾廊が検出されていることや基壇側に面を有する石列が北、東側で確認されていることから（那覇市教育委員会2000）仏殿の周囲は浮道で囲われていたものと考えられる¹⁾。これらのこととは『古地図』に描かれている仏殿とは明らかに様相を異にしていることから、近世の改修以前における天界寺伽藍の様相を示しているものと考えられる。一つ付け加えておくが、これら基壇における評価はあくまで試論の段階であり、今後において議論をするのは言うまでもない。

創建当初の遺構ではないが調査区東側で確認されている石垣、石圍い遺構、石積み遺構²⁾、土坑、覆屋を有したウマの埋葬遺構、柱穴は16～17世紀頃とされており、この時期に当該地区は利用され始めたと報告している（沖縄県立埋蔵文化財センター2001）。但し、礎石や基壇を有した建物跡やそれらを結ぶ礫敷き、溝状遺構といった寺院に直接結びつく遺構は確認されていないでの当該地区で確認された遺構が天界寺に関係するのか正確には解らない。

3. 16世紀後半～17世紀

調査区東側で赤土を主体とした造成層が確認されている。当該層の上部で確認された石列、礫敷き遺構をまずはじめに述べていきたい。

石列Aは基壇、コーラル敷きの南側で確認されており、これらの遺構は全て方向軸を同じくしている（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）。先述した仏殿の南北には翼廊が取り付きその西側の面に石列Aは接している。この石列Aは仏殿脇の翼廊から繋がる浮道の縁部分と解される。建物基壇の南面とも考えられるが、礎石建物という重量構築物を積載するための基礎造成等が窺われないため、そして後述するが大規模な造成以降、調査区南東隅において詳細は不明であるが建物が存在していたことを鑑みると、それらの建物と仏殿、若しくは南側の出入口と仏殿とを結ぶ導線としての浮道が想定される。また石列Aと南北で対を成すように石列Eが見られ、同様に当該時期における浮道の可能性が指摘できる。

コーラル敷きは報告されているように参道である可能性が極めて高い（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）。コーラル敷きは縁石を伴った若干大きめの礫を敷いたものと縁石を伴わない小礫を敷いたものが確認されている。両遺構ともにラインを同じくし、後者の下部から前者が検出されている。造成直後の参道は前者であったと見られる。

これら造成層の上部から検出されている遺構以外に調査区南東側の柱穴群と溝状遺構がある（図4）。調査区南東側の柱穴群から当該時期において、この周辺には建物があったと想定している（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）。天界寺創建以前の柱穴も当該地区に混在しているものと考えられるが、その多くが17世紀のものと考えられる。『古地図』には描かれていないため、17世紀まで存在していた建物、あるいは天界寺とは直接関係の無い建物のため、割愛されたかの何れかが考えられる。溝状遺構は石造りで17世紀後半に相当する肥前系の角皿が得られており何らかの施設の一部と考えられるが、天界寺に関係する遺構であるかは判断材料が乏しいため、ここでは言及しない。

4. 18世紀

『古地図』に比定される遺構をまずははじめに述べていきたい。『古地図』に見られる建物は4棟で大門、仏殿そしてその東側に大小2棟の連結建物すなわち丈室、南側には井戸が描かれている(図2)。仏殿は既に以前から存在していた場所にそのまま配置されており、調査区中央の礎石・基壇がそれに相当する。この仏殿から西側へ伸びる参道は前項で触れた様石を伴わない小縁を敷いたコーラル敷きの遺構に相当すると考えられる。しかし、『古地図』に見られる北側ヘラインを変えて、大門へ続く参道は確認されていないので詳細は不明である。礎石・基壇の東側から3×4間と3×2間の、おそらく礎石を有したであろう建物跡⁶⁾が確認されており、先述の連結建物はこれに相当するとしている(那覇市教育委員会2000)。しかし、『古地図』においては北側にも基壇状の表記がなされている点と建物規模が検出遺構と異なる点で、少し検討を要する。大門に関しては遺構が全く確認されていないため、その全容を窺い知ることはできない。井戸は境内南側の調査区外となり、発掘調査による年代は分からぬが、『球陽(1745)』においては1697年に設置とされている(写真1)⁷⁾。

最後にこれらの施設を囲んでいた石牆の遺構についても触れたい。石垣Aが基壇、並びに石列Aよりやや南に遺構方向を振って東西に伸びている。おそらくこの石積みが『古地図』に見られる天界寺の南限あるいは井戸との境界をなす石積みである可能性が高い(沖縄県立埋蔵文化財センター2001)。そして『古地図』においては参道、仏殿の北側に石牆ないしは基壇と考えられる「L」字形の記載が見られる。この遺構における南北方向に伸びる部分が石垣Cに相当すると考えられる。

5. 明治以降

明治以降には廃寺となり、明治末頃、かつて首里グスク内にあった首里殿内、真壁殿内、儀保殿内を統合した三殿内の屋敷、並びに神殿が旧境内の北東隅に建てられた。沖縄戦で全壊するまでの約40年間、そこに神女が住んでおり、折々には参詣者が絶えなかったという(久手堅2000)。その場所から、礎石、屋敷縁石、炊事屋敷石敷、便所跡、礎石抜き取り穴といった当該建物に係る遺構が検出されている(図4)。南側は破壊が激しく、柱を載せた根固め縁のみ残存する(図5d)。

第Ⅱ章 文献資料に見える天界寺の姿

『球陽』に依ると天界寺創建は尚泰久の時期とされ、『朝鮮王朝実錄』では1461年とされている。その当時の様子に関しては天界寺について記した同時代史料が皆無であるため不明である。後世に編まれた『琉球国由来記(1713)』に依ると創建当初には寝室、方丈、両廊、東房、西房、大門、厨子があり、『球陽』には1466年に大宝殿を加建したとある。葉貫磨哉によれば大門は三間に相当し、東房と西房は庫院、僧堂については詳細不明とし、方丈は法堂として利用、方丈としての機能は寝室のみ構えたとしている。また、大宝殿は伽藍の中心となる仏殿に位置付けている(葉貫1976)。これらの史料は創建当初の様子をあくまで伝え記るものであり、その信憑性については疑問符が付く。

天界寺の様子を記した最も古い同時代史料として『使琉球錄(1534)』がある。この史料は明使陳侃が1534年に來琉し、その時に天界寺を訪れた際の様子を記している。そこには山門と仏殿は大きく壯麗で、王宮に亞ぐ程であり、さらに仏殿の規模は五間、内部には仏像が祀られ、その左右には經典



写真1 現在の天界寺井戸

が数千巻所蔵されている、とある。これらは円覚寺と併せての記載であることからおそらく当時の円覚寺の様子とはあまり大差無かったように想定される。

16世紀後半以降の伽藍の状況としては1576年には火災により焼失し、その後丈室、厨子が再建、1625年に丈室、1644～1661年に丈室、1655年には大門の修復が行われている。1625年に大殿を建立、1695年に丈室、厨子を加建、1697年には井戸を設置している（平凡社2002）。このように16世紀後半から17世紀にかけて伽藍の修復並びに加建が数回の行われていることから、この時期に伽藍の再編が行われていたことが窺える。『琉球国由来記』には丈室に尚泰久、尚徳の位牌とその他の王族・王妃等の位牌が安置されており、「球陽」では国王は即位後に円覚寺、天王寺そして天界寺に参拝していたことが記されている。また寺領は円覚寺の60石に次いで30石¹⁰が宛われている点などから、首里王府の厚い庇護下で修復、増築がなされていたことが解せる。

18世紀初めの天界寺の状況は『首里古地図』によって窺い知ることができる。詳細は前章で触れたのでここでは詳しくは述べない。ここでは他の史料から窺える18世紀以降における天界寺の状況について触れていただきたい。

1718年に來琉した、徐葆光が著した『中山伝信録（1721）』では当時の天界寺の様子を簡単に記している。それによると山門は綾門大道に面しており、仏殿は西面するといったことが記されている。続く1756年に來琉した、周煌が著した『琉球国史略（1757）』ではより詳細に天界寺について触れられている。まず伽藍配置に関しては門は北向きで殿宇の奥行きは東西方向となっており、その規模は円覚寺に次ぐとある。各建物の内部については、「山門」すなわち大門には石神が2つ配置され、仏殿の正面には皇帝の万歳龍碑を安置、傍らには火神を祀り、丈室に比定される「内殿」には先王の父及び王妃、王女（の位牌）が祀られており、左側は僧侶の部屋で、右側は客座となっているとある。境内には庭もあり、松樹、蘇鉄、榔枕、椰樹といった樹木が繁茂していたとある。これらの記載は『古地図』に見られる天界寺の姿とほぼ一致する。

冊封使以外の記録としては首里王府が編集した『琉球国由来記』がある。先の『琉球国史略』と同様に大門、大殿、丈室の内部に関する記載が成されている点で注目される。まず大門であるが、そこには木造の仁王像が安置されていたが、1678年に朽ち果ててしまい、後に大門を修復する際に石造の仁王像を薩摩に求め1698年に安置した、とある¹¹。丈室の内部には木造阿弥陀如来像、尚泰久、尚徳の位牌、開山住持である渥隱安潛上人の位牌が祀られ、大殿の内部中央には木造の釈迦、文殊、普賢、そしてその左右には土地堂、祖師堂と呼ばれる厨子があり、前者には木造の阿弥陀、薬師、観音像、後者には達磨大師像が安置されていた、とある。また石堂というのがあり、三宝大荒神が祀られていたが、今は既に失われており、わずかに自然石を代わりに置いているとの記載がなされている。

時期は下るが1866年作成の「御座之図」においても天界寺の状況を窺い知ることができる。この史料は冊封儀礼が執り行われる綾門大道を中心にして描かれているというと言う性格上、天界寺境内の北半部、更には仏殿と丈室の北側しか描かれていません。先の『古地図』に描かれている天界寺と比べて伽藍配置にさほど変化は見られないが、丈室が仏殿の軸線上にあり、かつ北側の基壇は見られないというわずかな相違が見られる。また、福島清はこの絵図資料から大門を切妻造りの四脚門の形式で仏殿、丈室の正面は5間としていることから¹²、『古地図』に描かれた建物の規模とは異にする。18世紀から19世紀までに大規模な建物の改変、修復の可能性が指摘されるが、文献資料においては窺うことができない。また「御座之図」は先述したように綾門大道を中心にして描かれているというと言えど点から綾門大道周辺の施設もかなり詳細に描かれていると考えられる。対して『古地図』においては首里城を中心にして首里全体が描かれており、「御座之図」に比べて建物の描写が小さく、且つ正

確性に欠ける。よって「御座之図」における天界寺は『古地図』のそれと比べてより細かな描写を行っていると解することができる。何れにせよ18世紀初めから19世紀中頃にかけては伽藍配置並びに伽藍数において変化が見られないことから大規模な改変等は行われていないと見なすことができる。

このように見ると文献資料では1461年の創建、16世紀後半から17世紀にかけての数回におよぶ伽藍整備といった2度の大規模な画期と1466年の大宝殿の加建を併せての幾度かの小規模な改変があったことが分かる。一方それを記す多くの史料が18世紀以降のものであり、それ以前における天界寺の状況を解り得る資料は極めて限られると言える。そして最後に近世の史料では寝室、方丈、両廊、東房、西房、大門、厨子が創建当初の伽藍として掲げており、近世のそれより多くの建物があつたとされるが、必ずしもその範囲が創建当初の段階において近世のそれをはるかに凌ぐ程、広範囲であったとは限らないことを付け加えておく。『古地図』に見える天界寺の状況から仏殿の北側は広い空閑地となっており、その場所からは径の大きい柱穴が検出され、創建当初の建物に相当する可能性がある。また、大正期に三殿内があった場所はそれを構築する際に造成され、下部の遺構は確認されていないが、この辺りも『古地図』では広い空閑地となっている。これらの空閑地を無視して天界寺の範囲を想定していくことはできないと言える。参考までに挙げておくと円覚寺の伽藍配置のように総門、放生池、三門、仏殿、龍淵殿と東西軸に並び、それと平行して獅子窟、御照堂、鐘楼といった建物が建ち並んでいるが、対して天界寺ではそのような規則的な並びは見られない。このような点も踏まえながら次章では発掘調査成果との比定を行っていきたい。

第Ⅲ章 発掘調査成果との比定

まず問題となるのは創建当初の天界寺の状況である。この時期に比定できる明確な遺構としては石列B並びに溝状石列、天界寺と綾門大道を区切る石積み、のみである。石列B並びに溝状石列はどのような機能を有していたのかは把握することができないが、少なくとも西側の調査区外、玉陵方向に伸びていくのが確認できる。また径の大きい柱穴も西側へ広がっていく状況から判断すると、おそらく玉陵創建以前においては天界寺境内は西側へ広がっていた可能性が指摘できる。これらから、建物として把握することができる遺構は限られており、同時代史料においてもその詳細が判然としないため、先に信憑性の上で疑問視した『琉球国由来記』ではあるが唯一、創建当初の状況を伝える史料があるので、それに則した形で以下、記していきたい。

基壇においては16世紀以前まで廻ることを提起したが、同時に周辺の浮道、翼廊もその可能性があることは既に触れた。1466年に建立されたとする大宝殿に相当すると考えられる。基壇の周囲には浮道が配置されており、その浮道は各施設を結ぶものであったものと考えられる。基壇の東側の浮道は南北から伸びる翼廊よりも幅が広いことから伽藍配置の主要方向軸はN80°Wと想定される。大門は近世段階において北西隅に配置されているが、創建当初は西側に境内が広がることから西端に、且つ先の伽藍配置の方向軸上に配置されていたと考えられる。基壇の東側から伸びる浮道は東側延長上にも何らかの施設があったものと考えることができる。円覚寺も同様であるが、七堂伽藍を有する禅宗寺院の場合、仏殿並びに法堂の背後には方丈や庫裏といった住持が日常生活を営む施設が配置される。『球陽』に記された寝室、方丈はその痕跡を残さないが、その性格上、おそらく基壇の東側に配置されていたと考えられる。東房、西房はその名にあるように対を成す建物であったと思われる。『古地図』に見られる天界寺北側の空閑地に比定される場所から径の大きい柱穴がいくつか確認されている。このことから、東房、西房に関係する遺構であると想定される。

上屋構造に関しては大和系瓦、高麗系瓦が出土していることからおそらく建物は瓦葺きであったと

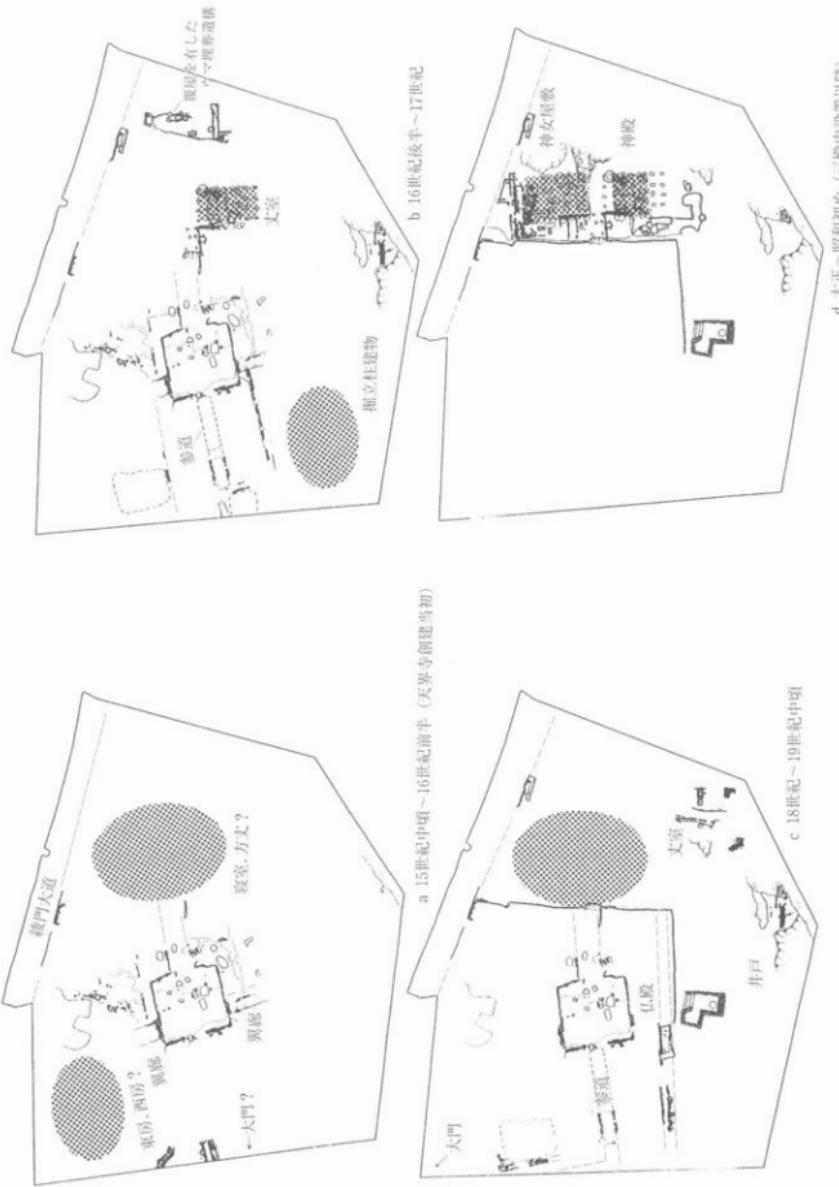


図5 天界寺遺構変遷図

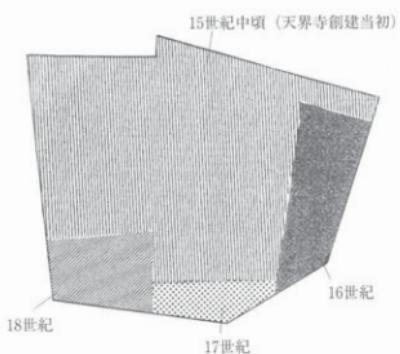


図 6 年代別土地利用模式図

る地区の土地利用が行われたものと解することができる。文献資料においては17世紀に小規模な改修が行われていることが基壇と平行して石列A、Eそしてコーラル敷きの参道がこの時期に出現することで解る。調査区南東側の柱穴群、調査区南側の溝状造構、階段状造構も当該時期の造構であるが、厳密な性格については解らない。少なくとも当該時期は幾度かの改修と周辺においては土地利用がなされたといった時期と言える（図5b）。

次に18～19世紀中頃段階の天界寺である。これは前章での『古地図』と『御座之図』に見られる表記の相違から、実際に検出されている造構とどのように整合されるのかという問題が残されている。絵図資料の問題は「御座之図」の表記がより詳しく天界寺の状況を示しているとした。実際の造構は仏殿に相当する基壇とそれから西へ伸びる参道が確認されており、丈室の基壇に比定される、南北方向に伸びる石列も確認されている。しかし丈室に相当するとされる 3×4 間と 3×2 間の建物跡の位置は参道より南側に位置していること（図5b）、並びに規模においても「御座之図」（図3）に見られる建物とは明らかに様相を異にすることから、丈室と尾廊より南側で確認された建物跡との関係性は見出し難い建物であると評価される。おそらく「御座之図」に見られる建物、すなわち18世紀段階の丈室に伴う礎石、柱穴等は大正期に立てられた三殿内の神女屋敷と神殿による地均しの際に撤去されたものと考えられる。 3×4 間と 3×2 間の建物跡に関してはその規模から16～17世紀段階における幾度かの改修を受ける前の丈室と想定される。概ね『古地図』と造構とを比定すれば図5cのような状況になるものと思われる。

最後に年代ごとの土地利用に関して触れておきたい。創建以前においてはほぼ調査区の全域で柱穴が確認されていることから、広範囲に集落の施設が展開していたと考えられる。柱穴の密集状況からその中心は調査区の北東側で、綾門大道辺りの北側端、天界寺松尾辺りの東側では柱穴は散漫となる。天界寺創建当初は主に調査区中央から西側が境内の範囲であり（図6）、前章で触れたように現在の玉陵の東側もその範囲であった可能性がある。調査区の東側、現在の天界寺松尾辺りに関しては、石垣、ウマを埋葬した覆屋が16世紀に見られはじめ、18世紀には更に石段、石造りの溝といった施設が加えられる。調査区南側においては17世紀に石造りの溝状造構が配置され、その西側、すなわち調査区南西側に関しては18世紀に掘立柱建物と井戸が配置される。このように創建当初の天界寺の境内並びにその周辺施設が西側に位置していたのが東側、南側に広がることが想定される。

考えられる。これら大和系瓦、高麗系瓦の出土量から見ると極めて少ないと、修復の際に葺き替えがなされたことを考えると不要となった瓦は別の場所に廃棄されたと考えらる。このように創建当初の天界寺の様子については可能な限り想定を行ってみたが、あくまでわずかな手がかりから導き出した考察でしかない。建物位置も不明瞭で検討課題も多いが、近世段階の天界寺とはその様相を異にすると言うことのみ理解していただいたと思う。

16～17世紀段階においては調査区の東側で石垣、石囲い造構、土坑、覆屋を有したウマの埋葬造構が確認されていることから、何らかの施設が存在していたことが言える。このように16世紀頃から近世初めにかけては天界寺松尾（図2）と呼ばれ

終章 結語

これまで天界寺の変遷を発掘調査成果と文献資料を用いて紐解いてきた。拙い考察の中でどこまで当時の状況を把握することができるのかを試みたつもりであるが、ある程度、整理することができたと思われる。言うまでもないが、報告書における各調査担当者の綿密な調査・分析に依るところが大きいと言え、末文ながら敬意を表する。そして一方では未だ解決できていない点も浮き彫りにされた。とくに天界寺の西側、すなわち玉陵まで広がる遺構状況の確認、そして大門とされる遺構が残存しているのかといった、今後の調査において明確にされるべき課題は多いと言える。

現在、天界寺跡には首里城レストセンター首里社館や首里城公園管理センターの施設が建ち、その面影は1697年に造られた井戸にのみ求めることができる。このように現在においては天界寺としての姿はほとんど窺われないのであるが、少なくとも調査された成果を基にしての考察をより多くの人に向けて投げかけていくことで現在において失われてしまった遺跡の存在意義が高まっていくものと思われる。

(やまもと まさあき：調査課 専門員)

註

- 1) グスク時代の堅穴式住居の確認例は過去において皆無であり、この遺構をもって直接、グスク時代の一般的な堅穴式住居として位置付けるのは想定の域を出ない。円弧状遺構は過去において具志川市の喜屋武マープ遺跡で1基確認されているのみであり（具志川市教育委員会2001）、極めて特異な遺構と考えられる。当時において堅穴式住居が特異であったのか、それ以外の施設の一部であったのか詳細は分からぬ。
- 2) 縦門大道が現在の道幅に改修されたのは15世紀後半で、南側を画する石牆もこの時期に構築されたものと想定される。したがって1996年度検出の石積み遺構もこの時期に成立した可能性が挙げられる。
- 3) 島弘氏のご教示による。
- 4) このように基壇建物の周辺を凹状にし、その最も低い床面に珊瑚礁を敷くといった状況は円覚寺跡においても確認されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）。
- 5) 1996年度に確認された石積み遺構は16世紀～17世紀頃と報告されているが、先の天界寺と縦門大道を区切る石牆が15世紀中頃以降とされることから、同機能を有するこの石積み遺構も15世紀中頃と解することができる。しかし、石積み遺構が配置される天界寺松尾周辺は16世紀頃に土地利用がなされていることからこの時期に改修ないしは新造された可能性も指摘できる。
- 6) 報告書内においては柱穴は浅底の隅丸長方形であることから、礎石の設置痕として評価している（那覇市教育委員会2000）
- 7) この井戸は那覇市指定文化財になっており、現地保存がなされている。平成12年那覇市教育委員会設置の説明盤によると「井戸の内部はほぼフラスコ状になっており、岩盤を垂直に掘り下げながら、下へ向かって幅を広げ、水面付近ではほぼ球形になっています。井戸口に接して、滑車を下げるための柱の跡があり、左右の石垣の上には、屋根をかけるための各柱形の石が残されています。」とある。
- 8) 1672年段階の石高。廃藩置県後、1884年に作成された『寺院役知役俸飯米調書』によると円覚寺100石、天王寺、護国寺50石、天界寺、崇元寺、臨海寺30石とされている。
- 9) この仁王像に比定される残欠が発掘調査において出土している。石質同定によると鹿児島県産の安山岩である可能性が高いという報告がなされている（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）。
- 10) 福島は縦門大道に面する門を「門」、西側の基壇建物を「山門」、東側の基壇建物を「仏堂」とし、それぞれの建築

的特徴を示している（福島1998）。「首里古地図」においても他の史料から見ても門が2つ以上、配置されていたという記載は見られないことから、福島の言う「門」を大門、「山門」を仏殿、「仏堂」を室宇として比定する方が妥当と思われる。

参考・引用文献

- 久手堅憲夫 2000『首里の地名』第一書房
- 葉賀磨哉 1976『琉球の仏教』『東アジア諸地域の仏教』佼成出版社
- 福島清 1998『冊封儀式に見る建築像（上）』『首里城研究』No.4 首里城研究会
- 宮本長二郎 1996『日本・原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 那覇市教育委員会 1986『那覇市歴史地図』
- 沖縄県教育委員会 1994『琉球国絵図史料集 第三集』
- 那覇市教育委員会 1999『天界寺跡』『那覇市文化財調査報告書』第42集
- 那覇市教育委員会 2000『天界寺跡』『那覇市文化財調査報告書』第43集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡（I）』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集
- 具志川市教育委員会 2001『喜屋武グスク－発掘調査速報－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺跡（II）』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第8集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第10集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『轍門大道跡』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第13集
- 平凡社 2002『沖縄県の地名』『日本歴史地名大系』第48巻

首里城跡出土銭貨について

The Coins unearthed from the Shuri Castle Site

知念 隆博

CHINEN Takahiro

ABSTRACT: This paper presents the study and problems of old coins found from the shuri castle and adjacent sites. A variety of excavated coins consists mainly of the Sung dynasty type that was made before the construction of the castle, but also includes the 'kan -ei Tsu -ho(寛永通寶)' which is the latest of all. Therefore, it is supposed that there existed no particular classification among coin types at the time of Ryukyu dynasty. It is notable that the assemblage of the coin types show some localities. The further classification of the imitation coins and plain coins should be studied in the future.

1.はじめに

近年、中近世に相当する遺跡出土の銭貨についての研究は着実に蓄積され、また、発掘調査が増加することにより、さまざまな出土事例が報告されている。沖縄県においてもグスクや近世古墓の発掘調査が増加し、銭貨について得ることのできる資料は蓄積されている。

今回はかつて琉球王国の国王居城として、また、行政の中心であった首里城跡の発掘調査が行われた地点の成果を基に首里城跡出土銭貨について紹介する。首里城跡に関連する遺跡として、近隣に所在した天界寺跡、円覚寺跡、御細工所跡出土銭貨も参考にする。

2.首里城跡の概要

首里城の築城年は明確ではないが、14世紀代に築城され、15世紀前半には基本的な構造は確立していたとされる（首里城研究グループ 1997）。その後、1879年の廃藩置県や熊本鎮台沖縄分遣隊の駐屯などを経て、昭和初期には正殿等の建物は国宝に指定される。しかし、1945年の第二次世界大戦により木造建造物は焼失し、城郭は破壊された。戦後は地形変更等により往時の面影をわずかに残すのみとなった（首里城研究グループ 1997）。

首里城跡周辺の復元整備は1956年の園比屋武御嶽石門、1957年の守礼門を始めとした一部で行われ、本格的な復元整備は1972年の本土復帰と同時に始まった。現在、城郭内は建造物を中心に復元整備が行われており、正殿、南殿、北殿などが復元・公開されている。また、城郭は平成13年度に復元整備が終了し、往時の姿を取り戻しつつある。

2000年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録された。

3.各地点の出土資料

今回扱う資料は、発掘調査が行われ、報告書が刊行されている地点である首里城跡の南殿跡、北殿跡、御庭跡、奉神門跡、下之御庭、用物座跡、瑞泉門跡、廣福門跡、木曳門跡、雜世門跡、外郭南側の管理用道路地区、首里城外の天界寺跡、円覚寺跡、御細工所跡出土の資料である。それぞれの出土銭種は表1に記載し、以下に各地点の各時代の銭種名および特徴的な資料を紹介する。

(1) 歓会門・久慶門内側地域（沖縄県教育委員会 1988）

歓会門・久慶門はともに石造拱門であり、木造平屋、入母屋造の構造を有していた。原則として歓会門は男性専用、久慶門は女性専用の門であった（真栄平房敬 1997）。この二つの門および寒水川井戸に囲まれた地区で、水利施設等の遺構が検出されている。銭貨は1978点検出され、そのうち64.5%はひとつのトレンチから出土している。これは調査地に隣接する部分に銭蔵が存在したことが関係していると考えられる。

(2) 南殿跡（沖縄県教育委員会 1995）

南殿は正殿の南側に近接しており、日本様式が強く、薩摩の使者の歓待にも使用された。南殿跡出土の資料は渡来銭が主体となる。銭種が判明するものでは唐銭14点2種、北宋銭75点17種、南宋銭1点、明銭23点2種、清銭1点、琉球銭11点、寛永通寶（新寛永）となっており、その他に無文銭と不明が317点となっている。興味深い資料は図2-1「大世通寶」であり、拓本では不鮮明だが「世」と「寶」の間に穴が穿かれている。

(3) 北殿跡（沖縄県教育委員会 1995）

北殿は正殿の北側に位置し、中国様式であり、冊封使の歓待や行政施設として使用されていた建物である。北殿跡出土銭貨のうち銭種が判明するものは唐銭1種、北宋銭11種、明銭1種、清銭1種、琉球銭1種、寛永通寶（新寛永）があり、その他に無文銭がある。主体となるのは北宋銭である。

(4) 御庭跡（沖縄県教育委員会 1998）

御庭は四方を正殿、南殿、番所、奉神門、北殿に囲まれた広場であり、冊封、朝拜などのさまざまな儀式が行われた空間であった（首里城研究グループ 1997）。この御庭跡からは至道元寶が1点ピットより出土している。同ピットより青磁が出土している。

(5) 奉神門跡（沖縄県教育委員会 1998）

奉神門は御庭を間において正殿と対峙する形で位置しており、門としての役割と薬類や茶などの出納などの役割を果たしていた（首里城研究グループ 1997）。奉神門跡出土の銭貨総数は152枚であり、唐銭1種、北宋銭6種、明銭2種、清銭1種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、無文銭、輪銭が得られている。図2-2は3枚が溶着した状態で検出され、そのうち銭種が判明する銭貨は「元祐通寶」であり、「祐」と「通」の間に穴が穿かれている。また、図2-3は縁はあるが銭文が無い無文銭である。

(6) 下之御庭跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c）

首里城内郭の第二の門である廣福門と京の内、奉神門の間の空間をいう。銭貨は265点出土している。銭種の組み合わせは不明だが、特徴的な資料として図2-4・5の琉球銭の大世通寶、世高通寶が出土している。

(7) 廣福門跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c）

首里城内郭第二の木造の門であり、両脇の東側には戸籍に関する事や争いに関する役所である大与座、西側には神社仏閣を扱う寺社座があった。出土銭貨は92点あり、図2-6の正隆元寶が1点出

土している。この資料は字間4ヶ所に穿孔されており、「隆」および「寶」の外側が取り除かれている。

表1 各地点出土銭種表

出土地点	新会門・久慶門	南駕跡	北駕跡	御庭跡	奉神門跡	下之御庭跡	用物座跡	廣福門跡	木曳門跡	瑞泉門跡	祇世門跡	管理用道路	円覚寺跡	天界寺跡	御謹工所跡
銭種・初鉢年															
前漢															
西漢半两 H.C.175															
貨泉	14	○						○					○		
五銭		○						○					○		
唐															
開元通寶		○	○	○											
乾元重寶	758							○		○	○	○	○	○	
北宋															
太平通寶	976	○											○		
淳化元寶	990	○													
至道元寶	995	○	○		○	○									
咸平元寶	998	○													
景德元寶	1004	○											○		
祥符元寶	1008												○		
祥符通寶	1009												○		
天禧通寶	1017	○	○												
天聖元寶	1023	○	○	○											
景祐元寶	1034	○											○		
皇宋通寶	1039	○	○	○											
至和通寶	1054														
嘉祐通寶	1056	○	○												
治平元寶	1064	○	○										○		
熙寧通寶	1068	○	○										○		
熙寧重寶	1071												○	○	
元祐通寶	1078												○		
元祐通寶	1086	○	○	○									○		
哲聖通寶	1094	○											○		
元符通寶	1098												○		
聖宋元寶	1101	○	○										○		
崇寧通寶	1102	○											○		
崇寧重寶	1103												○		
大觀通寶	1107	○	○	○									○		
政和通寶	1111	○	○	○									○		
宣和通寶	1119												○		
金															
正隆元寶	1157														
南宋															
淳熙元寶	1174														
慶元通寶	1193												○		
成淳元寶	1266	○											○		
绍定通寶	1228												○		
明															
大中通寶	1361														
洪武通寶	1368	○	○	○		○	○					○	○	○	
永樂通寶	1408												○	○	
清															
康熙通寶	1662														
乾隆通寶	1736	○	○	○		○	○					○	○	○	
道光通寶	1821												○	○	
日本版															
寛永通寶	1636	○													
寛永通寶	1668														
寛永通寶	1697	○	○	○		○	○								
山臺通寶	1784														
文久通寶	1863														
朝鮮錢															
朝鮮通寶	1423														
琉球錢															
大世通寶	1454	○	○	○		○									
當高通寶	1461	○													
金圓世寶	1470														
その他															
無文錢		○	○	○		○									
輪錢		○	○	○		○									
環首錢		○	○	○		○									

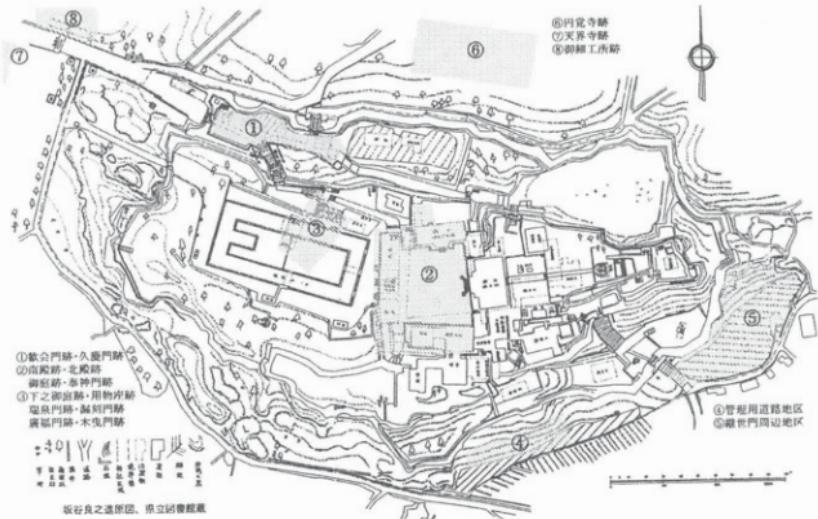


図1 首里城平面図

(8) 木曳門跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c）

木曳門は城郭の西端に位置し、通常は石で塞がれ、城内へ木材を搬入する際に開かれた。この木曳門周辺からは585点の銭貨が出土している。銭種が判明するものは21種あり、内訳としては貨泉、五铢、唐銭1種、北宋銭12種、明銭3種、清銭1種、琉球銭1種、無文銭となっている。図2-7「皇宋通寶」は孔が90°ずれ、菱形を呈している。図2-8「皇宋通寶」は、図2-7のように始めは菱形を穿孔し、その後通常の穿孔した結果、孔が星孔（小畑弘己 2002）となっている可能性を示す資料である。

(9) 繙世門跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b）

繙世門は正殿の南東側城郭にあり、石造拱門でその上に入母屋造の櫓をのせていた。通常は通用門として使用し、国王が死去した場合には世継の王子がこの門から城内に入った。出土した銭貨は合計で40点あり、唐銭1種、北宋銭3種、明銭2種、清銭2種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、無文銭が確認されている。特徴的な資料として図2-9の無文銭がある。円形ではなく、撫角形なので、踏み返し技法（永井久美男 2001）による結果として銭文を失ったとすると、仙臺通寶が本銭の可能性がある。

(10) 管理用道路地区（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a）

この地区は外郭南側斜面一帯であり、石敷構造が検出されている。銭貨は39点出土し、唐銭1種、北宋銭3種、明銭1種、清銭1種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、無文銭、輪銭となっている。模鋳

錢として報告されている資料が3点あることは注目される。

(1) 円覚寺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b）

円覚寺は1494年に完成した臨済宗の沖縄本山であった。昭和8年には総門、放生池、三門、仏殿、鐘楼、獅子窟、龍淵殿が国宝に指定されるが、第二次世界大戦により焼失する。その後、昭和43年より整備が行われ、総門、左掖門、放生池、放生橋が復元・修理されている。調査は1997年～2001年まで行われ、さまざまな造構が検出されている。出土した錢貨は総数104点であり、唐錢1種、北宋錢3種、南宋錢1種、明錢2種、清錢2種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、無文錢、輪錢が検出されている。表採や搅乱層出土のものが多いが、造構に伴うものとして、開元通寶、洪武通寶、古寛永通寶、無文錢が出土している。1点だが加治木錢洪武通寶が出土している。

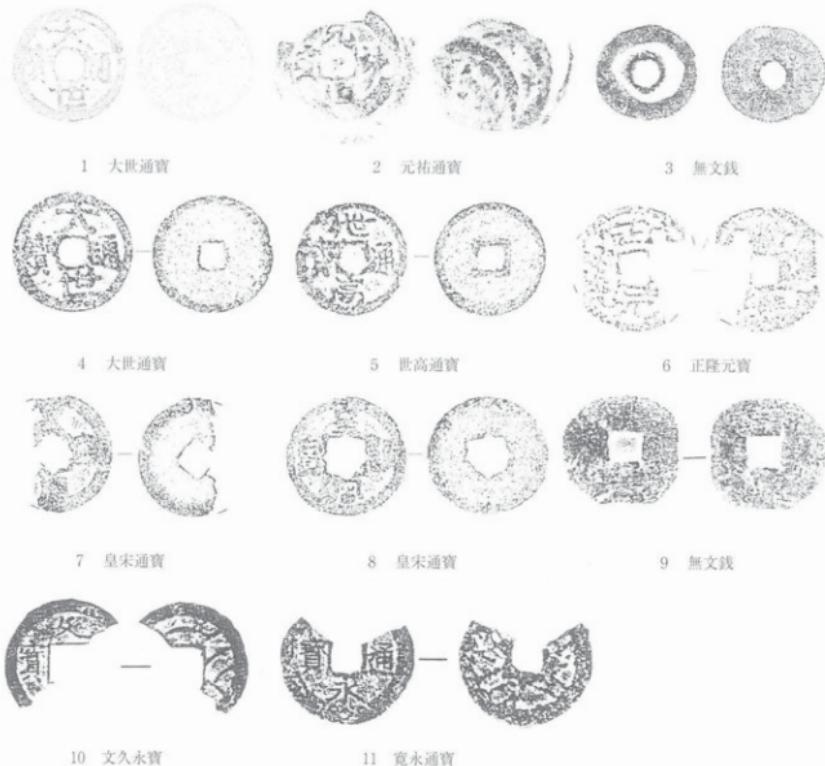


図2 錢貨拓影

(12) 天界寺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b・2002a、那覇市教育委員会 1999・2000）

天界寺は景泰年間（1450～1456）に創建され、首里城の西側に位置し、綾門大道に沿うように展開していたとされる。円覚寺、天王寺とともに三大寺と呼ばれるが、明治末に廃寺となった。首里城跡、円覚寺、天界寺、御細工所のなかでは最も銭種が多く、出土点数も多い。四銖半両をはじめとして、貨泉、唐銭2種、北宋銭16種、南宋銭2種、明銭2種、寛永通寶（古寛永、新寛永）、琉球銭1種、無文銭、輪銭まで続いている。注目される資料としては、図示されていないが金圓世寶と思われるものである。

(13) 御細工所跡（那覇市教育委員会 1991）

御細工所は漆工芸、金工芸などの王府御用品の製作所であったのではないかと考えられている。出土した銭貨は5点と少ないが、図2-10・11の文久通寶、寛永通寶の背に波紋を有する資料が各1点得られている。

4. 今後の課題

上記では首里城跡の各地点および周辺の円覚寺跡、天界寺跡、御細工所跡出土の銭貨を略述したが、ここでは各地点出土の銭種から見出される特徴を紹介し、今後の課題を若干記す。

今回紹介した各地点では、出土銭貨の研究として取り上げられることの多い大量一括出土銭や墓から一括して出土するような資料は無かった。それは第二次世界大戦の砲撃やその後の施設建設の際に遺構破壊や地形変更が行われたことも一因と考えられるが、発掘調査では検出されていない。しかし、搅乱層や盛土といった遺構や層序と直接関係のない部分からではあるが銭種不明、現代銭も含め5510点余の銭貨が出土していることは注目に値する。各地点で出土枚数が300点以上の地点でみると、歓会門・久慶門内側地域が総計1978点で最古銭が開元通寶、最新銭が乾隆通寶となっており、南殿・北殿がそれぞれ489点と328点で、最古銭は開元通寶、最新銭は乾隆通寶となっている。木曳門は585点で最古銭は貨泉、最新銭は道光通寶となっている。周辺の遺跡では天界寺が総計1211点で最古銭が四銖半両、最新銭が寛永通寶である。これらの銭種をみると、四銖半両、貨泉や開元通寶と首里城が築城される以前の銭貨が出土している。また、首里城築城以前の北宋銭が最も多く、使用される際には古いものや新しいものという考えではなく、銭貨という大きなまとまりとして捉えられていたと考えられる。そのようなことから首里城跡においては、銭貨による遺構等の年代の決定は慎重に行うが必要がある。

今回使用した資料では模鋳銭を区別して報告しているのは管理用道路地区だけであった。今後は銭文による分類だけではなく、模鋳銭や私鋳銭による分類を行い、数量や出土銭貨における割合を導き出す必要がある。なお、銭文を判別する際に透過X線撮影装置を活用すると、鋳や銭文の潰れなどによって読み取れない資料も鮮明に見えるので、かなりの割合で銭種を同定することができる。現在では無文銭として捉えられている資料も透過X線撮影の結果、元の銭種が判明する可能性もある。

また、出土枚数は少ないが、穴があいているものや加工されているものがある。穴があいているものに関しては、銭貨の形態をとどめているが、図2-6のように左右が加工され、銭文間に穴があいているものは銭貨として使用されたのか疑問が残る。

今回はほとんど触ることが出来なかったが、今後注目されるものとして無文銭がある。沖縄でも銭貨を出土する大部分の遺跡では鳩目銭とよばれる無文銭が出土するが、注目される遺物として取り上げられることは少ない。しかし、近年では無文銭が東北地方でも多量に出土することが判明し、東

北中世考古学会を中心に研究が進められ、東北地方の無文銭は洪武通寶→無文銭→輪銭という変遷図が推察できるまで進んでいる。沖縄においても無文銭の集計、出土状況の研究を行うことによって、無文銭と輪銭の関係が東北地方と同様なのか、それとも異なるのかという特徴が表れてくると考える。今後の課題として注意深くみていただきたい。

(ちねん たかひろ：調査課 専門員)

引用・参考文献

- 大庭康時 2001 「トピックⅢ九州・沖縄の出土中世模鋳銭」『中世の出土模鋳銭』高志書院
- 沖縄県教育委員会 1988 『首里城跡 欽会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』
- 沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡一南殿・北殿跡遺構調査報告書』沖縄県文化財調査報告書 第120集
- 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡一御庭跡・奉神門跡遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書 第133集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 『首里城跡一管理用道路地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第1集
- 2001b 『天界寺跡（I）一首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集
- 2001c 『首里城跡一下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002a 『天界寺跡（II）一首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集
- 2002b 『首里城跡一繼世門周辺地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第9集
- 2002c 『円覚寺跡一遺構確認調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集
- 小畠弘己 1997 「九州・沖縄における出土銭貨研究の現状と課題—九州・沖縄銭貨出土遺跡地名表—」『先史学・考古学論集Ⅱ』龍田考古会
- 2002 「九州・沖縄地方」『季刊 考古学』第78号 雄山閣
- 是光吉基 1993 「国内出土のいわゆる「無文銭」について」『潮見浩先生退官記念 考古論集』潮見浩退官記念事業会
- 坂詰秀一編 1986 「出土波来銭一中世一」考古学ライブライアリーフォーラム・サイエンス社
- 首里城研究グループ 1997 『首里城入門—その建築と歴史—』ひるぎ社
- 嵩元政秀 1970 「沖縄県内出土の銭貨について」『南島考古』創刊号 沖縄考古学会
- 永井久美男 1998 「近世の出土銭Ⅱ一分類図版一」兵庫埋蔵銭調査会
- 2001 「模鋳銭の全国的様相」『中世の出土模鋳銭』高志書院
- 2002a 『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 2002b 「出土銭貨調査の課題」『季刊 考古学』第78号 雄山閣
- 2002c 「14世紀代における流通銭」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会
- 那覇市教育委員会 1991 「御細工所跡一城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告一」那覇市文化財調査報告書第18集
- 1999 『天界寺跡一首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告一』那覇市文化財調査報告第42集

- 2000 『天界寺跡—首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告一』那覇市文化財調査報告第43集
- 日本貨幣商協同組合 1998 『日本の貨幣—収集の手引き一』
- 真柴平房敬 1997 『首里城入門』ひるぎ社
- 渡辺昇 1997 『明石城下町の出土銭』『近世の出土銭 I—論考篇一』兵庫埋蔵銭調査会

グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察

Bead-ornaments of Gusuku and Modern Periods

岸本 竹美
KISHIMOTO Takemi

ABSTRACT: The bead-ornaments excavated from the sites in Okinawa, Miyako and Yaeyama archipelago are compiled in this paper to show some localities of bead types. On the other hand, the quantity of excavated beads, as well as the site characteristics, differs between Gusuku and Modern periods. Also, a concentration of bead-ornaments in the "uganjyo(worship shrine)" can be seen both in the settlement sites and in Gusuku(castle)sites. The bead-ornaments should have had an important function in rituals, according to the folklore data and the descriptions in "Omoro-sosi".

1. はじめに

沖縄、宮古・八重山諸島におけるグスク時代から近世に相当する遺跡において、ガラスや石などを用いた勾玉、丸玉、管玉といった多様な玉製品が出土する。近年、発掘調査の増加に伴ない玉製品の出土数も年々増加する傾向にあるが、玉に関する考古学的研究は、三島格のとんぼ玉に関する論考がある程度で、数少ないのが現状である。

そこで今回は、玉製品に関する各分野の研究成果を概観し、その研究の成果と考古学的研究における課題を示した上で、グスク時代から近世に相当する遺跡から出土した玉製品を集成し、その形態的な実態と、出土状況及び出土年代から若干の考察を試みたい。なお、グスク時代の定義は高宮廣衛の定義に準じて12世紀～16世紀^①、近世の定義は梅本哲人の定義に準じて17世紀～19世紀とする^②。

2. 研究史

玉製品の研究は1980年代後半から開始された。研究史を概観するにあたって、研究視点の相違及び研究分野の推移に基づき、研究史をⅠ～Ⅳ期に時期区分した。

第Ⅰ期 玉製品に関する記事が掲載される時期

玉製品に関する最古の記録は1317年の『温州府誌』において、青、黄、白色の勾玉類を所持した宮古人が温州に漂着したとの記事である^③。1497年には『李朝実録』「齊州鳥人漂流見聞録」で、先島諸島の人々が「水精大珠」や「掛玉」といた玉類を身につけていたとの記述がみられる^④。

先島諸島の玉類に関する記録や歌謡は多く、「バイフタ フンタカ ユングドゥ^⑤」「土原女接司のアヤグ^⑥」などで語られている。1693年には、宮古人と大和人が日本で製造した多数の勾玉を八重山人に売りつけたため、これを禁ずるものとして「曲玉買入禁止に関する古文書」がある^⑦。沖縄最古の歌謡集である『おもうそうし』においても、玉製品が随所で語られている。「かはら」あるいは「かはら玉」と表現されているのが勾玉である^⑧。なお、「かはら」に関しては「瓦」と解釈するか「勾玉」と解釈するかで1900年代前半～1940年代にかけて論議がなされているが、これに関しては第Ⅲ期において後述する。

第II期 民俗学による研究が開始（1800年代～1890年代）

玉製品が學問的な研究対象として注目されるのは本期からであり、その先鞭をつけた研究分野は民俗学である。

1887年に、田代安定が研究者として初めて沖縄諸島の玉製品についての報告を行った。田代は沖縄で勾玉が巫女の飾りや家宝となって伝世されていると報告した⁸⁾。1894年には鳥居龍蔵が小竹を管状にし、これを連ねて頸部に掛ける竹珠（はけだま）という装飾品に注目して、竹珠に関する考察と勾玉の形式分類を行った。鳥居は沖縄の勾玉と本土の勾玉の比較検討を今後の課題として呈示した⁹⁾。この課題に最初に取り組んだのは中井伊與太である。1895年、中井は古墳出土の勾玉と沖縄諸島の勾玉を比較、形質、石質、意匠とともに本土のものとの類似を指摘、本土からの移入の可能性を呈示した¹⁰⁾。

同年、田代安定は八重山諸島の婦人の頸飾品である、豆科の実を連ねた「アカダマ」の所見と、野国耕吉氏所有の伝世の勾玉を実見したとの報告を寄せている¹¹⁾。

第III期 言語学による研究が開始（1900年代～1940年代）

1900年代に入ると、「おもろそうし」にみられる「かはら」の言語学的解釈についての研究が行われる。その先鞭付けたのが伊波普猷である。伊波は当初、「おもろそうし」で「やまとたびのはてかはらかいのはて・・」と謳われている「かはら」は「瓦」ではあると考えた。金石文の調査のため、東恩納寛惇と共に浦添城跡を訪れた際、「発酉年高麗瓦匠造」と刻銘のある瓦を発見したことから、「おもろ」にみられる「かわら」は城普請のために大和に瓦を買い付けに出掛けたことを謳つたものと解釈¹²⁾、真境名安興も伊波の説を支持したが¹³⁾、1929年に「かはら」は勾玉の意であると訂正した。國頭村辻土名の「ウンジャミクエナ」に「絹衣装取いが うんつけーされて がはな取勾が うんつけーされて」とあることから、「かはら」は「がはな」が訛り、かはら玉の意に解せるとしたのである¹⁴⁾。昭和17年には伊波も自説を訂正している。

言語学的解釈と平行して、民俗学の視点からも引き続き研究が進められている。1919年には島袋源一郎がノロが祭祀に臨む際のいでたちについて触れ、ノロは清白の服装をし、簪をさして勾玉を首に掛け、馬に乗り、多くの神女を従えていると紹介している¹⁵⁾。1923年には官良當社が八重山諸島の婦人たちが身につけている玉類の紹介と、玉類を身につけることの意義について考察を行った。八重山では、神人がそのしのため勾玉を掛けしており、一般的の婦人は植物の実を用いて作ったものを首に掛けているとし、玉は単に装飾の為に身につけていたのではなく、悪神や邪氣を回避するための魔除けの意味合いがあると考察した¹⁶⁾。

1930年代に入ると勾玉の形式分類や、朝鮮、日本本土の勾玉との比較検討等から、移入元に関する論議が行われるようになる。しかし、対象となる玉製品は伝世品が主で、考古資料を対象に研究が行われるのは第IV期に入ってからである。

1933年、島田貞彦はノロ、按司の所有する勾玉に注目、大型勾玉と小型勾玉の2形式に分類し、その移入元についての見解を呈示している。両形式とも材質は日本本土、南朝鮮で見られる石製勾玉が多く、沖縄諸島では産出しないものであることから、一個の完形品として両者のうちのどちらかから移入されたものであろうと述べている。島田は、南朝鮮及び日本本土においてほとんど見发现されていない大型勾玉について、沖縄という限られた地域で愛好された要因を立証することは現在のところ困難であるが、玉製品の盛行期及び流通を考察するにおいて重要な資料であるとしている。小型勾玉については、本土古墳出土の勾玉とほとんど差がみられないが、小型勾玉の中に朝鮮型の勾玉と類似し

たものが少なからず存在することに注目して、朝鮮との交流の一端を担うものではないかとの見解を呈示している。勾玉の移入経路については、硬玉の所産地を南中国地方と考える浜田耕作の一案を指示し（当時国内で硬玉の产地は未発見。昭和14年に姫川流域で产地が発見された）、玉流通経路の地域的関係において中心点に立つ沖縄の勾玉は、玉の产地から日本本土へ、日本本土から沖縄へ移入されたものではないかと説いている¹⁷⁾。

1944年、下地馨は宮古島の勾玉に注目し、その形態的な特徴や勾玉に関する伝承、古記録から移入元を検討して、本土説と南方説の二説を論じている。宮古島における勾玉の一般的な形式は、胎児形で頭部や頸部の孔に向けて三本の放射線を有する丁子頭勾玉である。宮古島に勾玉が搬入された年代に関しては、『温州府誌』や『勾玉買入れ禁止に関する古文書』等からみて長期に亘るのは明瞭であり、移入の隆盛期は本土と沖縄の往来が活発になる江戸時代中期頃で、琉球、八重山人が勾玉類を珍重していることから大量生産した勾玉を宮古島まで大量に輸出したのであろうと考えた。また一方では、勾玉が「カハラ」「マガーラ玉」と呼ばれることから、「マガーラ玉」は「真爪珪（マカハラ）」の変化で、爪珪（ジャワ）から移入されたためマガーラ玉と称するのではないかとの南方説を呈示した。しかし下地は琉球人が南洋貿易に従事していた記録は『球陽』『歴代宝案』『おもろさうし』『明史』等に散見することができるが、勾玉が日本から移入されたという説を覆すだけの資料は現在のところみられないとして、本土説を支持している¹⁸⁾。

第IV期-a 発掘調査の開始（1960年代～1980年代）

本期に入ると遺跡の発掘調査がはじまることで、考古学の研究調査が開始される時期である。

1964年、琉球政府文化財保護委員会による勝連城跡第一次発掘調査によって、玉製品が49点出土した¹⁹⁾。1979年には沖縄市仲宗根貝塚第二次発掘調査において122点が出土²⁰⁾、1981年には大里村船福遺跡において400点以上が出土し、うち140個の小玉が柱穴からまとめて得られた²¹⁾。1984年～1986年にわたって行われた勝連城跡発掘調査では、200点以上の玉製品が報告された。うち60点は貝製玉で、得られた資料には未製品も多く含まれることから、上原靜は製作過程を4段階にわけた。上原氏はその結果を踏まえ、城内で玉の製作を行っていたであろうとの見解を示している²²⁾。

民俗学の研究も引きつき行なわれている。1985年、森田孫栄は八重山諸島の民族芸能に用いる蔓と挿花に付随する露玉の呪性に焦点をあてて論述した。森田は八重山人が玉を愛好する要因として、神靈とのかかわりにおいて玉を用いることで呪性が深まるとの考えがあったのではないかと述べている。『おもろさうし』に謳われる玉も、靈力を憑依させ、名の象徴としていた様子が伺える。そのことから、八重山芸能における頭飾り下げる小玉、露玉も靈魂の象徴、または依りしろとなってであろうと述べている²³⁾。

第IV期-b 考古学的研究の開始（1980年代～現在）

1988年、三島格は宮古島の砂川元島で出土した2個のとんぼ玉に注目し、九州及び台湾のとんぼ玉との比較を行い、移入経路について考察した。ここで初めて発掘によって得られた出土品を対象とした考古学的な研究が行われた。三島は移入元について共伴する陶磁器から中国説、台湾の先住民が同類、同型のものを大量に所持していることから台湾説の2説を呈示した。三島は宮田俊彦の福州と琉球を往復する船便が台湾北部の淡水に寄港しているようとの見解から（図2）、先住民が所持するとんぼ玉が福建系漢民族にながれ、それが宮古人に渡ったのだろうと考え、台湾説を支持している²⁴⁾。

1900年、三島は若干の資料の追加と所見を呈示、平西貝塚採取のガラス玉がバイソン族所持のガラ

ス玉に類似していることから、台湾説を補強するものとして紹介している²⁵⁾。

1999年、知念村教育委員会の遺構整備にかかる発掘調査が知念村斎場御嶽でおこなわれ、三庫理の「イビヌメー（戚部の前）」と称される場所から、金箔の勾玉、翡翠、瑪瑙、ガラス製の勾玉総数9点が出土した。金箔製のうち1点は青磁碗の中に納められ、その他の勾玉は錢貨と共に伴して出土している。「イビヌメー」は最も神聖な場所とされていること、勾玉の総数である「9」という数字が琉球神道の聖なる数にあたることから、これらの玉類は「鎮め物」としての解釈がなされている²⁶⁾。

本期における言語的研究に、崎間敏勝の論考がある。崎間は『琉球国由来記』の記事に「内殿ヨリ下シ玉フ御剣、御玉」とあることから、玉は剣と共に王權の重要なシンボルであったと考えている。また、崎間は『おもろさうし』のなかの「たまの みつ まわり」という語句に注目した。この語はおそらく三重にして首に掛けることのできる長さの玉の輪であり、「世々せ みつ まわり」との語句もみられることから、この玉をもつことで世界報（豊作）を寄せ付けるとの願意がこめられていると解釈した²⁷⁾。

3. 検討

報告書内で取り扱われている玉製品は報告者によって分類方法が異なっており、形式分類を行う上での統一された基準が設定されていないのが現状である。そこで日本本土における古墳時代の玉製品の形式分類を参考に、当該地出土の玉製品の形式分類を試みたい。

3-I. 日本本土における玉製品の形式分類

1. 勾玉（長く湾曲した玉）
2. 管玉（円筒状をなし、筆の軸を短く切ったようなもの）
3. 白玉（管玉の極めて短いもので、長さが直径に達しないもの）
4. 切子玉（共通の底面を有する多角錐あるいは円錐体）
5. 薫玉（長い切子玉の稜角をとったような形で、薫の実に似たもの）
6. 丸玉（球状をなすもの）
7. 蜜柑玉（丸玉の側面に縱の凹線があるもの）
8. 山椒玉（共底面円錐体の側面に縱の凹線があり、山椒の実に似たもの）
9. 平玉（丸玉を両側面から押しつぶしたもの）
10. 小玉（丸くて小さい玉）
11. 算盤玉（横断面が円形で、戴頭円錐形を2つ合わせたもの）
12. 雁木玉（2色以上のガラスで縞模様を表したもの）
13. トンボ玉（2色以上のガラスを溶着し、斑紋を表したもの）

1~10までは高橋健自による分類で、今日的研究の基礎となっている²⁸⁾。11~13はそれ以後知られるようになった種類を藤田富士夫が紹介している²⁹⁾。

3-II. 当該地出土の玉製品の形式分類

まず、報告者の判断の相違によって形式の混在している丸玉、小玉、平玉、白玉を丸玉として包括、高さを基準にI~IIIのサブタイプを設定し、なんらかの傾向が読み取れるかを試みた。

- ・ I (1mm~2.9mm) ・ II (3mm~4.9mm) ・ III (5mm以上)

マキガイ製の貝製玉に関しては、その形態から円盤状玉と設定、形態的特徴が顕著で分類基準の明確な勾玉、管玉、棗玉、算盤玉、切子玉、雁木玉に関しては前述した日本本土の分類基準に準じることとする。その他、六角形玉は報告書の所見に準じ、滴形玉はその形態から筆者が設定した。

- ・六角形玉－六角錐の上端と下端をすばめた形状を呈するもの
- ・滴形玉－下端部にふくらみがあり、滴状を呈するもの

以上、当該地出土の玉製品を丸玉、勾玉、円盤状玉、管玉、棗玉、算盤玉、雁木玉、切子玉、六角形玉、滴形玉の10種に分類し、検討を行った。

3 - III. 形式別出土傾向

表4-1・2に遺跡別出土一覧表、図1に遺跡分布図を示し、図3～6に各形式を図示した。

丸玉が⁵（図3 1～9）1432点、全体の85%と最も多く、勾玉（図5 1～9）74点、円盤状玉（図4 1～5）65点、管玉（図6 1～3）18点、棗玉（図6 4～5）10点となっている。その他の形式（図6 6～10）の出土数は2～1点とごくわずかなものであった。

丸玉1432点のうち、報告書及び実見によって計測が可能だった1315点を対象にサブタイプ別の分類を行った。出土状況をサブタイプ別にみると（表1）、Iの出土が51%と半数を占め、ついでIIが33%、IIIが16%の出土となった。この結果を見ると、1mm～2.9mmに収まる範囲のタイプが最も一般的であったと思われる。しかし、この出土傾向になんらかの有意性がみられるかを検討するにはいたらなかった。

3 - IV. 材質別出土傾向

いずれの種類でも、ガラス製のものが最も多く出土している。

材質がもっともバラエティに富んでいるのは丸玉で、ガラスのほかに陶製、石製、石灰岩製、土製、木製、貝製、のものがみられる。ガラス製や陶製の玉は貴重品としての価値があったものと思われるが、土製、石灰岩製、木製、貝製、骨製のものに関しては、実用していた可能性の他に、なんらかの祭祀や儀式で玉製品を使用するための代用品であった可能性が考えられる。主な出土遺跡をあげると、木製が根謝名グスク²⁸、貝製が真志喜森川遺跡¹⁴や仲宗根貝塚²⁹、土製、石灰岩製が我謝遺跡¹⁵で出土している。

勾玉はガラスの他に仲宗根貝塚²⁹や我謝遺跡^{18・19}などで土製、天界寺¹⁵で貝製、斎場御嶽³⁰で金製、翡翠製、硬玉製、瑪瑙製のものが出土している。土製勾玉・貝製勾玉に関しては、丸玉と同じく代用品であった可能性が考えられる。貝製勾玉に関しては、貝が丸玉ではガラスについて多く使用されている点、勝連城跡においてマキガイ製の円盤状玉が城内で製作されていた可能性がある点から、貝という材質を用いることに何らかの意味があった可能性もあるのではないかとも思われる。

金製勾玉に関しては、真栄平房敬が戦前、聞得大君の所有する首飾りの中に金製勾玉も數点含まれていたと紹介をしているが³¹、現在聞得大君の勾玉が紛失しているため、比較検討を行えないのが現状である。

その他の玉はガラス以外に砂川元島で水晶製³²、高腰遺跡で翡翠製³³、伊佐前原第一遺跡で貝製の管玉¹⁴、勝連城跡で陶製の棗玉³⁴などが出土している。

3 - V. 遺跡の性格及び年代別出土状況

次に、出土遺跡を大きくグスク、集落遺跡、古墓、宗教・祭祀遺跡の4つの性格に分類し、グスク

時代、近世それぞれの出土状況から検討を試みたい。複合遺跡に関しては、玉製品が出土した地点の属性的性格にから設定した。なお、搅乱層、表土層から出土したものや出土層が不明なものに関しては、検討の対象から除外した。

表2-1、2にグスク時代の遺跡別出土状況、表3-1、2に近世の遺跡別出土状況を示した。

まずグスク時代の出土状況をみてみると、グスクからの出土が5遺跡160点、集落遺跡からの出土が11遺跡695点と集落遺跡が遺跡数、出土数ともにグスクを大きく上回っている。グスクで最も出土数が多いのは勝連グスク、集落遺跡で最も出土数が多いのが稻福遺跡である。

グスク内で出土した玉製品は、遺跡の性格状権力者や有力者の所有物であったと考えられる。勝連城二の郭拝所から丸玉、勾玉が出土しており²⁰、玉が祭具として用いられた可能性が高い。

集落遺跡では稻福遺跡において特筆すべき出土状況を呈している。同遺跡では「上御願」拝所近くの柱穴からまとめて140個の小玉が出土しており、また玉製品は伴わないものの、「上御願」拝所に伴なう石列から20数枚の古銭が一括して出土している。この場所は『琉球国由来記』に収録された「上之嶽」に比定される拝所であろうと推定されることから²¹、稻福遺跡は祭祀上の重要な遺跡であった可能性がある。

グスク時代において、仲宗根貝塚、稻福遺跡、真志喜森川遺跡など複数の集落遺跡からまとまった出土がみられるのに対し、近世の出土傾向をみてみると古墓からの出土が4遺跡420点、宗教遺跡からの出土が3遺跡41点、集落遺跡からの出土が2遺跡4点で、グスク時代とは異なる出土状況を呈している。

古墓においては、420点中406点がナーチュー毛遺跡出土である。そのうち1個の蔵骨器から300点以上の玉製品がまとまって検出されており、現時点では古墓における一括出土の貴重な例である²²。そのほかに蔵骨器からの検出は奥間ノロ墓の36号蔵骨器から2点、ヤッチのガマの1号区画9内、8号区画9内より各1点、9号区画12内より2点が検出している。

宗教・祭祀遺跡において特筆すべき出土状況を呈しているのは、斎場御嶽における勾玉9点の一括出土である。勾玉のうち1点は、青磁碗の中に納められた形で検出され、他の8点の勾玉は敷き詰められた古銭と共に伴して出土した。青磁・勾玉・古銭が一括して出土した場所は「威部の前（イビヌメー）」と呼称される場所で、これは神の在所を示す言葉であること、勾玉、青磁碗がともに9点ずつ出土しており、「9」という数字が琉球神道において最も神聖な数として認識されているという観点から、報告書では「鎮め物」との解釈がなされている²³。

グスク時代ではグスクや集落遺跡などから多数出土する玉製品が、近世にはいると宗教遺跡、古墓からの出土に変化している。統一王朝を確立させるにあたり、首里王府は固有信仰を再編して間得大君を頂点とした神女組織を確立した²⁴。グスク時代にグスクや集落において、玉製品を祭祀具として独自の祭祀を行っていたものが、祭祀の統合により廃絶されたため、出土傾向にこのような変化がみられるようになった可能性が考えられる。

4. 今後の課題

以上、本稿では沖縄諸島及び宮古八重山諸島におけるグスク時代～近世出土の玉製品に関する集成と考察を行った。本稿ではそれらを踏まえた上で今後の研究課題を呈示し、本稿のまとめとしたい。

本稿では玉製品を分類するにあたってその形態とサイズから分類を行い集成したが、その出土傾向になんらかの有意性がみられる今まで検討するにはいたらなかった。玉製品の材質をみるとガラス製のものが最も多かったが、マキガイを用いた円盤状玉や、丸玉に土製、木製、貝製が、勾玉にも土製、

貝製のものがみられるように、在地の素材を用いた製品も出土している。これらは代用品の可能性が考えられるが、あるいはこれらの材質を用いるのに何らかの意義があった可能性も否定できない。文献資料や民俗学的な使用例が手がかりとなるのではないかと思われる。また、玉製品の出土遺跡や出土年代から、非常に表層的ではあるが玉製品の持つ意義について考察を行ったが、推測や仮定の域を出ない不十分なものとなってしまった。遺跡の性格や出土遺構、共伴遺物を視野に入れた出土遺跡全体からの検討と、墓制や祭祀に関する研究とのリンクが必要であると思われる。

なお、本稿では玉製品の移入元に関する考察を行うには至らなかった。今後は玉製品全般を対象に研究を深化させていくことで、他地域との交流の様相をより明確にすることが課題である。

謝辞

本稿は2001年3月に提出した卒業論文『奄美・沖縄諸島及び宮古・八重山諸島出土の玉製品について』を加筆・修正したものである。指導教官である上原静先生には丁寧なご指導、ご助言を頂き、さらに下記の方々からは貴重なご教示ならびに資料実見のご配慮を賜りました。なお、国版作成の際に仲宗根瑞香さんのご協力を頂きました。末尾となりましたが記して心からの感謝を申し上げます(五十音順・敬称略)。

呉屋義勝、高宮廣衛、當銘清乃、豊里友哉、宮城弘樹、宮平真由美

(きしもと たけみ：調査課 嘴託員)

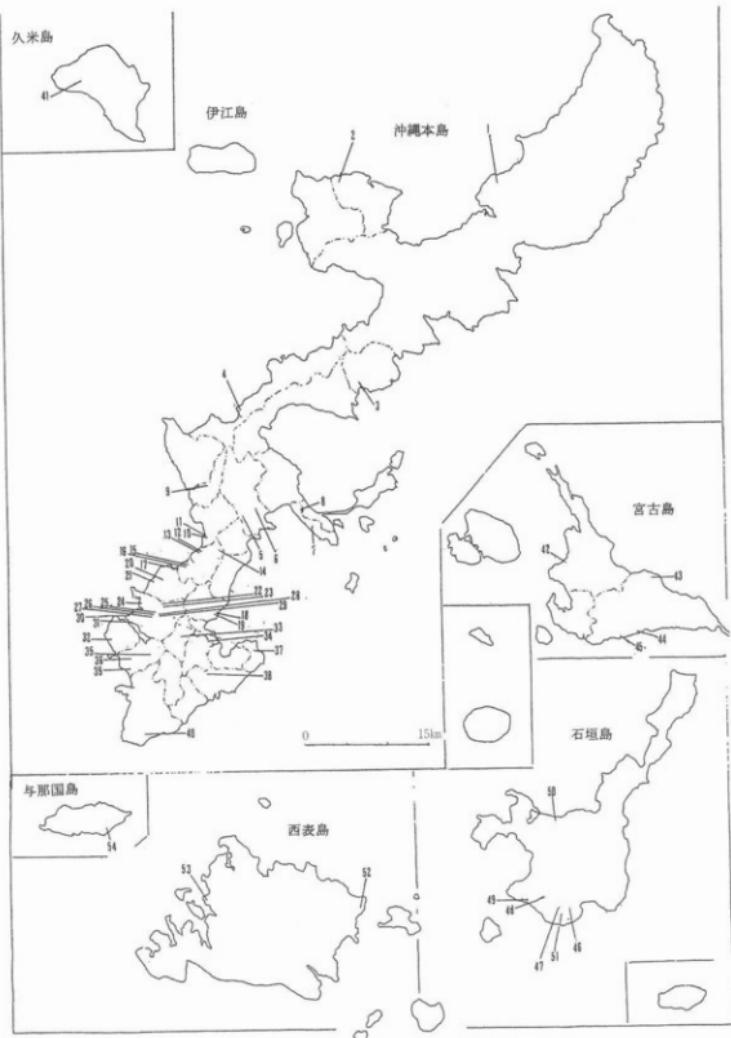
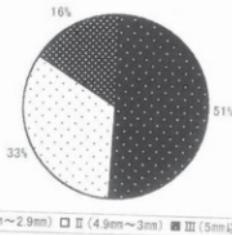


図1 出土遺跡分布図（数字は第4表1、2に対応）



図2 宮古島周辺概念図（註17）

表1 丸玉タイプ別分類表



■ I (1mm~2.9mm) □ II (4.9mm~3mm) ■ III (5mm以上)

表2-1 グスク時代遺跡別出土状況
(グスク)

	勝連城跡	屋良グスク	喜友名グスク	糸敷城跡	佐慶グスク
件数	100	120	140	160	180

表2-2 グスク時代遺跡別出土状況
(集落遺跡)

	伊良波東遺跡	相福遺跡	阿波根古島遺跡
件数	50	150	450
真志喜森川遺跡			
我謝遺跡			
規富祖遺跡			
尼ヤンヨー毛遺跡			
浜川原遺跡			
仲宗根貝塚	50	100	200
平敷屋古島			

表3-1 近世遺跡別出土状況
(集落遺跡、宗教・祭祀遺跡)

	注尾遺跡	半角仲木加納	ハナグスク	文音寺	通見御座
件数	10	20	30	40	50

表3-2 近世遺跡別出土状況
(古墓)

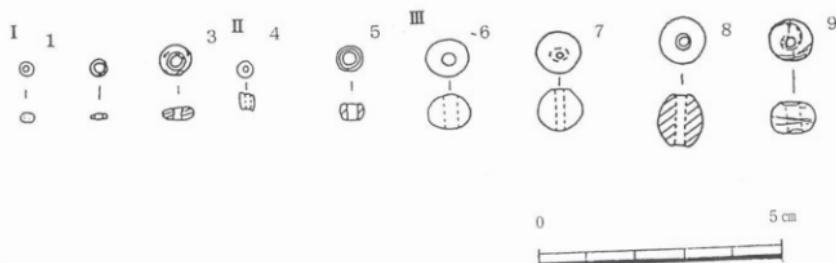
	セシキの井戸	ナーチュラル古墳	ニセジョー古墳	通見ノ古墳
件数	400	350	300	250

表4-1 玉製品出土一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の年代	遺跡の性格	丸玉	勾玉	円盤状玉	管玉	彫玉	切子玉	穿孔形玉	圓木玉	六角形玉	扇形玉	丸玉	勾玉	複数個数	合計	註
冲縄本島																			
1	相浦名グスク	大宜味村字財名城	グスク	グスク	1												1	1	28
2	今帰仁城跡	今帰仁村今帰仁	グスク	グスク	7	4	1	1									13	29	
3	瀬那エヌアタイ遺跡	瀬野田村瀬那	グスク	グスク	1												1	1	30
4	喜界島跡	喜界島	グスク	グスク	118	1											3	1	31
5	仲宗根貝冢	仲宗根町仲宗根町	グスク	グスク	1												1	1	32
6	那井城跡	那井市那井	グスク	グスク	134	19	60	8	2								223	34~36	
7	勝連町南風原	勝連町南風原	グスク	グスク	1	2											3	3	37
8	平和原古墳遺跡	勝連町平和原	グスク	グスク	2												2	2	38
9	屋良食グスク	嘉手納町屋良	グスク	グスク	1												1	1	40
10	北谷城	北谷町字大村城原	クワク	クワク	1												1	1	41
11	北谷町那比遺跡	北谷町那比	クワク	クワク	3	2											5	5	42
12	伊佐前原第一遺跡	宜野湾市伊佐	クワク	クワク	5												1	1	43
13	喜屋名グスク	宜野湾市喜屋名	クワク	クワク	1												14	14	44
14	上原同原遺跡	宜野湾市天間	クワク	クワク	48	1	2	1								4	4	45	
15	真志森川遺跡	宜野湾市真志森	クワク	クワク	4												2	2	46~47
16	真志裏石川第2遺跡	宜野湾市真志裏	クワク	クワク	1												1	1	48~49
17	奥間ノ口墓	宜野湾市宇治泊	クワク	クワク	40	4											7	7	50
18	我謝遺跡	西原町	クワク	クワク	3	3											3	3	51~52
19	辻山遺跡	辻山町	クワク	クワク	3												3	3	53
20	浦添城跡	浦添市字仲間	クワク	クワク	1												2	2	54
21	朝富出遺跡	浦添市字屋富泊	クワク	クワク	4	1											1	1	55
22	銘苅原遺跡	那覇市大字銘刈	クワク	クワク	14												3	2	56
23	ヒヤジョー毛瀬跡	那覇市大字銘刈	クワク	クワク	383											12	11	406	
24	ナーチー毛瀬跡	那覇市大字天久	クワク	クワク	9											1	1	10~57~59	
25	首里城跡	那覇市首里	クワク	クワク	2												2	2	60
26	旧中城御殿	那覇市首里	クワク	クワク	53											3	1	56~61	
27	円堂寺跡	那覇市首里	クワク	クワク	94	6	1	3	2							1	1	108	
28	天保寺跡	那覇市首里	クワク	クワク	1												1	1	66
29	側廻工所	那覇市首里	クワク	クワク	1												1	1	67
30	ハナクマグスク	那覇市番川	クワク	クワク	1												10	10	68
31	浜田古墳跡	那覇市泉崎	クワク	クワク	10												1	1	69
32	原川原遺跡	那覇市大字真志	クワク	クワク	1												1	1	70
33	安平港跡	南風原町字照屋	クワク	クワク	1														

表4-2 玉製品出土一覧

遺跡名	所在地	遺跡の年代	遺跡の性格	丸玉	勾玉	円盤状玉	管玉	張玉	切子玉	算盤形玉	簡木玉	六角形玉	滴形玉	丸玉	複数粒着 ・連結	欠損	合計
34 稲垣遺跡	大里村字稻垣	クスク	集落遺跡	432	5		2	1		1					22	7	433
35 高瀬古鳥遺跡	帶島町字高瀬	クスク～近世	集落遺跡		2												21
36 伊良遺跡	豐郷町字伊良波	クスク	集落遺跡														2
37 滝塚御館	知念町字久手堅	クスク	祭祀遺跡														71
38 糸袋城跡	玉姫村糸袋	クスク	祭祀遺跡	9													1
39 阿波根古鳥遺跡	糸瀬市阿波根	クスク	祭祀遺跡	1	1												9
40 佐賀城跡	糸瀬市字山城	クスク	祭祀遺跡														5
久米島				1													73
ヤマツチガマ	具志川村字上江州	近世～近代	古墓		3				1								2
宮古島	具志川村字上江州	近世～近代	古墓														75
住居遺跡	平良市西里	クスク～近世	集落遺跡	7	2												2
高瀬遺跡	平良市西里	クスク	集落遺跡	2													6
沙川元鳥	城辺町砂川元鳥原	クスク	集落遺跡	2	1			1									76
宮園元鳥	上村宮園	クスク	集落遺跡	4													9
石垣島																	77/8
カドウ原遺跡	石垣市大浜	クスク～近世	集落遺跡	2	3												2
アース原遺跡	石垣市大浜	クスク～近世	指含遺跡	1													79
ヒロク原遺跡	石垣市平得中上原	クスク	集落遺跡	1	2												2
ヤマハレ遺跡	石垣市新川	クスク	ク	5	4												79
平得中本別原遺跡	石垣市大浜	クスク	集落遺跡	1													3
西表島	石垣市平得	クスク	集落遺跡	3	3												9
与那原遺跡	竹富町与那原	クスク	集落遺跡	1	1												86
上村遺跡	竹富町祖内	クスク～近世	集落・生業遺跡	1	1												87
与那原遺跡	与那原町祖内	クスク	生業遺跡	1	1												88
合計				1432	74	65	18	10	2	2	2	2	1	68	25	1701	91

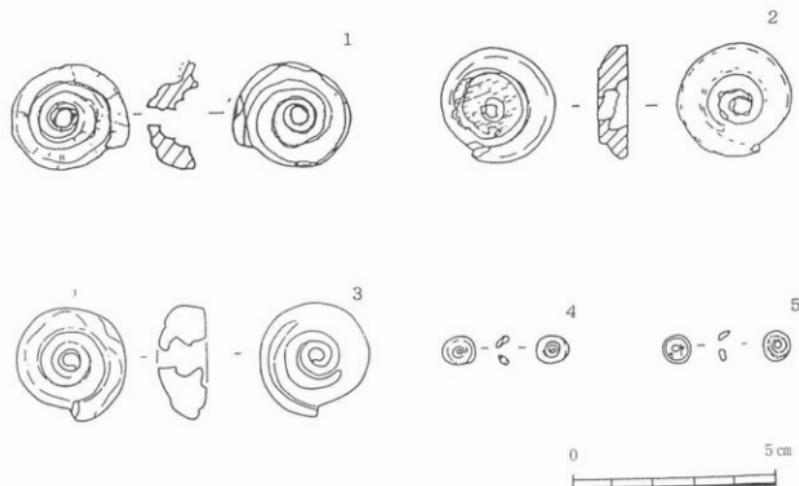


I 1 ヒヤジョー毛遺跡：ガラス製（註55） 2, 3 宮国遺跡：ガラス製（註81）

II 4 勝連城跡：ガラス製（註36） 5 喜友名グスク：石英（註42）

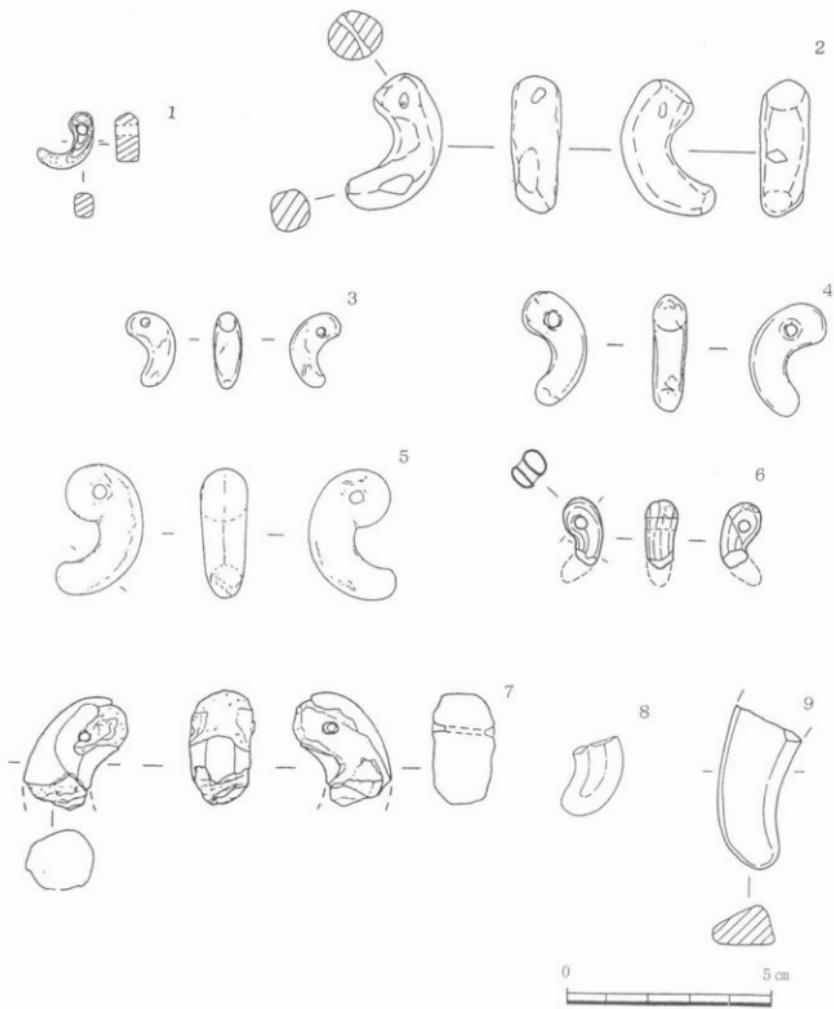
III 6, 7 勝連城跡：陶製（註36） 8 今帰仁城跡：ガラス製（註29） 9 稲福遺跡：ガラス製（註21）

図3 丸玉



1, 4, 5 勝連城跡（註36） 2 北谷町第7遺跡（註40） 3 拝山遺跡（註50）

図4 円盤状玉



1 今帰仁城跡：ガラス製（註29） 2 我謝遺跡：土製（註48） 3, 4, 5 斎場御嶽：3 ガラス製 4 瑪瑙製 5 金製：（註26）
6 天界寺：貝製（註65） 7 天界寺跡：ガラス製（註62） 8 今帰仁城跡：翡翠製（註29） 9 勝連城跡：石製
(註36)

図5 勾玉



その他

- 1 真志喜森川遺跡：ガラス製（註44） 2 今帰仁城跡：ガラス製（註29） 3 勝連城跡：水晶製（註36）
 4 勝連城跡：陶質（註36） 5 真志喜森川遺跡：ガラス製（註44） 6 天界寺：ガラス製（註65）
 7 真志喜森川遺跡：ガラス製（註44） 8 首里城跡：ガラス製（註57） 9 天界寺：ガラス製（註62）
 10 奥間ノロ墓：ガラス製（註47より筆者が再トレース）

図6 管玉・糸玉・切子玉・算盤形玉・雁木玉・六角形玉・滴形玉

引用・参考文献

- 註1 高宮廣衛 1994 「4 歴史時代」『沖縄の先史時代と文化』 第一書房
- 註2 梅本哲人 1983 「II 近世の沖縄」『沖縄歴史地図 歴史編』 高宮廣衛他編 柏書房
- 註3 須藤利一 1944 「すちうま」『南島覚書』
- 註4 嘉手納宗悦 1972 『李朝実錄琉球史科第二集』 球陽研究会
- 註5 喜捨場永 1970 『南島論叢』 伊波普猷先生記念論集委員会
- 註6 伊波普猷 1972 『古琉球』『伊波普猷全集 第一巻』 平凡社
- 註7 仲原善恵、外間守善福 1974 『校本おもさうし』 角川書店
- 註8 田代安定 1887 「人類学上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」『東京人類学会雑誌』2巻16号 東京人類学会
- 註9 田代安定 1887 「沖縄県八重山諸島婦人珠類ノ説」『東京人類学会雑誌』10巻106号 東京人類学会 1895
- 註10 鳥居龍藏 1887 「琉球諸島女子現用ノはけだま及ビ同地方ノ堀ダシノ曲玉」『東京人類学会雑誌』9巻16号 東京人類学会
- 註11 中井伊與太 1896 「琉球諸島発見ノ曲玉ト阿波國発見ノ曲玉」『東京人類学会雑誌』10巻106号 東京人類学会
- 註12 伊波普猷 1911 「土塊石片録」「古琉球」
- 註13 真境名安興・島倉龍治 1023 『沖縄一千年史』
- 註14 真境名安興 1929 「笑古漫筆」「真境名安興全集」備忘録 第9巻
- 註15 島袋源一郎 1973 『沖縄県国彌都志』 明治文献
- 註16 宮良當壯 1981 「民俗論考」『宮良當壮全集13』 第一書房
- 註17 島田貞彦 1933 「琉球勾玉考」「歴史と地理」 31巻1号
- 註18 下地馨 1944 「宮古玉の研究」『南島』3号
- 註19 琉球政府文化財保護委員会 1965 「勝連城跡第一次発掘調査報告書」
- 註20 沖縄県教育委員会 1983 「仲宗根貝塚第1,2次発掘調査報告書」
- 註21 沖縄県教育委員会 1983 「福地遺跡発掘調査報告書(上御願地区)」
- 註22 上原靜 1990 「装飾品 4貝製品」『勝連城跡一北貝塚二の郭および三の郭の遺構調査』勝連町教育委員会
- 註23 森田孫栄 1985 「八重山芸能における頌飾りの呪性—蔓・玉の周辺—」『琉大史学』第14号 琉大史学会
- 註24 三島格 1988 「沖縄、宮古島のとんぼ玉」『考古学論叢』下巻 吉川弘文館
- 註25 三島格 1990 「南島のガラス玉追跡」『南西日本の歴史と民俗』 第一書房
- 註26 知念村教育委員会 1999 「斎場御嶽整備事業報告書」
- 註27 崎間敏勝 1993 「おもろ風俗考」「琉球の文化と歴史の考察」第3集 琉球文化歴史研究会
- 註28 大宜味村教育委員会 1984 「大宜味村の道路」詳細分布調査報告 大宜味村文化財調査報告書第2集
- 註29 今帰仁村教育委員会 1983 「今帰仁城跡調査報告書1」
- 註30 宜野座村教育委員会 1990 「漢那ウェースタイ遺跡—近隣緑地公園建設に伴う発掘調査報告」宜野座村の文化財(9)
- 註31 諊谷村教育委員会 1986 「座喜味城跡」
- 註32 沖縄市教育委員会 1988 「越來城跡」沖縄市文化財調査報告書 第11集
- 註33 琉球政府文化財保護委員会 1965 「勝連城跡第二次発掘調査報告書」
- 註34 勝連町教育委員会 1983 「勝連城跡—昭和56年度本丸南側城壁修復に伴う遺構発掘調査報告—」勝連町の文化財第5集
- 註35 勝連町教育委員会 1984 「勝連城跡—南貝塚及び二の丸北地点の発掘調査—」
- 註36 勝連町教育委員会 1990 「—北貝塚・二の郭および三の郭の遺構調査—(1)」勝連町の文化財第11集

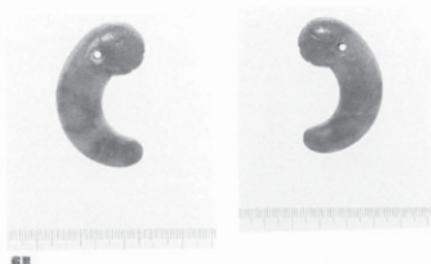
- 註37 勝連町教育委員会 1981 『平敷屋古島遺跡』
- 註38 嘉手納町教育委員会 1994 『屋良グスク－屋良城跡公園整備事業に伴う範囲確認調査一』嘉手納町文化財調査報告第1集
- 註39 北谷町教育委員会 1992 『北谷城－第7次調査一』北谷町文化財調査報告書第12集
- 註40 北谷町教育委員会 1992 『北谷城第7遺跡』北谷町文化財調査報告書第2集
- 註41 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『伊佐前原第1遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集
- 註42 沖縄県教育委員会 1999 『喜友名貝塚・喜友名グスク』沖縄県文化財調査報告書
- 註43 宜野湾市教育委員会 1992 『上原同原遺跡の発掘調査記録』宜野湾市文化財調査報告書第16集
- 註44 宜野湾市教育委員会 1994 『真志喜森川遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第18集
- 註45 宜野湾市教育委員会 1989 『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第10集
- 註46 宜野湾市教育委員会 1996 『奥間ノロ墓〔国録編〕－一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書一』宜野湾市文化財調査報告書 第24集
- 註47 宜野湾市教育委員会 1996 『奥間ノロ墓〔国録解説〕－一般国道58号線牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書一』宜野湾市文化財調査報告書 第24集
- 註48 西原町教育委員会 1983 『我謝遺跡－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告一』西原町文化財調査報告書4集
- 註49 西原町教育委員会 1983 『我謝遺跡一分譲宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書一』西原町文化財調査報告書第5集
- 註50 沖縄県教育委員会 1987 『坪山遺跡』沖縄県文化財調査報告書第83集
- 註51 浦添市教育委員会 1984 『浦添城跡第二次発掘調査概報』浦添市文化財調査報告書第6集
- 註52 浦添市教育委員会 1985 『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書第9集
- 註53 浦添市教育委員会 1983 『親富祖遺跡』浦添市文化財調査報告書第3集
- 註54 那覇市教育委員会 1997 『銘刈原遺跡－那覇市新都心土地計画整理事業に伴う緊急発掘調査報告IV』那覇市文化財調査報告書第35集
- 註55 那覇市教育委員会 1994 『ヒヤジョー毛遺跡－那覇市新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書I一』那覇市文化財調査報告書第26集
- 註56 那覇市教育委員会 2000 『ナーチューモ古墓群－那覇市新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書VII一』那覇市文化財調査報告書第44集
- 註57 沖縄県教育委員会 1988 『首里城跡－欽戸門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる造構調査』
- 註58 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡－南殿・北殿の造構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第120集
- 註59 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡－御庭跡・奉神門の造構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第133集
- 註60 沖縄県立博物館 1993 『旧中城御殿』
- 註61 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『円覚寺跡－造構確認調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 註62 那覇市教育委員会 1999 『天界寺跡－首里城線街事業に伴う緊急発掘調査報告一』那覇市文化財調査報告書第42集
- 註63 那覇市教育委員会 2000 『天界寺跡－首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告一』
- 註64 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『天界寺跡（I）－首里社殿地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集
- 註65 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『天界寺（II）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集

- 註66 那覇市教育委員会 1991 『御細工所跡－城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第18集
- 註67 那覇市教育委員会 1999 『ハナグスク－波上官復興造営事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査－』那覇市文化財調査報告書第41集
- 註68 沖縄県教育委員会 1999 『湧田古窯跡（IV）－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－』那覇市文化財調査報告書第136集
- 註69 那覇市教育委員会 1993 『尻川原遺跡－具志宮城土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市教育委員会
- 註70 南風原町教育委員会 1993 『第V章発掘調査報告 安平田遺跡』『南風原町の遺跡－町内発掘（詳細分布）調査報告書－』南風原町文化財調査報告書第1集
- 註71 豊見城村教育委員会 1990 『高嶺古島遺跡－老人保健施設（桜山荘）建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』豊見城村文化財調査報告書第4集
- 註72 豊見城村教育委員会 1987 『伊良波東遺跡－伊良波小・中学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』豊見城村文化財調査報告書第2集
- 註73 玉城村教育委員会 1991 『糸数城跡－発掘調査報告書－I』玉城村教育委員会調査報告書第1集
- 註74 沖縄県教育委員会 1994 『阿波根古島遺跡－那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』糸満市文化財調査報告書第8集
- 註75 糸満市教育委員会 1994 『佐慶グスク・山城古島遺跡－喜屋武・山城線道路改良工事に伴う発掘調査報告－』糸満市文化財調査報告書第8集
- 註76 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集
- 註77 平良市教育委員会 1983 『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告』
- 註78 平良市教育委員会 1992 『住屋遺跡－平良市新序舎建設に伴う記録保存の為の緊急発掘調査概報』平良市文化財調査報告書第2集
- 註79 城辺町教育委員会 1989 『高腰城跡－範囲確認調査報告書－』城辺町調査報告書
- 註80 砂川元島遺跡調査団 1976 『砂川元島遺跡発掘調査概報（第二次）』
- 註81 上野村教育委員会 1980 『宮国元島－宮国元島遺跡調査報告書－』
- 註82 石垣市教育委員会 1977 『八重山石垣島カンドウ原遺跡発掘調査報告』沖縄県石垣市文化財調査報告第2集
- 註83 沖縄県教育委員会 1984 『カンドウ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第58集
- 註84 石垣市教育委員会 1977 『フルスト原遺跡』石垣市文化財調査報告書第1集
- 註85 沖縄県教育委員会 1985 『アラスク村遺跡・ウイヌズズ遺跡発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第62集
- 註86 石垣市教育委員会 1983 『ビロースク遺跡－沖縄県石垣市新川・ビロースク遺跡発掘調査報告書－』石垣市文化財調査報告第6号 石垣市教育委員会
- 註87 青山学院大学文学部史学研究室 1977 『ヤマバレー遺跡発掘調査概報』
- 註88 沖縄県教育委員会 1976 『平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』
- 註89 与那良遺跡調査団 1982 『与那良遺跡発掘調査概報』
- 註90 沖縄県教育委員会 1991 『上村遺跡－重要遺跡確認調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第98集
- 註91 与那国町教育委員会 1988 『与那良遺跡－個人農家の畠地改良に伴う緊急発掘調査報告－』与那国町文化財調査報告書第2集

- 註92 高橋健自 1911 「鏡と鏡と玉」 富山房
- 註93 藤田富士夫 1990 「考古学ライブラリー52 玉」 ニュー・サイエンス社
- 註94 上原靜 1990 「装飾品 4 品製品」『勝連城跡－北貝塚ニの郭および三の郭の構造調査』勝連町教育委員会
- 註95 高良倉吉 1983 「古琉球」「沖縄歴史地図」宮城栄昌・高宮廣衛他 柏書房
- 註96 真栄平房敬 1972 「勾玉」「沖縄文化史事典」琉球政府文化財保護委員会
- 註97 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 註98 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『首里城跡－繼世門周辺地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集

追記：原稿執筆後、新たに興味深い資料がみつかった。研究史でもふれたが、鳥居龍藏、田代安定などが宮古・八重山において調査を行った際に持ち帰ったと思われる勾玉の写真3点である。波照間島において入手されたものであり、当時の調査範囲や勾玉の分布を知るうえで貴重な資料である。なお、この資料を掲載するにあたって安里嗣淳氏、盛本鶴氏のご教示と、沖縄県公文書館の高嶋朝誠氏、当山昌直氏には資料の使用についてのご許可とご協力を頂きました。記して深く感謝申し上げます。

東京大学総合研究所博物館所蔵の沖縄関係考古資料（沖縄県公文書館提供）



沖縄出土の清朝陶磁

Quing Ceramics Unearthed in Okinawa

新垣 力
ARAKAKI Tsutomu

ABSTRACT : In the Early-Modern period Japan, Okinawa was one of the rare areas that had continued to carry out the trade with China since the preceding period. As a result, a large quantity of the Quing-dynasty ceramics had been brought into the Ryukyu archipelago. The Quing-dynasty ceramics are included in almost all the archaeological sites in Okinawa, proving that the trade with China at that time was quite active. Such ceramics were produced in the southern districts of China such as the Fujian and Guangdong provinces, as well as the ceramics found from the sites of the 14th- 16th century. This fact should dedicate to the study of Okinawa cultural history that had a close relation to the southern China.

1. はじめに

鎖国体制下にあった近世日本の中で、沖縄は前代に引き続き対中貿易を行っていた数少ない地域である。そのため中国清朝の陶磁器が大量に出土しており、分布も南西諸島の全域に広がっている。

本稿は沖縄出土の清朝陶磁の産地・器種・年代などを分析し、それから推定される歴史的及び文化的背景について考察するものである。なお、今回は明末清初と称される王朝交代に伴う動乱期（16世紀末～17世紀前半）の陶磁器も対象とする。

2. 研究抄史

まず清朝陶磁に関する研究の変遷について、日本本土と沖縄の双方を比較しながら概観する。日本本土の様相は鈴木裕子氏（鈴木1999）や堀内秀樹氏（堀内2001）らがまとめているが、両氏とも清朝陶磁の研究が遅れた要因として、前代（明代）の陶磁器と比して出土量が減少したこと、国産磁器との判別が困難であったことなどを挙げている。この状況は沖縄にもほぼ通じるが、沖縄では早い時期から清朝陶磁の存在自体は知られていたようである。すでに1937年には山里永吉氏が宮古島出土の「安南で焼造されたと思われる茶碗」を報告しており（山里1937）、これが現在でいう福建・広東系の粗製染付碗に相当するものと思われる。

戦後、考古学の研究対象が中世や近世へと広がるにつれて、沖縄でも当該分野の研究が活発化していった。1963年から沖縄学生文化協会が開始した村落総合調査では、清朝陶磁までを対象とした考古学調査が実施され（沖縄学生文化協会1972ほか）、1975年に東京国立博物館で開催された「日本出土の中国陶磁展」には、八重山諸島の古墓から出土した清朝磁器が4点出品され、全国の注目を浴びた（東京国立博物館1976）。また1978年には、上記の清朝磁器を含めた八重山諸島出土の貿易陶磁を大浜永亘・関口広次の両氏が紹介しているが、その中で関口氏は沖縄は近世以後も中国陶磁が大量に出土すること、産地は景徳鎮よりも福建や広東の製品が多いと思われること、湧田窯及び壺屋窯の碗が清朝陶磁を模倣していると思われることなどを指摘している（大浜・関口1978）。その後も全国的に資料の蓄積が進み、沖縄では湧田古窯跡（沖縄県教育委員会1993）などを見はじめとした近世遺跡の発掘調査報告書が相次いで刊行されている。また沖縄を含む九州出土の清朝陶磁も大橋康二氏によりまと

められ（大橋1995）、近世における沖縄の特殊性が改めて示されている。そして1998年には、「清朝陶磁をめぐる諸問題」と題した日本貿易陶磁研究集会が開催され（日本貿易陶磁研究会1998）、ここに清朝陶磁研究は一応の到達点を迎えている。

一方、生産地である中国での窯跡調査も並行して実施されている。1990年代初頭から日中の共同研究で開始された福建省漳州窯の発掘調査では、従来「吳須手」または「スワトウ・ウェア」などと呼ばれた製品の产地が漳州窯と判明し、関係者の耳目を集め（森村1995、福建博物館1997）。他に中国側の研究としては、陳建中氏による福建省德化窯採集染付の紹介が挙げられる（陳1999）。これにより類例が多数追加され、日本出土資料の产地も明らかになりつつある。

3. 产地別にみる清朝陶磁の様相

清朝陶磁は様々な視点からのアプローチが可能だが、今回は生産地を主要要素とした分類を試みる。沖縄出土資料を产地別に分類すると、①景德鎮窯系陶磁器、②徳化窯系磁器、③漳州窯系磁器、④福建・廣東系磁器、⑤その他の陶磁器の5種類に大別され、それぞれが器種や年代などの点でも特徴的な様相を呈している。以下にその詳細を記す。

①景德鎮窯系陶磁器（第1図）

江西省景德鎮窯及びその周辺諸窯を产地とするもので、染付・褐釉染付・色絵・白磁・三彩が確認されている。器種は碗や小碗などの飲食器を中心で、首里城跡などの特殊な遺跡や古墓からの出土が目立つ。年代は染付・色絵・白磁が18世紀後半～19世紀、褐釉染付が17世紀後半～18世紀前半、三彩が17世紀後半にそれぞれ位置付けられるが、染付小杯の一部（12、13）は17世紀代に相当すると考えられる。

染付（1～26）

1～5が碗、6～11が小碗、12～18が小杯、19が皿、20と21が小瓶、22～26が散蓮華である。碗はA類：端反口縁（1、2）、B類：外反口縁（3、4）、C類：直口口縁（5）に分類される。A類は外面と内底に白抜きの菊唐草文、外底に双魚文？を描く。B類は外面に牡丹唐草文とラマ式蓮弁文、内底に花唐草文または花卉文を描き、外底に字款を施す。C類は外面と内底に菊唐草文、外底に字款を施す。いずれも出土量は多くないが、数的にはB類がやや優位とみられる。小碗も碗と同様にA類：端反口縁（6～9）、B類：外反口縁（10）、C類：直口口縁（11）に分類される。A類は外面文様が雷文？とラマ式蓮弁文（6）、龍文と花唐草文の組み合わせ（7）、菊唐草文（9）、両面に仙芝祝寿文を描くもの（8）などがある。B類とC類の文様は碗のそれと類似する。小杯は碗に比して出土例が多く、中でも9と10が大半を占める。またB類は長崎県万才町遺跡（長崎市埋蔵文化財調査協議会1996）、C類は鹿児島県若宮（神社）遺跡（鹿児島県教育委員会1999）などからも出土している。小杯はA類：外反口縁（12～14）、B類：八角杯（15）、C類：腰の張る直口口縁（16）、D類：甚筒底（17、18）に分類される。A類は外面に魁龍文を描くもの（12）、外面に飛馬文、内底に荒磯文を描くもの（13）、外面に薄文を描くもの（14）がある。B類は外面面取り部分と内底に花文を描く。C類は外面に簡略化された草花文を描く。D類の外面文様は飛馬文（17）、花唐草文（18）がある。小杯は古墓から集中して出土しており、特に13と16が多く確認される。19は端反口縁の浅皿で、外面に花卉文、内底に牡丹文を描き、外底に字款を施す。文様は碗B類や小碗B類にはほぼ類似する。遺跡からの出土例よりも伝世品（瑞慶山1994）に多く見られる資料である。20と21は胴部が球形の小瓶で、外面に山水文や花文を描く。出土例は少ない。22～26は散蓮華で、長崎や江戸でも確認される。内面の

文様は花文（22）、唐草文（23～25）、蔓草文？（26）などがある。いずれも景德鎮窯産と思われるが、徳化窯産の可能性もある。

褐釉染付（27、28）

褐釉染付は小碗（27）と小杯（28）がある。27は内面口縁部に四方櫛文を廻らせる。内底の文様の有無は不明。28は内底に山水文を描き、外底に字款を施す。褐釉染付は染付小杯と同様に古墓からの出土例が多く、器種もほぼ小杯に限られる。類例は出島和蘭商館跡（長崎市教育委員会2002）や、またインドネシアのパンテン・ティルタヤサ遺跡（パンテン遺跡研究会2000）などで確認されている。

色絵（29）

29は小杯で、外面に蝙蝠文？を描く。これ以外にも蓋付碗や粉彩を施したものがあるが、いずれも首里城跡などの特殊な遺跡からの出土で、他の遺跡からの出土例は極めて少量である。

白磁（30～32）

白磁は30～32に示す小杯が出土している。器形や出土傾向は染付小杯にはほぼ準じる。だが出土量は染付に比して少なく、器種もバリエーションに乏しい。

三彩（33）

33は両面に綠釉・黃釉・透明釉を施す三彩である。小片のため器形は不明だが、パンテン・ティルタヤサ遺跡出土の類例資料（パンテン遺跡研究会2000）から内湾口縁の小皿と思われる。沖縄では首里城跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2001a）で1点確認されている。

②徳化窯系磁器（第2図、第3図）

福建省徳化窯及びその周辺諸窯を産地とするもので、染付・色絵・白磁・瑠璃釉が確認されている。遺跡の性格に関わらず沖縄で最も多く出土する資料で、器種は景德鎮窯系の製品と同様に碗・小碗・小杯などの飲食器を中心とする。年代はほぼ18世紀に収まるが、型成形の小形品は19世紀中頃まで下ると考えられる。また白磁小杯の一部（60～63）は、17世紀後半まで遡る可能性がある。

染付（第2図、第3図34～41）

1～16が碗、17～25が小碗、26～30が小杯、31～33が小皿、34～40が皿、41が壺である。碗はA類：端反口縁（1～8）、B類：直口口縁（9～14）、C類：型造りの直口口縁（15、16）に分類される。A類は外面に草花文（1、2）、寿字文と散らし梅花文（3、4）、と散らし梅花文と龍壽文（5）、龍壽文（6）、仙芝祝壽文（7）などを描く。8は両面に仙芝祝壽文を描く。1や6のように外面腰部に蓮弁文を描くものもあるが、ほとんどは簡略化されるか無文となる。外底は「和美」などの銘を施すもの（3、4）もみられる。B類は外面に寿字文とアラベスク文？（9、14）、鳳凰文？（10）、菊唐草文（11、13）、丸文と蝙蝠文？（12）などを描く。9の外底には銘らしきものがみられる。C類は口唇部と疊付を釉剥ぎするもので、15は外面口縁部に斜格子文と魚文？を廻らせ、胴部に宝文と芭蕉文を描く。16は外面に寿字文と花卉文を描く。碗は1～4を中心にほとんどの近世遺跡でみられるが、C類は古墓からの出土例が比較的多い。小碗はA類：外反口縁（17～19）とB類：型造りの直口口縁（20、21）に分類され、それぞれの器形は碗A類と碗C類に類似する。A類は外面に線描きのみの牡丹唐草文（17、18）や梵字文（19）を描く。18のよう外底に「成」の銘を施すものもある。B類は外面に梅文と芭蕉文（21）、山水文（22、25）、草花文？（24）などを描く。20と23は碗C類の文様に類似する。小碗は20や21が古墓で散見される程度で、碗に比して出土例は少ない。小杯はA類：直口口縁（26、27）とB類：型造りの直口口縁（28～30）に分類される。A類は両面に雲龍文（26）や、外面に唐子文（27）などを描く。B類は外面に花卉文（28）、櫛文（29）、梵字文（30）などを描

く。出土傾向及び出土量は小皿と似た様相を示す。小皿はA類：端反口縁（31）とB類：型造りの端反口縁（32、33）に分類される。A類は内底に線描きのみの牡丹唐草文を描き、外底に字款を施す。B類は内底に文様を描くもの（32）や、両面に仙芝祝寿文を描くもの（33）がある。33は鹿児島県坊津町泊浜からも採集されているが（橋口1998）、小皿自体の出土例は沖縄では少ない。皿はA類：端反口縁（34～38）とB類：直口口縁（39、40）に分類される。A類は内底に草花文（34）、「志在書中」図（35）、蓮池寿石文（36）、龍壽文（38）を描くものや、内面に仙芝祝寿文を描くもの（37）などがある。外底には、碗と同様に「和美」や「成美」などの銘がみられるものもある。B類は内面に梵字文を描くもの（29）と、両面に雲龍文を描くもの（30）がある。皿の出土例は小皿よりも多く、特に34や35は伝世品でも確認されるが（宮城1981）、それでも碗類と比べると各段に少ない。41は大形の短頸壺で、外面に菊唐草文を描く。銘苅古墓群（那覇市教育委員会1998）で出土している資料である。

色繪（第3図42～55）

色絵は碗・小碗・小杯・皿・小皿が確認されているが、それぞれの器形の特徴は染付に準じる。碗はA類：端反口縁（42～47）とB類：直口口縁（48、49）に分類される。A類は外面に寿字文と花文（42、45）、寿字文と蝙蝠文（44）、菊文（46）、鳳凰文？（47）などを描く。B類は外面に雲龍文？（42、45）、寿字文と草花文（48）や草花文（49）を描く。小碗は型造りの端反口縁で、外面に百寿文？（50）や草花文（51）を描く。52は外底に「瑞」の逆文字を施す。小杯（53）は型造りの直口口縁で、外面に花卉文？を描く。54は端反口縁の皿で、内面に文様を描く。小皿（55）は型造りの端反口縁で、内面に寿字文？を描く。色絵の出土量は染付に比して非常に少なく、分布も首里城跡などの一部の遺跡に偏る。器種別にみると施A類の出土が最も多く、小杯や小碗が古墓出土資料としてこれに次いでいる。

白磷 (56~63)

白磁は小碗と小杯を図示した。小碗は端反口縁（56）と直口口縁（57）があり、いずれも型造り成形である。両面とも文様は見られない。小杯もすべて型造り成形だが、直口口縁（58、59）や外反口縁（63）、八角角（60、61）や葵筒底の外反口縁（62）、など、器形に多様なバリエーションがみられる。またこれ以外に、染付小皿B類や色絵小皿と同形の小皿も出土している。白磁の出土量は色絵よりもさらに少ないが、古墓出土資料には小杯が一定量確認される。

珊瑚釉 (64, 65)

瑠璃釉は小碗(64)と小杯(65)が出土している。いずれも造型りの直口口縁で、口唇部と蓋付を釉剥ぎしている。瑠璃釉も色絵や白磁と同様に、徳化窯系製品全体に占める量は少ないが、やはり小杯が古墓を中心に確認される。

③漳州窑系磁器（第4図）

福建省漳州窯及びその周辺諸窯を産地とするもので、染付と白磁が出土している。器種は碗・皿・鉢・盤・馬上杯などが確認されているが、器種に問わらず集落跡での出土例は少なく、首里城跡などの特殊な遺跡に集中する傾向がみられる。また出土量も一般に少ないため、優品としての性格が窺える資料である。年代は16世紀末～17世紀前半のいわゆる明末清初期に相当するが、皿の17や18は16世紀後半～17世紀初頭に遡ると考えられる。

染付(1~24)

1~13が碗、14~19が皿、20と21が鉢、22と23が大皿、24が馬上杯である。碗はA類：成形の「学な直口口縁（1~6）とB類：轆轤目の残る直口口縁（7~13）に分類される。A類は外面に波瀾文？（1）や花文（2、3）を描くものや、圓線を廻らせるもの（5、6）があるが、いずれも文様が簡

略化され判然としない。内底には捺花文（1）や宝文（4）を描くものも見られる。B類は内底及び外面腰部以下を露胎とするもので、外面に花唐草文（7～10）、豹皮状文（11、12）、花卉文（13）を描く。碗は漳州窯系磁器全体でも最も多く出土しており、特にB類が集落遺跡や古墓などで散見される。皿はA類：直口口縁（14～17）とB類：基筒底の直口口縁（18、19）に分類される。A類は内面に蔓唐草文（14、15）や四方擗文（16）を廻らせるもので、内底には「玉」や「禄」の銘（14、16）や蓮鷺文（17）などがみられる。B類は内底に二重圈線で囲まれた寿字文を配するもので、類例が根来寺坊院跡（森村1995）などで出土している。皿は出土例が少なくほとんど確認されないが、B類に関してはグスク時代出土の染付基筒底皿に混在している可能性がある。20と21は腰部の強く張る直口口縁の鉢で、外面に蓮池水禽文（20）や花文（21）を描く。内底には蓮鷺文を描くもの（20）がみられる。鉢は首里城跡などの特殊な遺跡のみで確認されるもので、出土量也非常に少ない。大皿（22、23）はいわゆる芙蓉手と呼ばれるもので、区画の施された内面に花卉文などを施す。出土例及び出土状況は鉢と似た様相を示す。24は外面と内底に花卉文を描く馬上杯で、古墓からの出土例が知られる資料である。

白磁（25）

白磁は端反口縁を呈する粗製の碗が確認されている。ヤッチのガマ（沖縄県立埋蔵文化財センター2001c）からの出土資料だが、他の遺跡での出土はほとんどみられない。

④福建・広東系磁器（第5図）

具体的な生産地は不明だが、福建省や広東省などの中国南部地域が想定されるもので、染付と白磁が出土している。器種は碗・小碗・小杯・皿・鉢・壺が確認されているが、その中でも碗類は遺跡の性格を問わず、一定量の出土がみられる。年代は17世紀～18世紀に収まるが、染付碗はA類が17世紀、B類が17世紀末～18世紀前半、C類が18世紀にそれぞれ位置付けられる。

染付（1～25）

1～12が碗、13～17が小碗、18～21が小杯、22と23が皿、24と25が鉢である。碗はA類：成形の雑な直口口縁（1～5）、B類：Aに比して成形の丁寧な直口口縁（6～9）、C類：腰部がやや丸みを帯びる直口口縁（10～12）に分類される。A類は内底及び外面腰部以下を露胎とするもので、外面に文様を描くがいずれも抽象的で判然としない。B類は内底に蛇の目状に釉を塗布するもので、外面に菊花文（6）、團龍文？（7）、圈線（8）、草文？（9）を描く。C類は内底を蛇の目状に釉剥ぎするもので、外面に丸文（10、11）や魑龍文？（12）を描く。徳化窯系製品の可能性も考えられる。碗は前述の通り最も普遍的な器種で、特にB類が多く確認される。またB類は大阪城下町跡（森1995）でも出土している。小碗はA類：直口口縁（13～15）とB類：端反口縁（16、17）に分類される。A類は外面に菊花文（13）、花卉文（14）、花唐草文？（15）を描く。15は漳州窯系製品の可能性もある。B類は外面に菊唐草文？（16）や花卉文（17）を描く。いずれも古墓からの出土資料だが、出土例は非常に少ない。小杯はA類：端反口縁（18、19）とB類：型造りの端反口縁（20、21）に分類される。A類は内底に兎文（18）や宝文？（19）を描く。B類は外面に点描文と花唐草文と組み合わせた文様を描くもので、徳化窯系製品の可能性も考えられる。小杯は量的に多くはないが、B類が古墓を中心として確認される。皿は22と23の2点を図示した。22は直口口縁を呈するもので、内面に唐草文？を描く。23は腰部が張る直口口縁の皿で、内面に圈線を廻らす。いずれも出土例及び出土量は極めて少ない。24と25は端反口縁の鉢で、内底に蛇の目釉剥ぎを施す。外面に寿字文（24）や牡丹唐草文？（25）が描かれ、内底にはスタンプによる銘が施されるものもある。双方とも出土例は少ないが、24

は多くの近世遺跡で散見される資料である。

白磁（26～30）

26と27が碗、28が皿、29が壺、30が小杯である。碗は直口口縁（26）と外反口縁（27）があり、26は内底に蛇の目状釉剥ぎを施し、27は内底に目跡が4ヶ所確認される。皿は基筒底の直口口縁で、内底及び外面腰部以下を露胎とする。28は外面に明瞭な稜を持つ短頸の壺で、安平壺とも呼ばれる資料である。小杯は型造りの端反口縁のもので、染付小杯B類と同様の器形である。白磁は壺が天界寺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2001b）などで確認されているが、全体として古墓からの出土が目立つ。しかし出土量は非常に少ない。

⑤その他の陶磁器（第6図）

生産地が前記のいずれにも該当しないもの、または生産地が判然としないものをここに一括して紹介する。1は端反口縁を呈する青磁染付の小碗で、内面に八卦文と太極図を描き、外底に字款を施す。量的に多くないものの、遺跡の性格を問わず出土が確認される資料である。产地は不明だが、景德鎮窯系製品の可能性がある。年代は18世紀後半～19世紀前半と考えられる。2～10は江蘇省宜興窯及びその周辺諸窯を產地とする陶器で、急須（2～7）・碗（8）・小杯（9、10）が出土している。急須はA類：胴部下位に最大径を持つ小形品（1）、B類：筒形（3～6）、C類：肩部に稜を持つ大形品（7）に分類される。A類は外底に「荊溪陳子文製」の銘を施す。B類は外面に貼付や盛上げによる文様を施す。C類は全体的に成形が粗雑なため、清朝陶磁のコピーを生産していた常滑焼や万古焼などを產地とする可能性もある（肩浦1999）。8は端反口縁の碗で、両面に盛上げによる文様を施す。9は直口口縁を呈するもので、外面に雷文帯を廻らせる。10は花弁形に面取りされた小杯で、外面に獸面形の耳を一対貼付する。宜興窯系陶器は首里城跡や古墓などで少量出土しているが、伝世品として確認される例（宮城1981）が全国的にも多い。年代は17世紀後半を上限とするが、おそらく清代（17世紀後半～19世紀）を通じて生産されていたものと思われる。11～17は銅緑釉を施釉する軟質の陶器で、酒会壺（11～16）と鉢（17）が確認されている。酒会壺は蓋及び身の外面に型押しによる蓮弁文を施す。17は小片のため全形は不明だが、上面観が八角形を呈する植木鉢と思われる。銅緑釉陶の器は出土量も少なく、分布も首里城跡などの一部の遺跡に限られたため不明な点が多い。ただ素地の特徴から、明代の華南彩釉陶と同様に中国南部地域で生産された可能性が高いと思われる。

4.まとめと今後の課題

以上、沖縄出土の清朝陶磁を产地別に分類し、それぞれの器種組成や年代について概観した。それにより、福建省や広東省などの中国南部地域を產地とするものが多いこと、器種は碗・小碗・小杯など大半を占めること、遺跡の性格に関係なく広範に出土すること、年代は产地別に差異はあるが、広く近世を通じて生産・輸入されていたことなどの特徴が確認され、以前からの指摘を補強する結果となった。特に产地の偏りについては、グスク時代後半頃（14世紀～16世紀）出土の陶磁器群にも類似の様相がみられるため、福建省と深いつながりを持つといわれる沖縄の文化史研究にも、多くの示唆を与えるものと考えられる。

今後の課題としては、清朝陶磁と沖縄産陶器との影響関係などが挙げられる。今回は資料紹介と問題点の整理のみに終始したため、いずれ稿を改めて論じたい。また今回実施した清朝陶磁の分類や年代の設定にも、筆者の誤解や認識不足な点があるかと思われる。先学諸氏の御指導及び御批判を戴ければ幸いである。

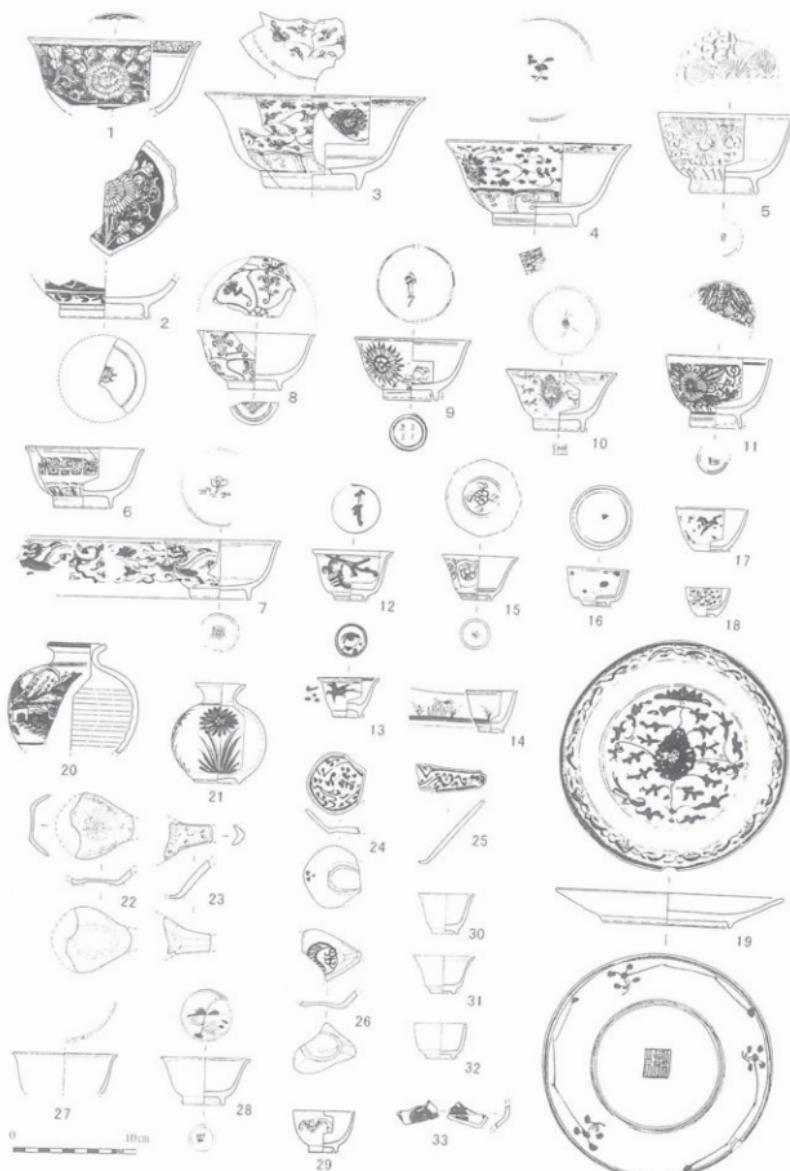
引用文献

- 大橋康二 1995 「九州における明末～清時代の中国磁器の出土分布とその内容について」『青山考古』第12号 青山考古学会
- 沖縄学生文化協会 1972 『郷土一本部備瀬集落・第三次宮古島調査報告書』第11号 沖縄大学沖縄学生文化協会
- 沖縄県教育委員会 1993 『湧田古窯跡（Ⅰ）』 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- タ 2001b 『天界寺跡（Ⅰ）』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- タ 2001c 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那浦正義 1999 「長崎出土の清朝陶磁」 『貿易陶磁研究』No19 日本貿易陶磁研究会
- 大浜永亘・関口広次 1978 「八重山群島出土の古陶磁について」 『物質文化』No31 物質文化研究会
- 鹿児島県教育委員会 1999 『若宮（神社）遺跡』 鹿児島県教育委員会
- 瑞慶山昇 1994 「久米島の陶磁器」 『久米島総合調査報告書－自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築－』 沖縄県立博物館
- 鈴木裕子 1999 「清朝陶磁の国内の出土状況－組成を中心に－」 『貿易陶磁研究』No19 日本貿易陶磁研究会
- 陳建中 1999 『徳化民窯青花』 文物出版社
- 東京国立博物館 1978 『日本出土の中国陶磁』 東京国立博物館
- 長崎市教育委員会 2002 『出島和蘭商館跡』 長崎市教育委員会
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996 『万才町遺跡』 長崎市埋蔵文化財調査協議会
- 那覇市教育委員会 1998 『銘苅古墓群（Ⅰ）』 那覇市教育委員会
- 日本貿易陶磁研究会 1998 『第19回日本貿易陶磁研究集会資料 清朝陶磁をめぐる諸問題』 日本貿易陶磁研究会
- 橋口亘 1998 「鹿児島県坊津町海岸採集の陶磁器」 『貿易陶磁研究』No18 日本貿易陶磁研究会
- パンテン遺跡研究会 2000 『パンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書 東南アジア肥前陶磁日本シンポジウム』 上智大学アジア文化研究所・国立考古学研究センター
- 福建博物館 1997 『漳州窑－福建漳州地区明清空室調査発掘報告之一』 福建人民出版社
- 堀内秀樹 2001 「中国貿易陶磁研究の到達点－明・清代－」 『季刊 考古学』第75号 雄山閣
- 宮城篤正 1981 「渡名喜島の陶磁器」 『県立博物館総合調査報告書Ⅱ－渡名喜島－』 沖縄県立博物館
- 森毅 1995 「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に－」 『ヒストリア』149 大阪歴史学会
- 森村健一 1995 「福建省漳州窑系青花・五彩・瑠璃地の編年－いわゆる「福建・廣東産青花」「スワトウ」「呉須手・赤絵」の窯跡陶片と日本の遺跡出土品の比較－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 大阪府埋蔵文化財協会
- 山里永吉 1942 「琉球の陶業史」 『琉球の陶器』 昭和書房

図版作成に使用した報告書一覧

1. 沖縄県教育委員会 1986 『松田遺跡』 沖縄県教育委員会
2. タ 1995 『湧田古窯跡（Ⅰ）』 沖縄県教育委員会
3. タ 1997 『湧田古窯跡（Ⅱ）』 沖縄県教育委員会
4. タ 1997 『慶末茅田城遺跡』 沖縄県教育委員会

5. タ 1999 『喜友名貝塚・喜友名グスク』 沖縄県教育委員会
6. タ 1999 『湧田古窯跡（IV）』 沖縄県教育委員会
7. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書一』 沖縄県立埋蔵文化財センター
8. タ 2001 『天界寺跡（I）』 沖縄県立埋蔵文化財センター
9. タ 2001 『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書一』 沖縄県立埋蔵文化財センター
10. タ 2001 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』 沖縄県立埋蔵文化財センター
11. タ 2002 『天界寺跡（II）』 沖縄県立埋蔵文化財センター
12. タ 2002 『新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター
13. タ 2002 『首里城跡－繼承門周辺地区発掘調査報告書一』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- タ－
14. 名護市教育委員会 1988 『フガヤ遺跡・田井等遺跡・羽地間切番所跡遺跡・仲尾次上グシク遺跡』 名護市教育委員会
15. 那覇市教育委員会 1998 『銘苅古墓群（I）』 那覇市教育委員会
16. タ 1999 『銘苅古墓群（II）』 那覇市教育委員会
17. タ 2000 『ナーチュー毛古墓群』 那覇市教育委員会



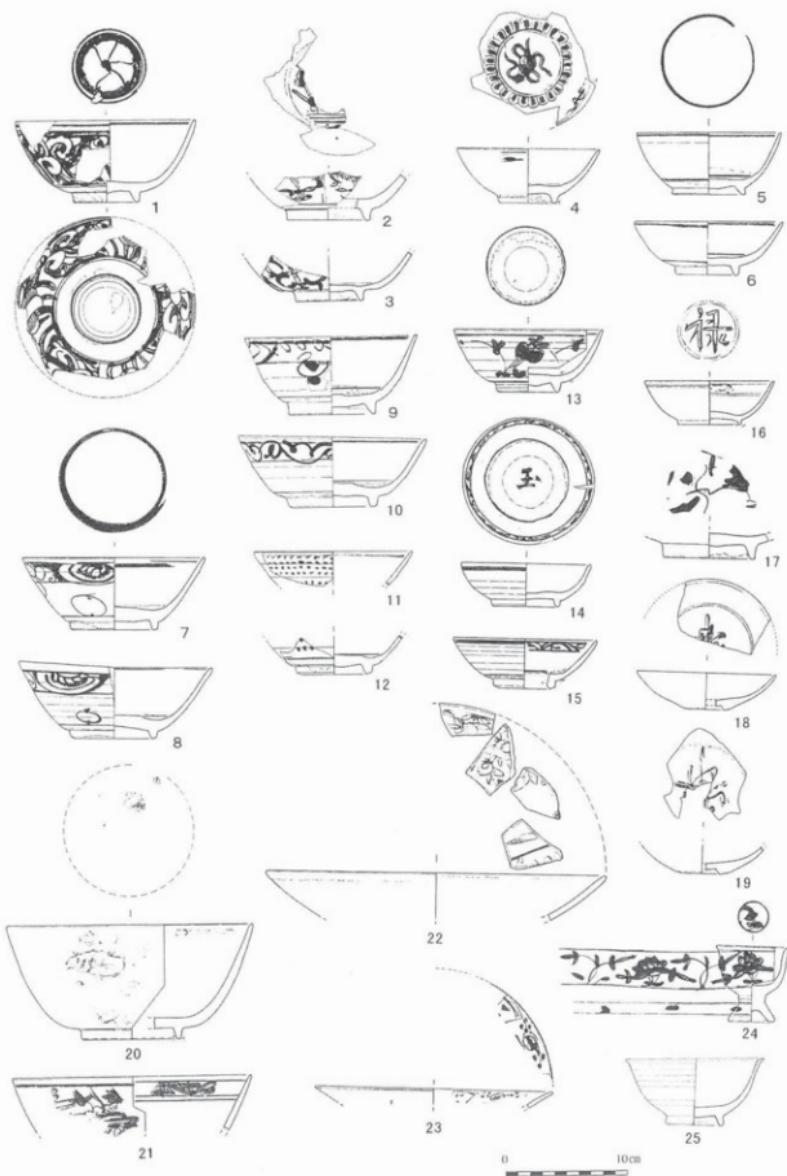
第1図 景徳鎮窯系陶磁器 染付 (1~26)、褐釉染付 (27, 28) 色絵 (29)、白磁 (30~32)、三彩 (33)



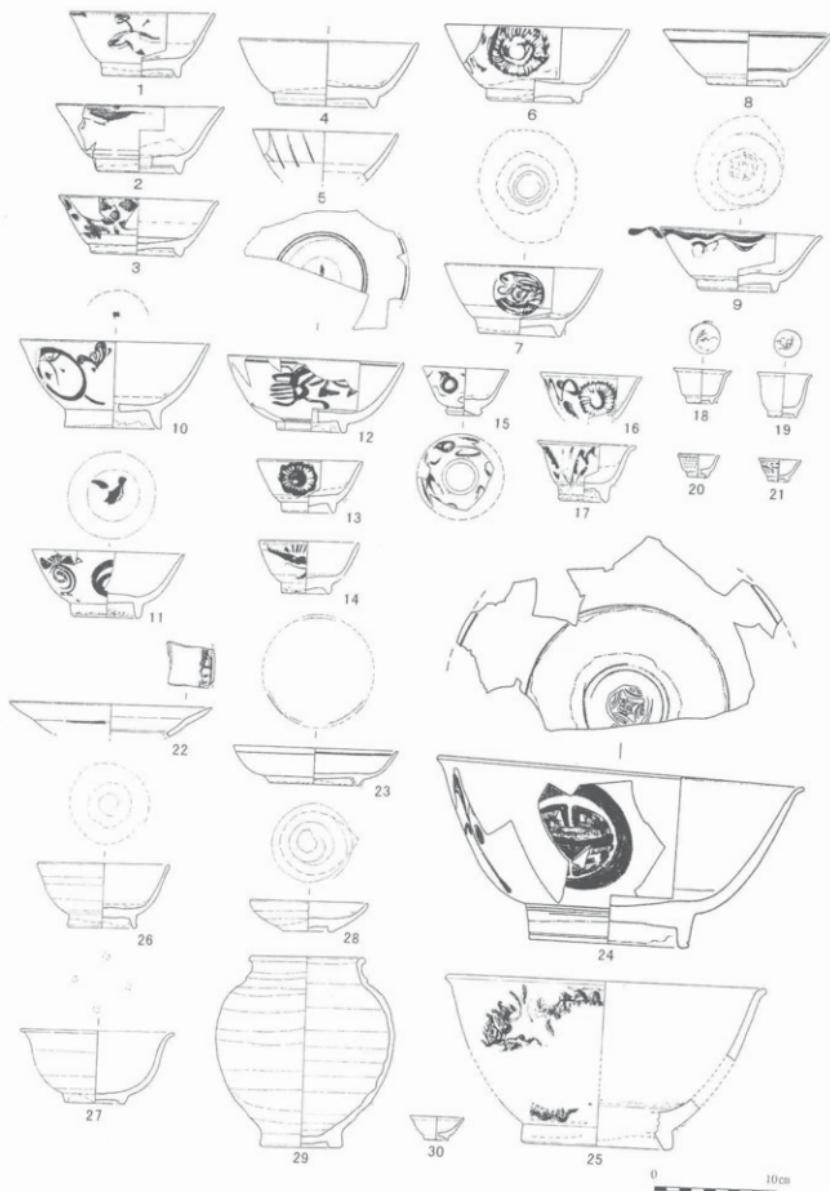
第2図 德化窯系磁器 染付



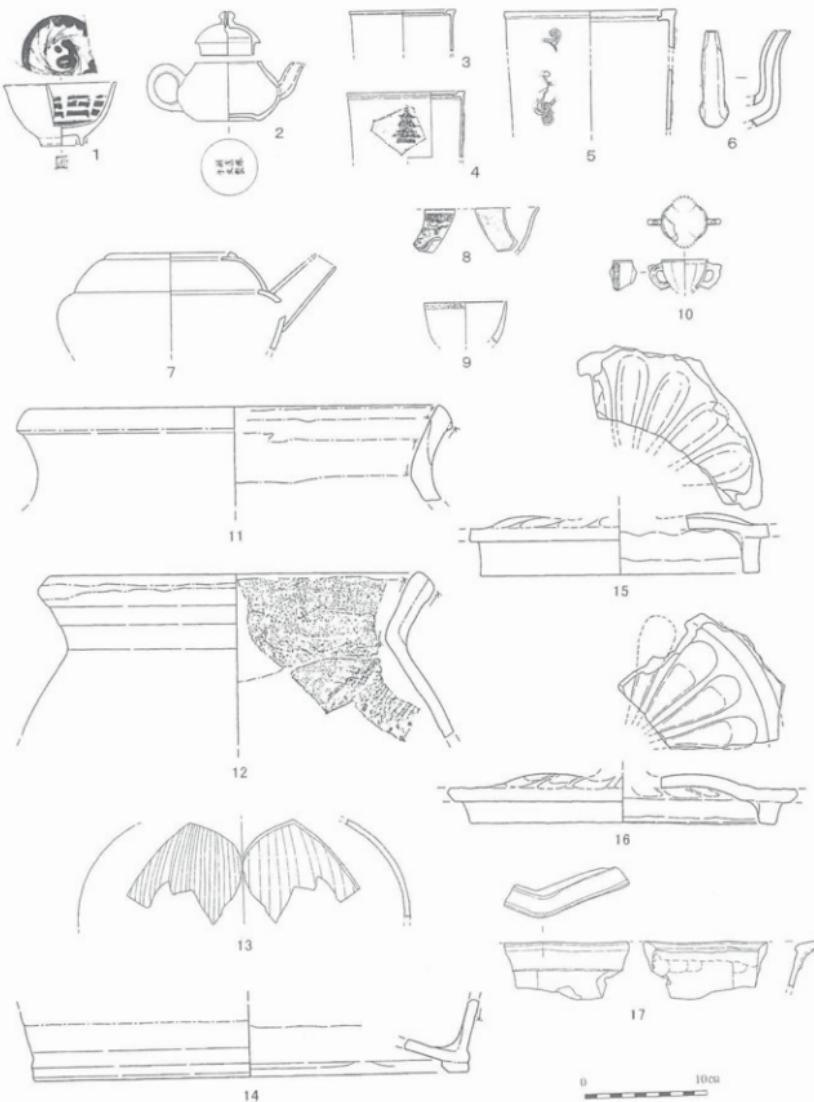
第3図 德化窯系磁器2 豪付(34~41)、色絵(42~55)、白磁(56~63)、瑠璃釉(64、65)



第4図 漳州窯系磁器 染付（1～24）、白磁（25）



第5図 福建・廣東系磁器 染付 (1~25)、白磁 (26~30)



第6図 その他の陶磁器 青磁染付（1）、宜興窯系陶器（2～10）、銅綠釉陶器（11～17）

表1 図版資料出土遺跡一覧

図	No.	遺跡名・地区名など	文献
第1図	1	新里東元島遺跡	12
	2	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	3	首里城跡（管理用道路地区）	7
	4	首里城跡（管理用道路地区）	7
	5	天界寺跡（東地区）	8
	6	首里城跡（管理用道路地区）	7
	7	首里城跡（管理用道路地区）	7
	8	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	9	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	10	天界寺跡（東地区）	8
	11	ヤッチのガマ	10
	12	ヤッチのガマ	10
	13	ヤッチのガマ	10
	14	カンジン原古墓群	10
	15	ナーチュ－毛古墓群	17
	16	ナーチュ－毛古墓群	17
	17	ヤッチのガマ	10
18	銘苅古墓群（D地区）	16	
19	喜友名グスク（本土産磁器集中部）	5	
20	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6	
21	ヤッチのガマ	10	
22	天界寺跡（東地区）	8	
23	天界寺跡（東地区）	8	
24	湧田古窯跡（行政棟地区）	2	
25	湧田古窯跡（行政棟地区）	2	
26	湧田古窯跡（行政棟地区）	2	
27	天界寺跡（東地区）	8	
28	ヤッチのガマ	10	
29	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9	
30	ヤッチのガマ	10	
31	ヤッチのガマ	10	
32	ヤッチのガマ	10	
33	首里城跡（管理用道路地区）	7	
第2図	1	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	2	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	3	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	4	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	5	松田遺跡	1
	6	首里城跡（管理用道路地区）	7
	7	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	8	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	9	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	10	湧田古窯跡（行政棟地区）	2

図	No.	遺跡名・地区名など	文献
第2図	11	天界寺跡（東地区）	8
	12	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	13	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	14	ヤッチのガマ	10
	15	新里東元島遺跡	12
	16	ヤッチのガマ	10
	17	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	18	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	19	首里城跡（管理用道路地区）	7
	20	ヤッチのガマ	10
	21	ヤッチのガマ	10
	22	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	23	ヤッチのガマ	10
	24	ヤッチのガマ	10
	25	ヤッチのガマ	10
	26	首里城跡（管理用道路地区）	7
	27	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	28	ヤッチのガマ	10
	29	ヤッチのガマ	10
	30	銘苅古墓群（C地区）	16
	31	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	32	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	33	天界寺跡（西地区）	11
	34	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	35	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	36	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	37	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	38	首里城跡（管理用道路地区）	7
	39	慶末慶田城遺跡（I地区）	4
	40	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	41	銘苅古墓群（E地区）	15
	42	銘苅古墓群（E地区）	15
	43	首里城跡（継世門周辺地区）	13
44	天界寺跡（西地区）	11	
45	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9	
46	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9	
47	天界寺跡（東地区）	8	
48	天界寺跡（東地区）	8	
49	天界寺跡（西地区）	11	
50	首里城跡（継世門周辺地区）	13	
51	天界寺跡（西地区）	11	
52	天界寺跡（東地区）	8	
53	カンジン原古墓群	10	

表2 図版資料出土遺跡一覧

図	No.	遺跡名・地区名など	文献	図	No.	遺跡名・地区名など	文献
第3図	54	首里城跡(継世門周辺地区)	13	第5図	6	田井等遺跡	14
	55	湧田古窯跡(議会棟地区)	3		7	ヤッチのガマ	10
	56	天界寺跡(東地区)	8		8	ヤッチのガマ	10
	57	ヤッチのガマ	10		9	新里東元島遺跡	12
	58	天界寺跡(東地区)	8		10	湧田古窯跡(地下駐車場地区)	6
	59	ヤッチのガマ	10		11	湧田古窯跡(行政棟地区)	2
	60	ヤッチのガマ	10		12	湧田古窯跡(行政棟地区)	2
	61	ヤッチのガマ	10		13	ヤッチのガマ	10
	62	天界寺跡(東地区)	8		14	ヤッチのガマ	10
	63	ヤッチのガマ	10		15	ナーチューモ古墓群	17
	64	首里城跡(継世門周辺地区)	13		16	ヤッチのガマ	10
	65	首里城跡(継世門周辺地区)	13		17	ヤッチのガマ	10
第4図	1	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		18	ヤッチのガマ	10
	2	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		19	ヤッチのガマ	10
	3	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		20	天界寺跡(東地区)	8
	4	ヤッチのガマ	10		21	ナーチューモ古墓群	17
	5	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		22	天界寺跡(東地区)	8
	6	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		23	天界寺跡(東地区)	8
	7	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		24	首里城跡(管理用道路地区)	7
	8	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		25	天界寺跡(東地区)	8
	9	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		26	ヤッチのガマ	10
	10	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		27	ヤッチのガマ	10
	11	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		28	ヤッチのガマ	10
	12	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		29	天界寺跡(東地区)	8
	13	ヤッチのガマ	10		30	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9
第5図	14	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		1	羽地間切番所跡遺跡	14
	15	湧田古窯跡(地下駐車場地区)	6		2	ナーチューモ古墓群	17
	16	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9		3	首里城跡(管理用道路地区)	7
	17	天界寺跡(西地区)	11		4	首里城跡(管理用道路地区)	7
	18	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		5	湧田古窯跡(地下駐車場地区)	6
	19	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		6	湧田古窯跡(地下駐車場地区)	6
	20	天界寺跡(東地区)	8		7	湧田古窯跡(地下駐車場地区)	6
	21	天界寺跡(東地区)	8		8	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9
	22	天界寺跡(東地区)	8		9	天界寺跡(東地区)	8
	23	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9		10	首里城跡(管理用道路地区)	7
	24	ヤッチのガマ	10		11	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9
	25	ヤッチのガマ	10		12	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9
第6図	1	新里東元島遺跡	12		13	首里城跡(管理用道路地区)	7
	2	首里城跡(管理用道路地区)	7		14	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9
	3	首里城跡(管理用道路地区)	7		15	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9
	4	天界寺跡(東地区)	8		16	首里城跡(下之御庭跡ほか)	9
	5	湧田古窯跡(行政棟地区)	2		17	首里城跡(管理用道路地区)	7

造墓史料にみる近世琉球の亀甲墓

Turtleback Tomb of Modern Ryukyu:A Study of Historical Records on Tomb Construction

川元 哲哉
KAWAMOTO Tetsuya

ABSTRACT: The object of this research paper can be expressed as one simple question: In comparison with other prefectures, why are the Okinawa tombs much larger in size? The turtleback tomb, one of the largest tomb types in Okinawa, is widely known to have been imported from China since the Modern period; however, there have been few studies made on the period of its adoption and its diffusion process in the Okinawa prefecture. This paper analyzes the historical records on tomb construction and discusses the background of this tomb type, focusing on the reorganization of the Modern feudalism in the late 17th century, the period in which the turtleback tomb had first appeared in Okinawa.

1. 問題意識と分析方法

沖縄の墓は規模が大きい。県外出身者だけではなく、沖縄で生まれ育ってきた者にとっても、このことは素朴な疑問であると思う。沖縄県外で一般的に見られる石塔墓と違い、沖縄の墓は切石を漆喰で固めた建造物そのものである。

このような、大規模な墓は沖縄においていつ頃あらわれたのであろうか。

現在、沖縄の代表的な墓の一つである亀甲墓は奄美諸島で確認されていないにも拘わらず¹⁾、沖縄全域に分布している事実は、近世以降に初めて亀甲墓が県内で造墓されたということになるだろう²⁾。

しかし、この亀甲墓の受容時期や普及過程について体系的にまとめられた研究論文は、史料が稀少であることもありほとんどない状況である。このような場合、どのような分析が有効であろうか。

亀甲墓は近世に出現した墓であり、これを研究対象とするならば近世の、特に出現期にスポットを当てて論じなければならない。具体的には17世紀後半の近世封建体制の再編期に注目し、亀甲墓がどのように受容され、その成立と展開に影響を与えたのかという視点で造墓に関する史料を中心に論述してみたい。

2. 最初の亀甲墓

亀甲墓は近世になって初めて確認される墓の形態の一つであり、その名称は墓屋根の形からきている。伊波普猷は、自著の中で「カーミナクー」という方言に則って「亀の甲墓」と書いているが、現在の学術論文では一般に「亀甲墓」と記されることが多い。この亀甲墓が出現したのは17世紀後半といわれている。それも首里石嶺にある伊江御殿の墓が最初のものであるという。その根拠はどこからきているのだろうか。

伊江御殿の墓を最初の亀甲墓と推定したのは東恩納寛寛である³⁾。東恩納は「伊江家伝」を引いて、同家の石嶺の墓を造ったのは5世朝敷（1635～1710）であり、造墓にさきだって「タイロウ」という中国人の風水見に墓地を見てももらった、という伝承を紹介している。これは東恩納が伝承を紹介したという形式であり、確実な史料であるとはいえないが、『尚姓家譜（伊江家）』のなかに伊江御殿の墓について記録されている箇所がある。6世朝嘉（1652～1710）の康熙26年（1687）の項に⁴⁾、

本年父朝敷呈請墳地五端八畝二十三歩于西原間切儀保境内經營未成予繼父之志修作墳墓而誌歲日擇於勝地安?祖先則子々孫々自然榮昌然命運不常營值衰微雖受肌寒之苦而輕惚祖塋放棄園地則不孝之罪不勝指屈矣

とある。朝嘉が先代の拌領した墓地に造ったこと、造墓に際し風水⁴⁾を見立てたこと、勝地であるから子孫も自然に繁栄するであろうこと、「肌寒之苦」に見舞われたとしても墓を売ってはならないこと、が記されている。

この史料の造墓記録には、風水見である「タイロウ」の名はみえない。しかし、造墓に際して風水の勝地が選ばれたのは間違いないであろうから、亀甲墓に風水の思想が投影されているといえるのではないだろうか。

3. 墓地風水の伝来

そもそも風水は琉球につつ伝来し、普及していったのか。都築晶子の一連の風水研究を要約すれば、沖縄の文献の中に風水という言葉が姿をあらわし、琉球王府の事業、村落・墓地などの立地に風水術が用いられるのは、17世紀後半に入ってからということになる⁵⁾。17世紀初頭、琉球王国は島津藩の侵入をうけ、その統治下に入る。すでに14世紀中葉以来、琉球は日本・朝鮮・中国・東南アジアを結ぶ中継貿易を行っていたのであるが、その中継貿易において航海術、通訳などの役割を担ったのは、その前後に福建から琉球に渡來して久米村を居留地としていた中国人であった。

中継貿易の衰退とともに久米村もさびれていたが、17世紀以降の近世琉球の新体制の下で、久米村に唐営籍が設置され、周辺の中国人、中国語に堪能な琉球人も唐営籍に編入されて久米村の再編が行われた⁶⁾。

こうして、唐営は進貢貿易に深く関与したばかりでなく、中国文化受容の担い手ともなり、同時に琉球王府内での地位も高まっていたのではないだろうか。風水が唐営士族の子弟を介して福州から琉球へと伝えられたのは、こうした時代を背景としていたのである。

この風水のなかで墓地風水はどのような位置付けなのだろうか。私は「風水」について論じること自体幅広く奥の深い学問の一分野だと認識しているし、全体像を把握するのは容易でないと思っている。しかし、あえて「風水」を学問として分類すると、その構成は概ね<尋竜法><五星論・九星論><村落風水><墓地風水><屋敷風水>にわけられる。墓地風水は、死者の埋葬、墓の造営と修理の際の干支による日選び、墓地の方位、亀甲墓の造営図面の作成等をおこなうものである⁷⁾。「久米村家譜」「首里家譜」の中には、墓地風水の善悪により家門の盛衰も生ずるということ、隣地における田畠や墓の造営など土木事業忌避、風水景観の護持などの觀念をみいだすことができる。

墓地風水、ひいては風水を受容した背景に王府と久米村の関係があることを先に述べたが、王府は墓地風水をどのように受け止めていたのだろうか。特に大きな墓敷地を必要とする亀甲墓と田畠との関係について、康熙36年（1697）の「法式」では、墓地を農業に差し障りのない土地に造るよう一定の制限が加えられた⁸⁾。嘉慶14年（1809）の「田地奉行規範帳」ではその制限はさらに厳しいものになっている。

墓所之儀、可成程先祖墓相用、新敷仕立申候而、不叶節ハ、山林竿迦ヨリ敷場見立、本地方ヘ致相談申候ハ、奉行見分之上、諸士ハ拾式間四間、町百姓六間四間、針岡仕付御印紙ヲ以テ作調サセ候事

できるだけ先祖伝來の墓地を用い、新しい墓地を造営するときには、植林や農耕に差し障りのない土地を選んでその地の役人と相談した上、田地奉行の検分を受けること等々、がうたわれている。

このように、琉球の墓地風水には、村落移動と同様、田畠との関係に相当の関心が払われており、王府による制限が加えられていることがわかる。つまり、墓地風水は王府の制限の中で行わなければならぬ学問であるという一面をもっていた。

少なくとも、風水の本場福建や朝鮮でよくみられる墓地風水をめぐっての訴訟、紛争（墓地争い）が琉球では確認できないことからも、墓地風水は現実に則した風水術^⑨、あるいは琉球の事情に合わせてアレンジされた可能性があると考えられる。墓地風水は思想面においてそれまでに琉球に存在した遺骨尊重の観念に合致し、また実践面においても王府の意向に対立しない形でとりおこなわれていることがわかる。

4. 史料に見る造墓・墓の形態

亀甲墓の造墓に風水見が深く関与していることを前節で述べた。造墓に関する史料としては先の伊江御殿の墓の記録をはじめ、十数件が知られている^⑩。この節では具志川御殿の墓、梁氏（小宗梁邦基）の墓、鄭姓（小宗鄭士紳）の墓、具志川村西銘の仲村家の墓の造墓記録を紹介する。亀甲墓の成立と展開を考えるうえでの基本史料としたい。

〔具志川御殿末吉の亀甲墓〕

向姓具志川家は王子尚韶威を先祖とし、歴代山北監守を勤めた。8世今帰仁按司朝又の時に首里に移住した。9世今帰仁按司朝季（1679～1724）が西原間切末吉村に新たに墓を造った。乾隆26年（1761）に10世今帰仁王子朝忠（1701～1787）がこの墓地の永代私有を王府に願い許されている。願い出た分文書の写しと墓図（造墓史料①）が『向姓家譜（具志川家）』に載っている^⑪。

造墓年代がはっきりしないが、9世朝季がこの墓を造ったのは、1691年（8世朝又が死去した年）から1724年（朝季の死去した年）までの間ということになる。

〔梁氏（小宗梁邦基）の墓〕

『梁氏家譜（九世梁邦基）』の11世都通事梁延権（1730～1785）の記録に、封阡（造墓の記録）がある。10世中議大夫梁鼎（1693～1739）が雍正11年（1733）に得た墓地に、梁延権が乾隆18年（1753）に墓を造ったと記されている。封阡の項には亀甲墓の墓図も載っている。（造墓史料②）^⑫

墓の形態を見ると、ウーシ（白）と袖石が明示されていることがわかる。庭園は左右の張り出しだけである。形態だけでなく、墓室の構造を記録しているこの史料は貴重である。

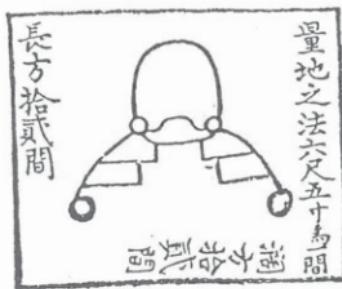
〔鄭姓（小宗鄭士紳）の墓〕

『鄭姓家譜（五世鄭士紳）』にヒンブンのある亀甲墓の墓図が確認できる。6世の鄭鴻烈（1716～1779）の封阡の項に、「波上兼宮墓坐辛向乙 乾隆三十一年丙戌三月初八日鴻烈買之故記之為以異日之證圖見作霖封阡」と記されている。次頁の造墓史料③は、7世鄭作霖（1737～1808）の封阡の記録である^⑬。乾隆31年（1766）に6世の鄭鴻烈が墓を買い、これに隣接する墓を7世鄭作霖が乾隆59年（1794）に買い、道光2年（1822）に二つの墓の間を仕切り対墓にした、というものである。墓の位置は、1766年に買った墓の場合、坐辛向乙（西北西を背にして東南東に向かう）で、1794年に買った墓のほうは、坐戌向辰（北西を背にして南東に向かう）である。この史料は、墓が不動産として売買されていたことを伝えるものとして貴重である。

(造墓史料①)



(造墓史料②)



(造墓史料③)

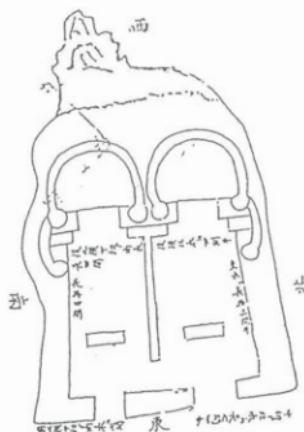


图1 龟甲墓造墓史料

次の図2は造墓史料①・②・③でとりあげた亀甲墓の図を参照にして、平面略図にしてみたものである。

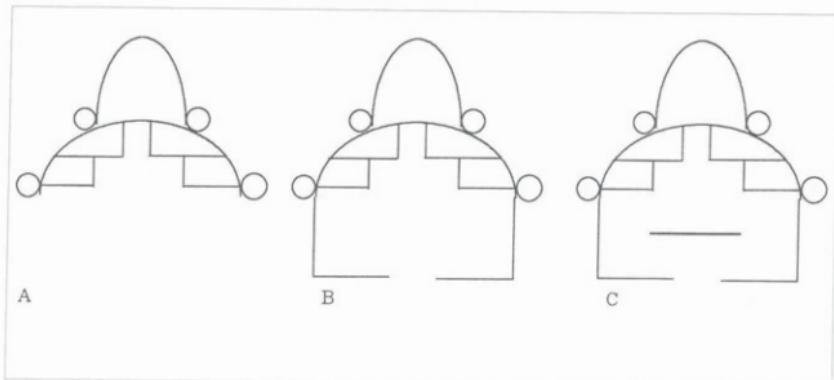


図2 亀甲墓の平面略図

これらの平面図に共通する要素は亀甲の形と左右手前の張り出しである。個々に墓型を述べると、梁氏（小宗梁邦基）の墓は庭園いのないA型、具志川御殿の末吉の亀甲墓はB型であり、鄭姓（小宗鄭士紳）の墓はC型であるといえる。A型は現在の福建によく見られる型式であるという。庭園いの型式から考えると、B型からC型へと推移したことがわかる。墓庭にヒンブンを建てるC型については福建で確認されておらず¹¹⁾、近世琉球におけるオリジナルタイプではないだろうか。また、造墓史料の年代と型式学的検討から、C型が最も新しいタイプであるといえる。

[久米島具志川村の仲村家の墓]

統いて離島農村への亀甲墓の普及を久米島具志川村仲村家の造墓史料を使ってみていくことにする。

仲村家の墓について、上江洲均が「久米島の墓制に関する資料二題」の中で論述しているが、この墓は具志川村字太田の小港松原にある。墓庭に「具志川開切小港松原墓之碑」があり、碑文は下のように記されている¹²⁾。

予家世世奉仕、受爵、然係支流之家、而墓未之染焉。康熙五十五年丙申冬、進貢正議大夫末吉親雲上、赴中華時、暫泊于兼城泊、修葺船隻。為予、擗墓地于小港松原。之良山坤向之墓地也。越年丁酉十一月十九日起工、至于翌年戊戌正月、告成。

大清康熙五十九年庚子八月吉日、愚孫山城鏡分昌敷謹立。

康熙55年（1716）に清に進貢に行く途中の末吉親雲上（蔡溫）に墓地を見立ててもらい、康熙56年（1717）11月に着工し、翌年1月に竣工したことが刻まれている。この史料は、首里・那覇に亀甲墓が出現すると間もなく、地方役人層も久米村風水見（ここでは末吉親雲上）に依頼し、これを造るようになったことを示している¹³⁾。特に、王府進貢船が寄港した久米島ではいちはやく受容されたので

はないだろうか。

では、近世琉球全土のわたり亀甲墓は普及したのだろうか。亀甲墓の造墓紀年の上限が明治年間という村も、特に本島北部を中心に少なくない。国頭村字安波で最古の亀甲墓といえば、明治6年(1873)に造られたムラ墓である。大宜味村字根路銘、名護市安和、幸喜でも明治期になってから亀甲墓を造りだしたことが知られている¹⁷⁾。

上の事例から推測できることは、まず中央である首里・那覇につながりのある地方役人層から亀甲墓を受容し、農民層にはかなりの時間をかけて徐々に広まったということ、そして亀甲墓を受容した時期、その浸透度には地域差が著しいということである。

5.まとめ

亀甲墓という独特な墓の形態について、これまで造墓史料を中心に論述を試みてきた。まず、先学の風水研究を参考にし、墓地風水は思想面においてそれまで琉球にあった遺骨尊重の觀念に合致し、また実践面においても王府の意向に対立しない形でとりおこなわれていることを示した。この墓地風水によって受容された墓が亀甲墓である。東恩納寛惇によって最初の亀甲墓と推定された伊江御殿の墓は、「自然榮昌」の勝地が選ばれており、風水思想が投影されていることがわかる。

具志川御殿の家譜をはじめとして3つの造墓史料を例示し、亀甲墓の成立と展開を考えるうえでの基本史料とした。大規模な墓仕立の際には、王府へ届け出る(許可制)ことや、一族の系図や履歴の記録である「家譜」にこの造墓史料が記されていたことは、士族層の財産として亀甲墓があつかわれていたことを示すものである。

また、本島北部・周辺離島への亀甲墓の普及について、久米島の造墓史料や民俗学調査資料から、亀甲墓を受容した時期、その浸透度には地域差が著しいことを紹介した¹⁸⁾。

そもそも著者の「沖縄の墓はどうして大きいのか」という素朴な疑問を解明するためには、造墓史料のみならず、当時の人々が死者にたいしてどのような思いを抱いていたのかという死生觀の問題や、墓の構造や立地条件など様々な視点が必要であることを認識している。近年、沖縄県内において数多くの近世墓の発掘調査が実施されており、今後はその調査成果から得られた史料を含めて亀甲墓の受容時期を中心に論考を重ねていきたい。

(かわもと てつや：調査課 主事)

註

- 1) 琉球史において、トカラ列島から与那国島まで「琉球文化圏」と定義され、共通する民俗事象が多いことが指摘されている。その中で亀甲墓が沖縄全域に分布しているのに対して、奄美諸島以北で確認されていないのは、奄美諸島が薩摩の直轄領となった1609年以降に、亀甲墓が中国からもたらされたと考えられるからである。
- 2) 東恩納寛惇「亀甲式墓と會得魯」『琉球新報』1月13日・14日(琉球新報社 1956)
『東恩納寛惇全集 卷8』P282(第一書房 1980)所収。
- 3) 『那覇市史 史料篇第1巻7 家譜資料3』P329(那覇市史編纂委員会編 1982)
- 4) 風水を定義づけるのは難しいが、都榮晶子は先学の諸研究を要約して「中國では、自然を『氣』の流れる一個の生命体とみなした。この氣の流れは場所によっては凝縮し或いは拡散する。人間もこの氣の流れと相互関係の中にある。かくして、目に見えぬ氣の凝縮する地点を、自然の環境、景觀から見極める術が生ずる—風水とは、狹義にはこの術をさし、広義には自然の環境、景觀に対する象徴的解釈の体系をさす。」としている。都榮晶子「近世沖縄

- における風水の受容とその展開』『沖縄の風水』P15（平河出版社 1990）
- 5) 同註4 P17
- 6) 琉球の対外貿易および久米村の歴史的変遷については、高良倉吉『琉球の時代一大いなる歴史像を求めて—』（筑摩書房 1980）参照。
- 7) 同註4 P37
- 8) 「法式」『沖縄県史料 前近代1』P65、「田地奉行規範帳」『沖縄県史料 前近代6』P142所収。
- 9) 向氏の嘉味田家は1680年頃、風水師に依頼して東風平の富盛に墓を移すが、往復に不便なため、20年後再度風水師に依頼し、首里に近い真和志の大道に墓を移している。『シンボジウム南島の墓』P94
- 10) 平敷令治『沖縄の祖先祭祀』2篇4章2節「亀甲墓』P327
- 11) 右亡父代西原間切末吉村西百姓地山野之内絵図朱引之通譲取墓仕立置候間、永々為墓地被下度奉存候、此旨御披露頼存候、以上
- 乾隆二十六年辛巳巴
今福仁王子
- 『那覇市史 史料篇第1巻7 家譜資料3』P274（那覇市史編纂委員会編 1982）
- 12) 乾隆十八年癸酉墓于雪崎雍正十一年癸丑五月先父所卜呈准之地未及墓開而卒余承遺命至于本年正月起工二月塗成据二十日改葬先祖父母先兄五位靈柩墓園開後
右墓在護道院之後坐辛朝乙外像神龜内長坎尺調染尺後壁前有四尺床一座左右各有一小
床庭長參丈二尺伍寸調壹丈玖尺尚傍築小石墳
- 『那覇市史 史料篇第1巻6（下）』P785（那覇市史編纂委員会編 1982）
- 13) 波上兼宮三帽屋墓在湧畠墓左右相分水為対墓故今記之以為後証
『那覇市史 史料篇第1巻6（下）』P691（那覇市史編纂委員会編 1982）
- 14) 「中国の亀甲墓は正面にはその墓の碑が建っているわけで、そこには出入り口は造られていません」北谷町教育委員会 中村恵氏の指摘。『シンボジウム南島の墓』P78
- 15) 上江洲均『沖縄の暮らしと民具』（慶友社）
- 16) 『仲里村誌』P130（仲里村誌編纂委員会 1975）参照。
- 17) 『沖縄民俗 第10号 5周年記念号』P57（琉球大学民俗研究クラブ 1965）
- 18) 宮古城辺町宇友利・砂川でも明治にはいってから亀甲墓を造りだしたことが知られている。同註17
また、石垣島では乾隆48年（1783）から亀甲墓が造られるようになったといわれており比較的早い時期に受容された墓も確認されている。喜舎場永珣『八重山民俗誌 上巻』P624

参考・引用文献

- 平敷令治 1995 『沖縄の祖先祭祀』第一書房
- 小川徹 1987 『沖縄における若干の墓型とその年代』『近世沖縄の民俗史』弘文堂
- 沖縄県地域史協議会編 1989 『シンボジウム南島の墓』沖縄出版
- 沖縄県教育委員会 2000 『沖縄県文化財調査報告書第137集 喜友名泉石豊道 喜友名山川原丘陵古墓群 伊佐前原古墓群』
- 高良倉吉 1980 『琉球の時代一大いなる歴史像を求めて—』筑摩書房
- 高良倉吉 1985 『トボスとしての墓』『地域と文化』ひるぎ社
- 都築晶子 1990 『近世沖縄における風水の受容とその展開』『沖縄の風水』平河出版社
- 上江洲均 1982 『沖縄の暮らしと民具』慶友社
- 『東恩納寛惇全集 卷8』 1980 第一書房

『伊波普猷全集 第5巻』 1974 平凡社

『那覇市史 史料篇第1巻6（下）』 1982 那覇市史編纂委員会

『那覇市史 史料篇第1巻7 家譜資料3』 1982 那覇市史編纂委員会

『沖縄県史料 前近代1』 1981 沖縄県史料編集所

『沖縄県史料 前近代6』 1989 県立図書館史料編集室

稻福遺跡出土鉄製品の保存処理

Preservation of the Iron Artifacts Excavated from Inafuku Site

青山 奈緒
AOYAMA Nao

ABSTRACT: The iron artifacts found in the archaeological site are more fragile than the pottery and stone implements. The chemical treatment process is effective in order to maintain the form of the iron artifacts. This paper presents a record of the preservation treatment of the iron artifacts unearthed from the Inafuku site in Osato village, Shimajiri county. The excavation was carried out by the Okinawa prefecture Board of Education in 1981. The preservation process included the preparatory examinations such as the X-ray inspection, and the treatments consisting of cleaning, desalinization, resin percolation and reconstruction. The treatment was successful, and a number of information was obtained through the process. The treated artifacts will last for a long time under the careful control.

1.はじめに

遺跡の発掘調査で出土する鉄製品はほとんどが錆で覆われ、なかには原型をとどめていないものも少なくない。それらは土の中から掘り出されたあとも確実に劣化は進行していく。その劣化速度は非常に緩やかである場合遺物に変化があるようには見えないが、内部では錆が進行し、確実に金属部分は失われていている。その結果、遺物は発見されたときよりも脆弱になり、手にとっただけで崩壊することもあり得る。遺物は遺跡が生きていた当時の情報を豊富に持っている貴重な文化財であるため、われわれは原状を維持するための可能な限りの努力をする必要がある。日頃の行き届いた管理はもちろんのこと、鉄製品内部にある劣化の原因を取り除き、さらに脆弱化した遺物を強化する保存処理は原状を維持し、また鉄製品内部の構造を知る有効な方法である。

今回、保存処理を行った遺物は沖縄県島尻郡大里村に所在する稻福遺跡（沖縄県教育委員会1983）から、1981年度の発掘調査で得られた鉄製品である。稻福遺跡はいわゆるグスク時代以降の遺跡で、青磁や白磁などの輸入陶磁器、豊富な量のガラス玉・勾玉などが出土している。鉄製品では鉄斧や鉄鎌のような生活用具や鉄鎌など、多くは原型が想定できるような状態で出土している。しかし出土後20年近い歳月を経た今日、それらの鉄製品は劣化が著しく極めて脆弱な遺物に成り果てており、見る影もない状態であった。そのため早急に対応することが必要であると判断し、沖縄県立埋蔵文化財センターで保存処理を行うこととした。

2. 遺物の保存処理前状況

保存処理を行う鉄製品はいずれもシリカゲルが同封されたユニパックに入れられ、さらにプラスチックケース内に保管されていた。しかしシリカゲルはピンク色に変色して本来の効果を失っており、プラスチックケースの蓋も容易に開き、しかもその状態で長期間放置されていたようでユニパック自体が脆弱化して紙のように破れ、密閉性は無いに等しかった。そのため大気中から豊富な酸素と湿度の影響を受けたとみられ、鉄製品はほとんどが層状に剥離し、錆ぶくれによる変形も見られ不用意に持つとさらにバラバラになる状況である。なかには1個体が20点近くの破片となった遺物もあって、

原型からははるかに遠い状態といえた。全形が窺える遺物はほんの僅かで、報告書の写真や実測図と照合することさえ困難を極めるほどであった。

保存処理を行った遺物は鉄釘12点、鉄錠6点、やりがんな1点、釣り針1点、その他不明品20点の49点で、期間は平成13年3月1日から30日までの1ヶ月間である。

3. 保存処理工程

基本的な保存処理工程は、次の通りである。

事前調査（写真撮影・X線透過写真撮影）



クリーニング（洗浄・錆取り）



脱塩処理



樹脂含浸（3回）



接合→終了

各工程の具体的な内容を以下に説明する。

1) 事前調査

保存処理を円滑に行うため、また現状の記録を行うためにリスト作成と保存処理前遺物の写真撮影を行った。ほとんどの遺物は1個体の破片が多く、さらに破片のサイズが小さいため保存処理中にそれらが散逸し、混乱することが予想されたので保存処理前である程度の接合を行った。接着剤はエボキシ系接着剤（セメダインハイスクーパー5・セメダイン社）を使用した。しかし遺物そのものが脆いため、接合にはかなりの時間がかかった。遺物の断面など、詳細な観察には実体顕微鏡（ライカM Z125）を使用した。

遺物の劣化状況を把握するため、X線透過写真撮影（装置：ソフテックス株式会社製 SOFTEX M-150W特）を行った。

X線透過写真撮影条件：管電圧 90~100kV

管電流 3~5 mA

照射時間 1分

使用フィルム FUJIFILM Industrial X-RAY FILM IX80

撮影したX線フィルムを観察すると、遺物には原型を覆うように錆がついていることが確認できた。また厚さが薄い遺物は内部全体まで錆が進行している傾向があり、鉄釘などは中心の芯の部分は金属が残っていた。さらに、全体を通して肉眼では確認できなかつた亀裂が多く、遺物は見た目以上に危険な状態におかれていると思われた。しかしほとんどの鉄製品は原型の輪郭は生きているようで、錆を慎重に除去すればある程度原型に近づけることがわかった。X線フィルムから得られた情報で特筆すべき点としては、板状の不明品（写真4）と報告されていた遺物に孔が8つ、等間隔で穿たれているのが確認できたことである（写真5）。遺物本体の形状についても、方形であることがわかつたため、おそらく鐘の小札であろうと推定される。

2) 洗浄・錆取り

遺物表面に付着している土砂や土中に埋蔵中、付着した油脂分などを除去するため、エタノール40

%・キシレン40%・酢酸エチル20%の混合液に遺物を浸し、固めの筆や竹串を使って洗浄を行った。柔らかい赤錆が遺物全体を覆っているうえに保管中に付着したと思われるホコリなども多く、溶液がすぐに渦るため頻繁に溶液を交換した。その後自然乾燥させ、X線フィルムを参照しながらメスやニッパー、エアーブラシ（S.S White technology製AIRBRASIVE 6500 SYSTEM II）を使用して錆を取り除いた。錆瘤になっている固い錆は取り除く際に遺物をも崩壊させる恐れがあるため、樹脂含浸によって強化した後にを行うこととした。

3) 脱塩処理

遺物どうしの摩擦や脱塩処理中の破片の散逸を防ぐため、遺物1点1点をシルクスクリーンで包んで養生し、水酸化リチウム0.1%水溶液に浸漬して鉄製品内部の脱塩処理を行った。脱塩処理中は溶液の変色具合を見ながら2~3日ごとに溶液を交換し、9日間で終了して遺物を取り上げた。アルカリ水溶液を使用したため、中性に戻す作業として遺物を蒸留水に1昼夜浸して脱アルカリの作業を行った。

また樹脂含浸を行う前に、完全に水分を除去するためエタノールに遺物を浸漬して脱水をしたあと、熱風循環式乾燥器（野木製作所製 NA-302型）を105°Cに設定して1晩、強制乾燥を行った。

4) 樹脂含浸

脆弱化した鉄製品を強化し、さらに防錆するため減圧樹脂含浸を行った。使用した樹脂はアクリル系樹脂バラロイドNAD-10・40%ナフサ溶液（Rohm&Hass社）で、30%ナフサ溶液に調製して含浸を行った。今回は樹脂の量が不足していたため、まずアルミ容器内にシルクスクリーンで養生した遺物を入れて樹脂を流し込み、作業を行うことにした。減圧含浸装置（三恒商事 SK-1200型）のタンクに遺物入りの容器を入れ、タンク内を減圧して真空中に近い状態に保って放置した（写真3）。30分から1時間後遺物を取り出し、保存処理終了後に鉄製品表面に樹脂の光沢が出ないようにするため、柔らかい綿布で遺物表面の樹脂をふき取った。2日間自然乾燥させたあと熱風循環式乾燥器を60°Cに設定して強制乾燥を行った。含浸→取り出し→拭き取り→自然乾燥→強制乾燥までの工程を3回、繰り返し行った。

5) 再接合

最終的に報告書の図版などを参照しながら接合を再確認した。変形により接合が困難な部分については無理に接合することを避け、今回は保留することにした。釣り針については、非常に細い遺物であるため強化されたあとも錆を除去することをせず、接合するだけにとどめた。鉄釘の錆瘤は無理に除去すると遺物を破損させるため、現状のままにした。

4. 保存処理終了後

保存処理を終えた遺物の状態は良好で、処理前に接合したときと比較すると強化されたことがよくわかった。しばらく様子をみても錆汁や新たな錆が出る遺物はなかった。樹脂の光沢も最低限に抑えられ、見ためにも鉄製品の質感は失われていないと思われる。保存処理後の遺物はすべて新しいユニバックスに入れ替え、蓋にゴムパッキンのあるタッパーにシリカゲルを入れて保管した。その後は定期的にシリカゲルの交換を行っている。

現在、保存処理を終了して約2年を経過しているが、遺物は保存処理終了直後と同じような状態を保っていると見える。

5. おわりに

保存処理を終えた遺物はすべてが元通りになったわけではない。接合箇所がわからなくながら変形によって接合できない遺物は1点に限らず、出土後の劣化がいかに重症であったかを物語っている。しかしX線透過写真撮影によって劣化状況や錆で見えなくなっていた原型のラインなどの情報が得られた。また、先にも述べたように板状製品の孔が確認できたことはひとつの成果である。このように保存処理は強化や劣化の抑制だけではなく、遺物の構造を知るきっかけにもなる。

保存処理によって劣化が完全に抑制されるかというと、そうではない。劣化の進行速度が遅くなっているが、永遠にその状態を保てるわけではない。いかに防錆を徹底したからといって、大気中から酸素と湿度を供給されれば徐々に鉄製品は弱っていく。保存処理終了後も、様々な管理を行うと何年か経過したあとに遺物に亀裂ができ、再処理が必要となる遺物を見ることになるであろう。保存処理が十分に行われなかつたと言えばそれまであるが、遺物は保管される環境に大きく左右されることを忘れてはならない。定期的なチェックを怠らず、遺物周辺の環境に留意することである。一見、非常に手間を要することに思えるがそうではなく、例えばビニール1枚かぶせる、遺物を保管する室内を常に清潔に保つ、気付いた時に目を向けるようにするなど、基本的でごく簡単なことから日常にとりいれれば無理なことではない。今回、保存処理を行ってそれらを実感した。

(あおやま なお：調査課嘱託員)

参考・引用文献

沖縄県教育委員会 1983 『福禄遺跡発掘調査報告書（上御願地区）』 沖縄県文化財調査報告書第50集

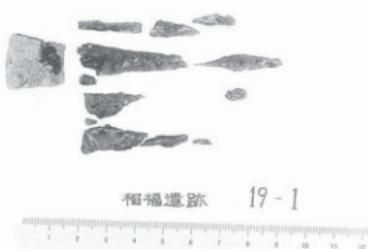


写真1 保存処理前状況



写真2 保存処理後

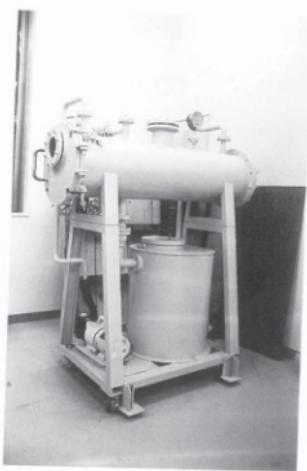


写真3 減圧含浸装置



写真4 板状不明品

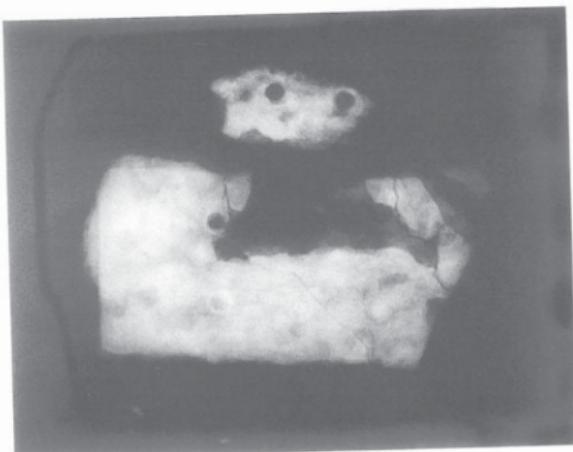


写真5 X線透過写真

文化財関係文献にみる戦争遺跡（Ⅰ）

War Sites Described in the Cultural Property Archives (I)

長嶺 均

NAGAMINE Hitoshi

ABSTRACT: In order to construct a database of the war sites in Okinawa, I have collected the descriptions related to the warfare and the war sites that appear frequently in the cultural property investigation reports. The result is shown in a table. The employed archives mainly consist of the excavation reports and the cultural property records issued by the local Board of educations, all stored in the Okinawa prefectural Center of Buried Cultural property.

沖縄県では、平成10年度から文化庁の補助を受けて、戦争遺跡詳細分布調査が開始された。その調査対象地域は沖縄本島南部に始まり、中部、北部、そして本島周辺離島までの広い範囲にわたって既に調査を終了している。これらの調査によって数多くの戦争遺跡が発見・確認されている。今後も宮古・八重山地域の調査によって、さらに多くの戦争遺跡に関する情報が蓄積されることであろう。

さて、戦争遺跡の調査方法には大きく分けて3つある。文献調査、聞き取り調査、現地調査である。本稿では文献調査の一手法として、文化財調査報告書等に頻出する戦争及び戦争遺跡に関する記述を抜き出し、一覧表にまとめてみた。報告書毎にみると、一個一個まとまりのない情報でも、集積すると大きな情報と成り得るのではないかということが、この調査のきっかけである。今後、これらの基礎データを積み上げ、最終的には戦争遺跡毎のデータベース構築を念頭に置いている。

調査対象は沖縄県立埋蔵文化財センターに所蔵されている考古学関連発掘調査報告書及び各市町村発行の文化財関連文献を中心に行った。

今後予想される市町村単位の戦争遺跡分布調査及び市町村字史誌における基礎資料調査等の参考となれば幸いである。

凡例

1. 1970年代から2002年までに刊行された沖縄県内発掘調査報告書及び市町村教育委員会発行の文化財関連文献を主な調査対象とした。
2. 地理上の範囲としては、沖縄本島北部域に含まれる市町村を対象とし、北から順に配列した。今回は、伊平屋村・伊是名村・伊江村・国頭村・大宜味村・今帰仁村・本部町・名護市・恩納村までとした。
3. 文献資料は各市町村単位で、古い順に時系列で配列した。
4. 調査表を作成し、それを埋める形で作業を進めた。〈表-1〉
但し、情報が埋まらない項目については一覧表中より除外した。
5. 調査表の中身は二つに大別される。

上位に文献資料についての情報をまとめ、書名、副題、シリーズ、著者名、発行者名、刊行年月日の順に記載した。

下位に文献から得られた情報を整理した。「市町村・大字小字名」は遺跡の所在を意味する。「名

称」は具体的な遺跡名を記載し、「関連記述」は遺跡に伴う情報である。「位置図」は遺跡の所在を示す。「遺構（図面・写真）」と「遺物（図面・写真）」は関連情報を示す。特に「遺物」は第二次世界大戦時天下の統制経済下で生産・使用された製品類（食器など）を意味する。末尾に参考資料として「戦（前・中・後）」の項目を設けた。文献中には戦前・戦時中・戦後・沖縄戦・太平洋戦争・戦跡・戦争遺跡など戦争に関連する字句が頻出するが、これは去った「沖縄戦」が県民生活に大きな変化をもたらしたことを物語っている。この中には戦争前後の時代背景に関する情報が多く含まれるため項目に加えた。洞窟全てが戦争時に利用された戦争遺跡として取り扱うべきか否か、現時点では検討の余地を残すが、使用された可能性ありと判断し、本稿では「洞窟」は全て戦争遺跡として取り扱った。

6. 情報の抜き出しは一センテンス（文）を単位とした。
7. 各情報が記載されている箇所を文章で示すと膨大な量になるので、記述が含まれる最初の行だけを抜き出し、次のように表示した。[頁→(p.)、行→(l.)]
8. 戦争及び戦争遺跡の関連記述が無い文献については、上位の文献情報のみを掲載し、文末に一覧表の形でまとめた。
9. 文中における戦争とは、沖縄戦に限定して取り上げたものである。

(ながみね ひとし：調査課 主任)

〈表一 1 戦争及び戦争遺跡関連記述調査票〉

書名			
副題			
シリーズ			
著者名			
発行者名			
刊行年月日			
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧			
市町村・大字小字名		記	載 頁
事項名	（遺跡名称）		
（説明・内容）			
位置図			
遺構図	面		
遺構写真	真		
遺物図	面		
遺物写真	真		
戦（前・中・後）			

戦争及び戦争遺跡関連記述一覧

1. 沖縄本島北部地域

書名	北部リゾート地区遺跡分布調査報告書
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第99集
著者名	岸本義彦・島袋洋・豊見山禎
発行者名	国頭村教育委員会
刊行年月日	1991年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村・今帰仁村・名護市・宜野座村・金武町
事項名	記 載 頁
（遺跡名称）	アーニーバイル碑 (p.25 1.24), 捕虜収容所 (p.89 1.10)
（説明・内容）	アーニーバイル碑 (p.25 1.24), 捕虜収容所 (p.89 1.10)
戦（前・中・後）	p.34 1.1, p.56 1.23, p.63 1.21, p.71 1.22, p.73(1.23, 1.26), p.74 1.12, p.76(1.13, 1.16), p.86 1.20

2. 伊平屋村

書名	東原貝塚ほか発掘調査報告
副題	圃場整備事業に伴う発掘調査
シリーズ	伊平屋村文化財調査報告書第2集
著者名	金城亀信
発行者名	伊平屋村教育委員会
刊行年月日	1986年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊平屋村
事項名	記 載 頁
（遺跡名称）	クマヤ洞穴 [p.13(1.5, 1.16)]
戦（前・中・後）	p.44 1.23

書名	伊平屋村の遺跡
副題	村内遺跡詳細分布調査報告書
シリーズ	伊平屋村文化財調査報告書第3集
著者名	西銘章
発行者名	伊平屋村教育委員会
刊行年月日	2000年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊平屋村
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.4(1.30, 1.32), p.45 1.2, p.84(1.3, 1.22, 1.23)

3. 伊是名村

書名	文化財調査報告書
副題	伊是名玉陵・尚円王みほそ所・銘苅殿内
著者名	又吉真三
発行者名	社団法人沖縄県建築士会
刊行年月日	1977年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊是名村
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.12 1.26, p.19(1.12, 1.17, 1.29)

書名	具志川島遺跡群
副題	第1次発掘調査報告書
シリーズ	伊是名村文化財調査報告書第1集
著者名	安里嗣淳・仲村恩・佐野一・上村俊雄・大城逸朗・当間一郎
発行者名	伊是名村教育委員会
刊行年月日	1977年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊是名村具志川島
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	龍神洞遺跡(p.5)
位置 図	龍神洞遺跡(p.5)

書名	具志川島遺跡群
副題	第2次発掘調査報告書
シリーズ	伊是名村文化財調査報告書第2集
著者名	安里嗣淳・木下尚子・佐野一
発行者名	伊是名村教育委員会
刊行年月日	1978年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊是名村具志川島
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	龍神洞遺跡(p.6)、波之上洞穴遺跡 [(p.43 1.21, p.48 表, p.51 (1.9, 1.12), p.52 1.4)]
位置 図	龍神洞遺跡(p.6)

書名	具志川島遺跡群
副題	第3次発掘調査報告書
シリーズ	伊是名村文化財調査報告書第3集
著者名	安里嗣淳・木下尚子・仲村恩・佐野一
発行者名	伊是名村教育委員会
刊行年月日	1979年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	

市町村・大字小字名 事 名 (遺跡名称) 位 置	伊是名村具志川島 項 称 龍神洞遺跡(p.4), 洞穴墓(p.21 1.31, p.26 1.28), 波之上洞穴遺跡 [p.26(1.19, 1.20, 1.21)], 洞穴 [p.26(1.19, 1.23)]	記 載 頁
---	--	-------------

書 名 副 題 シリ ーズ 發 行 者 名 刊 行 年 月 日	伊是名貝塚 緊急発掘調査報告書 伊是名村文化財調査報告書第4集 伊是名村教育委員会 1979年3月	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名 事 名 (遺跡名称) 位 置	伊是名村字伊是 龍神洞遺跡(p.4)	記 載 頁

書 名 副 題 シリ ーズ 著 者 名 發 行 者 名 刊 行 年 月 日	伊是名ウラジカ遺跡 発掘調査報告書 伊是名村文化財調査報告書第5集 安里嗣淳・上原静・手塚直樹 伊是名村教育委員会 1980年3月	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名 事 名 (遺跡名称) 位 置	伊是名村字勢理客系数原 龍神洞遺跡(p.5)	記 載 頁

書 名 副 題 シリ ーズ 著 者 名 發 行 者 名 刊 行 年 月 日	具志川島遺跡群 第4次発掘調査報告書 伊是名村文化財調査報告書第6集 安里嗣淳・仲村愿・木下尚子・大城慧・花城潤子 伊是名村教育委員会 1981年3月	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名 事 名 (遺跡名称) 位 置	伊是名村具志川島 龍神洞遺跡(p.5)	記 載 頁

書 名 シリ ーズ 著 者 名 發 行 者 名 刊 行 年 月 日	伊是名村の遺跡 伊是名村文化財調査報告書第7集 大城慧 伊是名村教育委員会 1984年3月	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名 事 名 (遺跡名称) 関 連 記 述 (説明・内容)	伊是名村 伊是名龍神洞遺跡(p.13 1.1, p.37 表), 半洞穴(p.13 1.2), 洞穴[p.13(1.5, 1.6)] 伊是名龍神洞遺跡(p.13)	記 載 頁

位 置 図	伊是名龍神洞遺跡(p.41)
遺構 写 真	伊是名龍神洞遺跡(p.13)
戦 (前・中・後)	p.71 表

書 名	具志川島遺跡群
シリーズ	伊是名村文化財調査報告書第9集
著 者 名	岸本義彦・本田道輝・豊見山植・高宮廣衛・松下孝幸・太田純二・上村俊雄・沖縄国際大学考古学研究室・鹿児島大学考古学研究室
発行者名	伊是名村教育委員会
刊行年月日	1993年3月
	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名	伊是名村具志川島
事 項	記 載 頁
戦 (前・中・後)	p.207 1.9

書 名	伊是名元島遺跡
副 題	伊是名元島遺跡ほか詳細分布調査報告書
シリーズ	伊是名村文化財調査報告書第10集
著 者 名	岸本義彦・伊藤慎二・林徹・田畑幸嗣・パリノ・サーヴェイ株式会社
発行者名	伊是名村教育委員会
刊行年月日	2000年3月
	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名	伊是名村
事 項	記 載 頁
戦 (前・中・後)	p.10 1.7

4. 伊江村

書 名	沖縄県伊江島 ナガラ原西貝塚の試掘調査
シリーズ	伊江村文化財調査報告書第3集
著 者 名	安里嗣淳
発行者名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1977年3月
	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名	伊江村
事 項	記 載 頁
名 称 (遺跡名称)	伊江島カダ原洞穴遺跡(p.8), 伊江島ゴヘズ洞穴遺跡(p.8)
位 置 図	伊江島カダ原洞穴遺跡(p.8), 伊江島ゴヘズ洞穴遺跡(p.8)

書 名	沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査
副 題	第2次概報
シリーズ	伊江村文化財調査報告書第5集
著 者 名	長谷川善和・加藤晋平・大山盛保・川島由次・大城逸朗・野原朝秀・野村家宏・小野慶一・山口敏
発行者名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1978年3月
	戦争及び戦争遺跡関連記述一覧
市町村・大字小字名	伊江村
事 項	記 載 頁
名 称 (遺跡名称)	ゴヘズ洞穴(無頁～p.1, p.3～p.6, p.8, p.10, p.18～p.19, p.22, p.27), 日本軍の陣地(無頁 1.5), 防空壕(無頁 1.5), 天川洞(p.11)
関連記述 (説明・内容)	ゴヘズ洞穴(無頁)
遺構 図 面	ゴヘズ洞穴(p.3, p.4)
戦 (前・中・後)	無頁, p.11 1.16

書名	伊江村南西地区の遺跡分布
シリーズ	伊江村文化財調査報告書第7集
著者名	名嘉真武夫・安里嗣淳
発行者名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1978年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村
事項	記載頁
名 称 (遺跡名称)	伊江島飛行場跡〔無頁(写真、図)、p.11〕、ニヤーフガ洞遺跡〔無頁(図)、p.3(1.15、1.16)、p.10〕、ゴヘズ洞穴(無頁(図)、p.11(図)、p.19 1.2)、伊江島カダ原洞穴遺跡(無頁(図)、p.13(図)、アーニーバイルの碑(無頁(図)、p.2 1.3)、イヌガ洞穴遺跡(無頁(図)、p.12)、ニヤテヤ洞穴(p.10)
関連記述 (説明・内容)	伊江島ゴヘズ洞穴遺跡(p.19 1.2)、イヌガ洞穴遺跡(p.19 1.4)、伊江島カダ原洞穴遺跡(p.19 1.6)
位置国	ニヤーフガ洞遺跡(無頁(図)、p.10)、ゴヘズ洞穴遺跡(無頁(図)、p.11(図)、ニヤテヤ洞窟(p.10)、イヌガ洞穴遺跡(p.12(図)、カダ原洞穴遺跡(p.13)、伊江島飛行場跡(無頁、p.11)
遺構 写 真	ニヤーフガ洞遺跡(p.17)、伊江島飛行場跡(無頁)

書名	伊江島具志原貝塚
シリーズ	伊江村文化財調査報告書第4集
著者名	友寄英一郎・高宮廣衛・国分直一・安里嗣淳
発行者名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1978年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村
事項	記載頁
名 称 (遺跡名称)	ゴヘズ洞穴遺跡(無頁 1.5、p.97 1.16、p.98 図、p.99 1.2)、カダ原洞穴遺跡(p.3 1.5、p.97 1.19、p.98 図、p.99 1.4)、アーニーバイル記念碑(p.14 図)、ニヤーフガ洞穴遺跡(98 図、p.101 1.15)、伊江島飛行場(p.98 図)
関連記述 (説明・内容)	伊江島ゴヘズ洞穴遺跡(p.97 1.16)、カダ原洞穴(p.99 1.4)、ニヤーフガ洞穴遺跡(p.101 1.15)
位置国	アーニーバイル記念碑(p.14 図)、伊江島カダ原洞穴遺跡(p.98)、ゴヘズ洞穴(p.98)、伊江島飛行場(p.98)
戰(前・中・後)	p.97 1.19

書名	伊江島ナガラ原西貝塚
副題	緊急発掘調査報告書
シリーズ	伊江村文化財調査報告書第8集
著者名	名嘉真武夫・安里嗣淳・長谷川善和・上野輝弥・服部仁・野莉家宏・松浦秀治・小野慶一・山口敏
発行者名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1979年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村字川平ナガラ原
事項	記載頁
名 称 (遺跡名称)	ゴヘズ洞穴遺跡(無頁 1.14、p.5 図、p.180 1.33、p.182 1.1、p.183 1.13、p.234 1.20)、ニヤーフガ洞遺跡(p.5 図)、イヌガ洞遺跡(p.5 図)、カダ原洞穴遺跡(p.5 図)、洞窟(p.275 1.4)、伊江島飛行場(p.5 図)
位 置 国	ニヤーフガ洞遺跡(p.5)、ゴヘズ洞穴遺跡(p.5)、イヌガ洞遺跡(p.5)、カダ原洞穴遺跡(p.5)、伊江島飛行場(p.5)
遺構 写 真	伊江島飛行場(p.5)

書名	浜崎貝塚
シリーズ	伊江村文化財調査報告書第9集
著者名	金武正紀・大城慧・大城秀子
発行者名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1980年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	ゴヘズ洞穴(p.6 図, p.7 1.6), カダ原洞穴(p.6 図, p.7 1.6), 八重山西表島大富第一洞穴遺跡(p.22 1.26), 伊江島飛行場(p.6 図)
位置	ゴヘズ洞穴(p.6), カダ原洞穴(p.6), 伊江島飛行場(p.6)

書名	伊江島阿良貝塚発掘調査概報
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第42集
著者名	安里嗣淳・花城潤子・大城秀子
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1982年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	カダ原洞穴 [p.1(1.6, 1.11), p.2 図], ゴヘズ洞穴(p.1 1.11, p.2 図), イヌガ洞遺跡(p.1 1.12, p.2 図), ニヤーフガ洞遺跡(p.1 1.12, p.2 図), 伊江島飛行場(p.2 図)
関連記述 (説明・内容)	カダ原洞穴(p.1 1.6)
位置	ニヤーフガ洞遺跡(p.2), ゴヘズ洞穴遺跡(p.2), イヌガ洞穴遺跡(p.2), 伊江島カダ原洞穴遺跡(p.2), 伊江島飛行場(p.2)
戦(前・中・後)	p.1(1.6, 1.9)

書名	伊江島阿良貝塚
副題	発掘調査報告
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第48集
著者名	安里嗣淳・大城秀子・花城潤子
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1983年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	ニヤーフガ洞遺跡(p.6 図), ゴヘズ洞穴遺跡(p.6 図), イヌガ洞穴遺跡(p.6 図), 伊江島カダ原洞穴遺跡(p.6 図), 伊江島飛行場(p.6 図)
位置	ニヤーフガ洞遺跡(p.6), ゴヘズ洞穴遺跡(p.6), イヌガ洞穴遺跡(p.6), 伊江島カダ原洞穴遺跡(p.6), 伊江島飛行場(p.6)

書名	石器時代の伊江島
著者名	安里嗣淳
発行者名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1995年5月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	カダ原洞穴遺跡 [無頁 1.6, p.5 図, p.6(1.19, 1.30), p.21 1.3], 伊江島ゴヘズ洞穴遺跡 [無頁 1.6, p.1, p.5 図, p.6 1.30, p.7 1.2, p.22 1.1], 山下町の洞穴 [p.6 1.29, p.7], 洞穴 [p.22(1.4, 1.5, 1.9)]. 伊江島飛行場(p.5 図, p.22 図)
関連記述 (説明・内容)	カダ原洞穴遺跡(p.6 1.19), ゴヘズ洞穴(p.7 1.2)

位 置 図	ゴヘズ洞穴遺跡(p.5, p.22), カダ原洞穴遺跡(p.5, p.21), 伊江島飛行場(p.5, p.22)
戦(前・中・後)	p.6(1.10, 1.11, 1.18 1.29), p.21 1.6

書 名	伊江島具志原貝塚発掘調査報告
シ リ ー ズ	沖縄県文化財調査報告書第130集
著 者 名	岸本義彦・比嘉優子・當銘由嗣・松井章・当山昌直・黒住耐二
発 行 者 名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1997年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村字川平具志原
事 項	記 載 頁
名 称 (遺跡名称)	洞穴(p.17 1.12), カダ原洞穴遺跡(p.17 1.14, p.18 図), ゴヘズ洞穴遺跡 [p.18 図, p.192(1.9, 1.10)], 港川洞穴(p.162 1.2, p.163 1.2), 伊江島飛行場(p.18 8 図)
関連記述 (説明・内容)	カダ原洞穴(p.17 1.14)
位 置 図	ゴヘズ洞穴遺跡(p.18), カダ原洞穴遺跡(p.18), 伊江島飛行場(p.18)
戦(前・中・後)	p.19 1.11

書 名	伊江島の遺跡
副 題	遺跡詳細分布調査報告
シ リ ー ズ	伊江村文化財調査報告書第13集
著 者 名	岸本義彦・西銘章・林徹・當眞嗣一・土肥直美・木下尚子・田畠幸嗣
発 行 者 名	伊江村教育委員会
刊行年月日	1999年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	伊江村
事 項	記 載 頁
名 称 (遺跡名称)	ゴヘズ洞穴遺跡 [(無頁 1.22, p.2 表, p.3 1.6, p.7 1.3, p.10(1.17, 1.18, 1.21), p.12 1.31, p.13(1.16, 1.18), p.17 1.20, p.21 表, p.23 図, p.101 図, p.159 1.27, p.160 1.25, p.169(1.9, 1.19), カダ原洞穴遺跡 [(p.2 表, p.3 1.6, p.7 1.2, p.9(1.11, 1.22), p.10(1.4, 1.23), p.12 1.6, p.21 表, p.23 図, p.25, p.42, p.91 図, p.159(1.11, 1.22 1.23), p.160 1.25, ニヤーフガ洞遺跡(p.2 表, p.22 表, p.23 図, p.79, p.109 図), 公益賃屋跡(p.3 1.7), イヌガ洞穴(p.7 1.3, p.21, p.23 図, p.26, p.93 図), 山下町第一洞穴(p.9 1.28), 半洞窟遺跡(p.14 1.11), ジュリガマ(遊女の洞)(p.15 1.22), 避難壕(p.17 1.26, p.19 1.23, p.113 1.19), 小洞穴(p.19 1.21), ノロ洞(祝女洞)(p.19 1.21), 洞穴遺跡(p.21 表), 陣地壕(p.165 1.31), 伊江島飛行場(p.23, p.101 図, p.109 図, p.167 図)]
関連記述 (説明・内容)	カダ原洞穴(p.7 1.2, p.12 1.6, p.25), ゴヘズ洞穴(p.7 1.3), イヌガ洞穴(p.7 1.3, p.26), ニヤーフガ洞遺跡(p.79), 陣地壕(p.165 1.31)
位 置 図	カダ原洞穴遺跡(p.23, p.91) イヌガ洞穴遺跡(p.23, p.93), ゴヘズ洞穴遺跡(p.23, p.101), ニヤーフガ洞遺跡(p.23, p.109), 伊江島飛行場(p.23, p.101, p.109, p.167)
遺 構	カダ原洞穴遺跡(p.25), イヌガ洞穴遺跡(p.26), ゴヘズ洞穴遺跡(p.42), ニヤーフガ洞遺跡(p.79), 伊江島飛行場(p.100, p.108)
写 真	
戦(前・中・後)	p.7 1.2, p.10 1.2, p.17 1.26, p.19 1.23, p.113 1.19, p.159 1.22, p.165(1.29, 1.30, 1.32)

書名	具志原貝塚及び周辺整備基本構想	
副題	『古代の島人と貝の道ミュージアム』—古代島人の元気で豊かな生活と「貝交易のシマ」の再現—	
発行者名	伊江村教育委員会	
刊行年月日	2001年3月	
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧		
市町村・大字小字名	伊江村	
事項	記載頁	
名 称 (遺跡名称)	<p>アーニーバイルの碑(p.2 図, p.11 図, p.31 1.3, p.32 表, p.34 1.21, p.35 図, p.66 1.10), カダ原洞穴(p.3 1.2, p.6 表, p.10 表, p.11 図, p.35 図, p.64 1.1, p.74 1.3), ゴヘズ洞穴(p.3 1.3, p.6 表, p.10 表, p.11 図, p.30 表, p.35 図, p.63 1.1, p.74 1.4), イヌガ洞穴(p.3 1.3, p.10 表, p.11 図), ニャーフガ洞遺跡(p.6 表, p.10 表, p.11 図, p.60 1.1), 洞穴遺跡(p.10 表, p.63 1.3, p.64 1.3), 洞穴(p.10 表, p.60 1.2, p.63 1.10, p.64 1.14, p.71 1.4), 公益質屋跡(p.30 表, p.31 1.2, p.32 表, p.34 1.21, p.35 図, p.66 1.1), ニイヤティヤガマ(p.31 1.3, p.32 表, p.35 図, p.71 1.1), 芳魂之塔(p.31 1.3, p.32 表, p.34 1.21, p.67 1.1), 避難壕(p.31 1.3, p.33 1.7, p.34 1.21), 慰霊碑(p.31 1.4, p.33 1.7, p.67 1.2, LCT慰霊碑(p.32表), 団結道場(p.32 表, p.67 1.1), 第502特設警備工兵隊出撃地(p.32 表), 伊江島飛行場(p.32 表, p.67 1.1, p.2 図), アハシャガマ(p.32 表), 伊江島灯台(p.32 表), 海蝕洞(p.60 1.5, p.64 1.6), 鐘乳洞遺跡(p.63 1.6), 防空壕(p.71 1.5), 千人洞(p.71 1.5), 飛行場用地(p.74 1.3)</p>	
関連記述 (説明・内容)	<p>ゴヘズ洞穴遺跡(p.30 表, p.63), 公益質屋跡(p.30 表, p.31 1.2, p.32 表, p.66), ニヤティヤガマ(p.31 1.3, p.32 表, p.71), 芳魂の塔(p.31 1.3, p.32 表, p.67), アーニーバイル記念碑(p.31 1.3, p.32 表, p.66), 避難壕(p.31 1.3), 慰霊碑(p.31 1.4), LCT慰霊碑(p.32 表), 団結道場(p.32 表, p.67, 第502特設警備工兵隊出撃之地(p.32 表), 伊江島飛行場跡(p.32 表, p.67), アハシャガマ(p.32 表), 伊江島灯台(p.32 表), ニャーフガ洞遺跡(p.60), カダ原洞穴遺跡(p.64)</p>	
位 置 図	<p>アーニーバイル記念碑(p.2, p.11, p.32, p.66), イヌガ洞穴遺跡(p.11), カダ原洞穴遺跡(p.11, p.64), ゴヘズ洞穴遺跡(p.11, p.63), ニャーフガ洞遺跡(p.11, p.60), 公益質屋跡(p.32, p.66), LCT慰霊碑(p.32), 団結道場(p.32, p.67), アハシャガマ(p.32), 第502特設警備工兵隊出撃之地(p.32), 伊江島飛行場跡(p.32, p.67, p.2 図, p.11 図, p.32 図, p.35 図), 芳魂之塔(p.32, p.67), 伊江島灯台(p.32), ニヤティヤガマ(p.32, p.71)</p>	
遺構 写真	<p>公益質屋跡(p.31, p.66), 芳魂の塔(p.31, p.67), ニャーフガ洞遺跡(p.60), ゴヘズ洞穴遺跡(p.63), カダ原洞穴遺跡(p.64), アーニーバイル記念碑(p.66), 団結道場(p.67), 伊江島飛行場跡(p.67, p.1), ニヤティヤガマ(p.71)</p>	
戦(前・中・後)	<p>p.3(1.22, 1.23, 1.27), p.5, p.25 1.15, p.30 1.3, p.31(1.1, 1.2, 1.7), p.32 表, p.33, p.34(1.20, 1.22), p.35 図, p.64(1.2, 1.4), p.66 1.11, p.67(1.2, 1.3), p.71(1.2, 1.5), p.72(1.4, 1.10), p.73(1.3, 1.11), p.74 1.3</p>	

5. 大宜味村

書名	喜如嘉貝塚
副題	発掘調査報告書
シリーズ	大宜味村文化財調査報告書第1集
著者名	宮城長信・岸本義彦・宮城利旭・山田正・大城秀子・安里嗣淳
発行者名	大宜味村教育委員会
刊行年月日	1979年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	大宜味村字喜如嘉
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	埋葬場所 (p.28 1.5)
関連記述 (説明・内容)	埋葬場所 (p.28 1.5)

書名	喜如嘉貝塚
副題	国道58号改修工事に係る緊急発掘調査
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第114集
著者名	豊見山裕・島袋春美
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1994年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	大宜味村字喜如嘉
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.4 1.14

書名	大宜味村の猪垣
副題	猪垣調査報告書
シリーズ	大宜味村文化財調査報告書第3集
著者名	宮城長信・山城均
発行者名	大宜味村教育委員会
刊行年月日	1994年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	大宜味村
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.3 1.18, p.6 1.29, p.44 1.17, p.45 1.20

6. 今帰仁村

書名	今帰仁の文化財
副題	特集 今帰仁城跡
シリーズ	今帰仁の文化財第1集
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1979年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	今帰仁村
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	慰靈塔 (p.24 1.2)
関連記述 (説明・内容)	慰靈塔 (p.24 1.2)
戦(前・中・後)	p.26 1.4

書名	国指定史跡保存管理計画書 今帰仁城跡
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1979年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	今帰仁村字今泊
事項	記載頁
戦（前・中・後）	無頁 1.11, p.3 (1.14, 1.22, 1.24, 1.31), p.26 1.15, p.32(1.14, 1.22, 1.24), p.34 1.31, p.36(1.5, 1.34, 1.35, 1.37), p.37 1.36, p.47 1.7

書名	今帰仁の文化財
副題	今帰仁村の「イシガントー」天然記念物シマチスジノリヒ今帰仁村字天底の湧井戸「アミスガー」の水質
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第4集
著者名	仲原弘哲・香村真徳・大森保
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1981年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	今帰仁村、今帰仁村字天底
事項	記載頁
位置図	p.29
戦（前・中・後）	p.11 1.31, p.18 1.25

書名	今帰仁村の遺跡
副題	分布調査報告書
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第10集
著者名	今帰仁村教育委員会
発行年月日	1984年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	今帰仁村
事項	記載頁
戦（前・中・後）	p.45 1.5

書名	今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第12集
著者名	松川章・松田朝雄
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1986年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	今帰仁村字今泊
事項	記載頁
名称 (遺跡名称)	桃原飛行場 (p.3), 掩体壕 (p.17 1.29)
関連記述 (説明・内容)	掩体壕 (p.17 1.29)
位置図	桃原飛行場 (p.3)

書名	国指定史跡今帰仁城跡環境整備報告書Ⅰ【本文編】
著者名	山内昌治・玉城繁・宮城弘樹・金城亀信
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1999年12月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	今帰仁村字今泊
事項	記載頁
戦（前・中・後）	p.4 1.22, p.6, 附篇6 1.31, 附篇10, 附篇55 1.8

書名	長根原遺跡発掘調査報告書
副題	リフレッシュパークなきじん整備事業に伴う緊急発掘調査報告
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第15集
著者名	宮城弘樹
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	2002年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	今帰仁村字仲宗根垣畠原
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	防空壕 (p.2 1.10)
関連記述 (説明・内容)	防空壕 (p.2 1.10)
戦(前・中・後)	p.2 1.8

7. 本部町

書名	本部町の文化財
シリーズ	第5集 (第8集との合冊)
著者名	仲田善明・金城龍生・宮城信治
発行者名	本部町教育委員会
刊行年月日	1981年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	本部町
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	桃原飛行場 [p.14, p.40, p.45 (1.9, 1.43, 1.45), p.46 (1.1, 1.2, 1.14, 1.15, 1.16, 1.28, 1.31, 1.40), p.48 1.12, p.49 1.39], 慰靈の塔 (p.51 1.23, p.54 1.25), ガマ (p.56 1.6), 避難壕 (p.56 1.7), 防空壕 (p.65), 桃原飛行場 (p.68)
関連記述 (説明・内容)	桃原飛行場 [p.45 (1.43, 1.45), p.46 (1.1, 1.2, 1.14, 1.15, 1.16, 1.28, 1.31, 1.40), p.48 1.12, p.49 1.39], 慰靈の塔 (p.51 1.23, p.54 1.24), ガマ (p.56 1.6), 避難壕 (p.56 1.7), 防空壕 (p.65)
位置図	桃原飛行場 (p.14, p.40, p.47, p.68)
遺構図	防空壕 (p.65)
写真	桃原飛行場 (p.41)
戦(前・中・後)	p.3 (1.15, 1.21, 1.23), p.36 1.25, p.38 1.20, p.43 (1.7, 1.23), p.45 (1.9, 1.42), p.46 (1.4, 1.21, 1.27, 1.28, 1.30, 1.39), p.48 (1.29, 1.30), p.54 1.24, p.66 1.14

書名	本部町の文化財
副題	本部町の聖地
シリーズ	第8集 (第5集との合冊)
著者名	仲田善明・仲宗根裕正・渡久地健・並里康文
発行者名	本部町教育委員会
刊行年月日	1994年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	本部町
事項	記載頁
名稱 (遺跡名称)	桃原飛行場 (p.16), 慰靈塔 (p.24 1.11), 忠魂碑 (p.65 1.23), 慰靈塔 [p.91 1.12, 1.14], p.112 1.13]
関連記述 (説明・内容)	慰靈塔 (p.24 1.11), 忠魂碑 (p.65 1.23), 慰靈塔 (p.91 1.12)
位置図	桃原飛行場 (p.16)
遺構図	慰靈塔 (p.24), 忠魂碑 (p.65), 慰靈塔 (p.91, p.112)

戦（前・中・後）	p.4 (1.31, 1.38, 1.40), p.6 1.33, p.9(1.2, 1.8), p.21(1.8, 1.16), p.23 1.29, p.24 1.12, p.34 1.7, p.35(1.21, 1.22), p.36 1.22, p.44 1.8, p.51 1.20, p.57 1.9, p.60 1.26, p.61 1.33, p.65(1.18, 1.22), p.70 1.15, p.78 1.27, p.85 1.15, p.89 1.9, p.91(1.10, 1.11), p.93 1.14, p.99 1.27, p.100(1.25, 1.29), p.105 1.14, p.107 1.5, p.108(1.21, 1.30), p.112 1.12
----------	--

書名	備瀬貝塚
副題	下水道工事に伴う緊急発掘調査報告
シリーズ	本部町文化財調査報告書第4集
著者名	安里嗣淳・田中寿賀子・島袋春美・上地千賀子・岸本義彦・鳥弘
発行者名	本部町教育委員会
刊行年月日	1986年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	本部町字備瀬
事項	記 載 頁
位置	図 桃原飛行場（無頁）

書名	知場塚原遺跡
副題	発掘調査報告書
シリーズ	本部町文化財調査報告書第5集
著者名	岸本義彦・黒住耐二・金子浩昌
発行者名	本部町教育委員会
刊行年月日	1988年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	本部町字備瀬知場塚原
事項	記 載 頁
名 称 (遺跡名称)	桃原飛行場（p.5）
位置	桃原飛行場（p.5）

書名	本部町の遺跡
副題	詳細分布調査報告書
シリーズ	本部町文化財調査報告書第7集
著者名	豊見山頼
発行者名	本部町教育委員会
刊行年月日	1991年2月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	本部町
事項	記 載 頁
戦（前・中・後）	p.9 1.16

書名	本部町の文化財
副題	本部のシヌグ
シリーズ	第10集
発行者名	本部町教育委員会
刊行年月日	2001年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	本部町
事項	記 載 頁
戦（前・中・後）	p.5 1.12, p.9 1.3, p.19 1.20, p.30(1.13, 1.27), p.97 1.18, p.99 1.22, p.105 1.2

8. 名護市

書名	名護貝塚緊急発掘調査報告
シリーズ	名護市文化財調査報告—7
著者名	大城剛他
発行者名	名護市教育委員会
刊行年月日	1985年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	名護市名護大兼久原
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.7 1.6

書名	フガヤ遺跡 田井等遺跡 羽地間切番所跡遺跡 仲尾次上グシク遺跡
副題	県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書
シリーズ	名護市文化財調査報告8
著者名	島福善弘・松田博文
発行者名	名護市教育委員会
刊行年月日	1988年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	名護市
事項	記載頁
名 (遺跡名称)	防空壕 (p.20 1.3, p.29 1.26)
関連記述 (説明・内容)	防空壕 (p.20 1.3, p.29 1.26)
戦(前・中・後)	p.20 1.2

書名	宇茂佐古島遺跡
副題	宇茂佐第二地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書
シリーズ	名護市文化財調査報告10
著者名	島福善弘・比嘉久
発行者名	名護市教育委員会
刊行年月日	1992年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	名護市宇茂佐
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.12 (1.12, 1.13)

書名	辺野古の一里塚
副題	国道329号改良工事に伴う緊急発掘調査報告書
発行者名	名護市教育委員会
刊行年月日	1994年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	名護市辺野古
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.9 1.19, p.34 1.10, p.35 1.6

書名	部瀬名貝塚
副題	国道58号・部瀬名線道路線形改良事業に伴う緊急発掘調査報告書
シリーズ	名護市文化財調査報告14
著者名	仲宗根植・新城卓也
発行者名	名護市教育委員会
刊行年月日	2001年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	名護市字喜瀬部瀬名原
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.43 1.21

9. 恩納村

書名	仲泊遺跡発掘調査概報（1）
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第2集
著者名	安里嗣淳・金武正紀・當眞嗣一・高安克己
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1975年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	恩納村字仲泊比屋根原
事項	記載頁
名 称 (遺跡名称)	銃眼 (p.5 1.14), 千人ガマ (p.5 1.15)
戦(前・中・後)	p.5 1.14

書名	仲泊遺跡
副題	1975・1976年度発掘調査報告書
シリーズ	恩納村文化財調査報告書第1集
著者名	金武正紀・安里嗣淳・當眞嗣一
発行者名	恩納村教育委員会
刊行年月日	1977年3月
戦争及び戦争遺跡関連記述一覧	
市町村・大字小字名	恩納村字仲泊比屋根原
事項	記載頁
戦(前・中・後)	p.38 1.5

戦争及び戦争遺跡関連記述がない文献一覧

書名	具志川島遺跡群発掘調査概報
副題	岩立遺跡西区・具志川島遺跡群西地点・親畠貝塚
シリーズ	伊是名村文化財調査報告書第8集
発行者名	伊是名村教育委員会
刊行年月日	1991年3月
書名	國舞・伊江島ナガラ原西貝塚出土の土器
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第14集
著者名	安里嗣淳
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1978年3月
書名	国頭村の文化財
著者名	千木良芳範
発行者名	国頭村教育委員会
刊行年月日	1990年3月
書名	国頭村の遺跡
副題	詳細分布調査
シリーズ	国頭村文化財調査報告書第2集
著者名	宮城長信・安里嗣淳・岸本義彦・大城秀子
発行者名	国頭村教育委員会
刊行年月日	1987年3月
書名	宇佐浜遺跡
副題	発掘調査報告
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第93集
著者名	岸本義彦・知念勇・大城秀子・比嘉優子・城間千栄子・黒住耐二・金子浩昌
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1989年3月
書名	大宜味村喜如嘉貝塚発掘調査ニュース
著者名	宮城長信・岸本義彦
発行者名	大宜味村教育委員会
刊行年月日	1978年9月

書名	渡喜仁浜原貝塚調査報告書〔I〕
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第1集
著者名	大城逸朗・新田重清・與那覇朝則・呉屋義勝・池原喜美江・平良睦子・恩河尚・家田淳一・米田善治・比嘉春美・山田正・渡久地健・森巖・玉城勝男
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1977年3月
書名	史跡今帰仁城跡
副題	第1次発掘調査概報
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第5集
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1981年3月
書名	今帰仁城跡環境整備基本構想 今帰仁城跡環境整備第1次5ヶ年計画
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1981年9月
書名	史跡今帰仁城跡
副題	第2次発掘調査概報
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第6集
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1982年3月
書名	古宇利原遺跡発掘調査報告書
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第8集
著者名	上原靜・松田朝雄・島袋洋・伊波寿賀子・比嘉春美
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1983年3月
書名	今帰仁城跡発掘調査報告I
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第9集
著者名	金子浩昌・金武正紀・松田朝雄・宮里末廣
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1983年3月
書名	史跡今帰仁城跡
副題	俗称本丸発掘調査概報
シリーズ	今帰仁村文化財調査報告書第11集
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1985年3月
書名	国指定史跡今帰仁城跡環境整備報告書I【図面集】
著者名	山内昌治・玉城繁・宮城弘樹・金城亀信
発行者名	今帰仁村教育委員会
刊行年月日	1999年12月
書名	具志堅貝塚の概要
発行者名	本部町教育委員会
刊行年月日	1985年3月
書名	名護貝塚
副題	県道116号線側溝改修工事に伴なう緊急発掘調査報告
シリーズ	沖縄県文化財調査報告書第63集
著者名	比嘉良則・大城剛・松川章
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1985年3月
書名	溝原貝塚
副題	名護博物館収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ	名護市文化財調査報告9
著者名	島福善弘・松田博文・仲村美代子・久高京子・上原政昌
発行者名	名護市教育委員会
刊行年月日	1989年3月
書名	部瀬名貝塚
副題	ブセナリゾート開発に伴う緊急発掘調査報告
著者名	岸本利枝・比嘉久・渡口裕・仲村美代子・島袋尚美

発行者名	名護市教育委員会
刊行年月日	1996年3月
書名	仲泊遺跡
副題	1977年度発掘調査報告書 環境整備報告書
シリーズ	恩納村文化財調査報告書第3集
著者名	金武正紀・真栄城徳鏡
発行者名	恩納村教育委員会
刊行年月日	1978年3月
書名	寺川虹調査報告書
シリーズ	恩納村文化財調査報告書第2集
著者名	金武正紀・又吉真三
発行者名	恩納村教育委員会
刊行年月日	1978年3月
書名	恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース
著者名	金武正紀
発行者名	沖縄県教育委員会
刊行年月日	1978年3月

沖縄県立埋蔵文化財センターにおける図書記号設定

The Archive Classification Method
in Okinawa Prefectural Archaeological Center of Buried Cultural Property

仲間 留美
NAKAMA Rumi

ABSTRACT : The 'book mark' is a part of the 'request number' that indicates the location of book in a library. Each library determines their own classification method and establishes the request number consisting of the 'classification mark' and 'book mark'. The majority of the library in the Okinawa Prefectural Center of Buried Cultural Property to the category of 'archaeology' and 80% of them are the site reports. As for the 'classification mark' we have introduced the popular NDC (Nippon Decimal Classification) method; however, we have established an independent method for the 'book mark' in order to specialize the site reports. Our 'book mark' includes the regional classification, constituted of alphabets and Arabic numerals, since the regional aspects are quite important in archaeology. The regional classification consists of three sub-stages:(1)prefecture, (2)city and town for Okinawa and region for kagoshima and (3)remote island.

1. はじめに

「図書記号^①」とは、図書館内において個々の図書資料を識別し、排架されている位置を示すために付けられた「請求記号^②」を構成する記号の一部である。主題別に分類排架されている場合、請求記号は「分類記号^③」と「図書記号」によって構成される。沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、センター）における図書資料は、考古学に関する図書を中心とした蔵書構成であり、その排架状況は大まかな分類排架に留まっていた。利用や管理の便からも個々の図書に「請求記号」を付し、そのための「図書分類法」の設定が開所以来の課題となっていた。

分類方法の設定は、現在、沖縄県立図書館を中心に進められている図書館及び関連施設における情報ネットワーク化^④を考えると、多くの図書館に広く利用されているNDC（日本十進分類法^⑤）の採用が妥当である。しかし、公共図書館の蔵書構成と大きく異なるセンターでは、全体の約8割が発掘調査報告書であり、それらのすべてが同一の分類記号（210.0254）という状況となる。そこで、今後の情報ネットワークへの参加を見越しつつ、同一の分類記号を持つ「発掘調査報告書」を利用の便を考えて排架するためには、「分類記号」と共に「請求記号」を構成する「図書記号」の設定が効果的である。そこでセンターでは、地域別に記号化した独自の地域記号を「図書記号」とする「図書分類表」（表1～3）を作成した。ここでは、類似施設での図書、特に「発掘調査報告書」分類における参考資料としてその内容を紹介する。

2. 図書記号の設定

考古学では、文化的側面からの「地域」というものが重要視される。その点からも、利用者の便をはかるため、図書記号は「地域別」で分類を行なった。その構成は、アルファベットと数字の組み合せによる記号^⑥の設定となっている。第1次区分で都道府県別、沖縄県・鹿児島県においては検索及び管理の面を考慮し、さらに第2次区分から第3次区分までの細区分設定を行なった。

表1 図書分類表（都道府県別）

第一次区分(都道府県名)	
東北地方	北海道 Ho
	青森県 Ao
	岩手県 Iw
	宮城県 Miy
	秋田県 Ak
	山形県 Yama
	福島県 Huku
関東地方	茨城県 Ib
	栃木県 Toc
	群馬県 Gu
	埼玉県 Sai
	千葉県 Ch
	東京都 Tok
	神奈川県 Kan
北陸地方	新潟県 Ni
	富山県 Toy
	石川県 Is
	福井県 Huk
	山梨県 Yam
	長野県 Nag
	岐阜県 Gi
中部地方	静岡県 Shiz
	愛知県 Ai
	三重県 Mie
	滋賀県 Shi
	京都府 Ky
	大阪府 Ohs
	兵庫県 Hy
近畿地方	奈良県 Nar
	和歌山县 Wa
	鳥取県 Tot
	島根県 Sh
	岡山县 Oka
	広島県 Hi
	山口県 Ya
中国地方	徳島県 To
	香川県 Kag
	愛媛県 Eh
	高知県 Ko
	福岡県 Hu
	佐賀県 Sa
	長崎県 Na
九州地方	熊本県 Ku
	大分県 Oh
	宮崎県 Mi
	鹿児島県 Ka
	沖縄県 Ok

表2 図書分類表（沖縄県内）

第1次区分(県名)	第2次区分(地域)	第3次区分(島名)
沖縄県 Ok	北部	国頭村 Ok01
		大宜味村 Ok02
		東村 Ok03
		今帰仁村 Ok04
		本部町 Ok05
		名護市 Ok06
		恩納村 Ok07
		宜野座村 Ok08
		金武町 Ok09
		伊江村 Ok10
		伊平屋村 Ok11
		伊是名村 Ok12
沖縄県 Ok	中部	石川市 Ok13
		与那城町 Ok14
		勝連町 Ok15
		具志川市 Ok16
		沖縄市 Ok17
		読谷村 Ok18
		嘉手納町 Ok19
		北谷町 Ok20
		北中城村 Ok21
		中城村 Ok22
		宜野湾市 Ok23
		西原町 Ok24
沖縄県 Ok	南部	浦添市 Ok25
		那覇市 Ok26
		豊見城市 Ok27
		糸満市 Ok28
		東風平町 Ok29
		具志頭村 Ok30
		玉城村 Ok31
		知念村 Ok32
		佐敷町 Ok33
		与那原町 Ok34
		大里村 Ok35
		南風原町 Ok36
沖縄県 Ok	南部離島	久米島町 Ok37
		渡嘉敷村 Ok38
		座間味村 Ok39
		粟国村 Ok40
		渡名喜村 Ok41
		南大東村 Ok42
		北大東村 Ok43
		平良市 Ok44
		城辺町 Ok45
		下地町 Ok46
		上野村 Ok47
		伊良部町 Ok48
沖縄県 Ok	宮古	多良間村 Ok49
		石垣市 Ok50
		竹富島 Ok51
		西表島 Ok512
		小浜島 Ok513
		波照間島 Ok514
		帰間島 Ok515
		黒島 Ok516
		新城島 Ok517
		与那国町 Ok518

●都道府県別の設定（表1）

都道府県別の分類は、第1次区分のみで表1に示した。アルファベットの大文字と小文字の2文字構成を原則とし、センターでの利用頻度及び整理作業の面から、沖縄県から北上する順で設定を行なった。文字の設定方法は、都道府県名のアルファベット綴りから引用し、文字記号が重複する場合は、2文字以上の設定となっている。

●沖縄県内の細区分設定（表2）

分類表は表2に示した。先に述べたように、沖縄県内は第3次区分まで設定し地域内での細分化を行なった。

ア) 第1次区分（都道府県別）

沖縄県は都道府県別の設定により「O k」となる。沖縄県全体に関する事柄を扱ったもので、第2次区分以下に区分できないものを含むものとする。

イ) 第2次区分（市町村別）

県内を「北部・中部…」のような地域区分の区分をすると、資料数からみても粗い分類となるため、「市町村」別に細設定をしている。沖縄県の記号「O k」に、北部から順に「01・02…」の数字を組み合せた記号設定である。

例：O k 51…竹富町に関する事柄を扱ったもの。

ウ) 第3次区分（島別）

市町村でさらに島別に扱うものを設定した。現段階では竹富町のみの設定となっている。

例：O k 511…竹富町の中でも特に、竹富島に関する事柄を扱ったもの。

●鹿児島県内の細区分設定（表3）

分類表は表3に示した。文化的に沖縄との間わりが深い「薩南諸島」を含む鹿児島県においても、第3次区分までの地域別による細分化を行なった。

ア) 第1次区分（都道府県別）

鹿児島県は先述した都道府県別の設定により「K a」となる。鹿児島県全体に関する事柄を扱ったもので、第2次区分以下に区分できないものすべてを含むものとする。

イ) 第2次区分（地域別）

表3 図書分類表（鹿児島県内）

第1次区分(県名)	第2次区分(地域)	第3次区分(島名)	
鹿児島県 Ka	薩摩半島南部	Ka01	
	大隈半島	Ka02	
	姶良郡	Ka03	
	北部薩摩	Ka04	
	大隈諸島	Ka05	種子島 Ka051 屋久島 Ka052
	トカラ列島	Ka06	
薩南諸島			喜界島 Ka071
			奄美大島 Ka072
			加計呂麻島 Ka073
	奄美諸島	Ka07	徳之島 Ka074
			沖永良部島 Ka075 与論島 Ka076

表4 地域区分一覧（鹿児島県内）

地域区分	市町村名
薩摩半島南部	串木野市、市来町、東市来町、郡山町、日吉町、伊集院町、吹上町、松元町、金峰町、吉田町、鹿児島市、桜島町、笠沙町、大浦町、加世田市、川辺町、坊津町、枕崎市、知覧町、喜入町、浦村町、指宿市、開聞町、山川町
大隈半島	財部町、輝北町、大隅町、宋吉町、大崎町、有明町、松山町、志布志町、垂水市、鹿屋市、根占町、大根占町、吾平町、串良町、東串良町、佐多町、田代町、高山町、内之浦町
姶良郡	吉松町、栗野町、横川町、蒲生町、姶良町、溝辺町、加治木町、隼人町、牧園町、霧島町、国分市、福山町
北部薩摩	長島町、東町、阿久根市、野田町、高尾野町、出水市、大口市、菱刈町、川内市、東郷町、宮之城町、鶴田町、樋脇町、入来町、祁答院町、薩摩町

※ 里村、上郷村、鹿鳥村、下郷村、三島村、十島村は、薩南諸島に含む。

鹿児島県の場合の第2次区分では、センターにおける蔵書状況等から、沖縄県の設定とは異なる「地域別」の区分設定を行なった。鹿児島県の記号「K a」に鹿児島本土部の南部から順に「01・02…」の数字を組み合せたものである。なお、地域区分については、河口貞徳氏による区分（河口貞徳1998）を参照した。各市町村の地域区分は表4に示している。

例：K a 07…奄美諸島に関する事柄を扱ったもの。及び、第3次区分に設定されていない島を含む。

ウ) 第3次区分（島別）

薩南諸島に関しては、文化的に沖縄との関わりが深いことから島別による細分化を行なった。現段階では、大隅諸島及び奄美諸島のみの設定に留めている。

例：K a 071…奄美諸島の中でも特に、喜界島に関する事柄を扱ったもの。

3. おわりに

以上、センターにおける「図書記号」の設定方法について述べてきた。当初、これらは「発掘調査報告書」を個別化するために設定したものである。しかし、「地域区分」で設定したことにより、年報や紀要、図録といった他の分類での図書の個別化にも応用することが可能となった。現在は、これらを元に請求記号を示した背ラベルを付し、請求番号順に排架する作業を進めている。

これまでに述べてきたものは、沖縄県立埋蔵文化財センターにおける一つの例であり、類似施設での図書分類における参考となれば幸いである。

(なかま るみ：調査課嘱託員)

註

- 1) 同一の分類記号をもつ図書を書架への排列や検索のためにさらに個別化するための記号。受入順に番号を付す場合や、著者名のアルファベット順を用いて数字と組み合せる等いくつかの方法がある。各図書館でその方法は設定され、分類記号と組み合せることで個々の請求記号となる。
- 2) 図書館内において、図書を識別しその排架されている場所を示す記号。図書の背に貼られる図書ラベル（図1）は、請求記号を表示したもの。
- 3) 分類項目を簡潔に示した記号で、資料の主題を表し、その分類の体系や順序を示している。
- 4) 沖縄県では、県立図書館が中心となって「沖縄県図書館総合目録システム」の構築が進められている。平成13年度に2館分でスタートし平成15年度1月現在では、6館分のデータで稼動している。平成15年度には、図書館以外に県内の資料館・学校・大学図書館の機関の参加も可能となる。
- 5) 日本における標準的な図書分類法で、1995年には新訂9版が刊行されている。
- 6) アルファ・メリック記号ともいう。

参考・引用文献

- 河口貞徳 1998 「序章 南九州の風土」『鹿児島』日本の古代遺跡38、保育社
- 千賀正之 1997 「図書分類の実務とその基礎 NDC新訂9版対応改訂版データ作成と主題検索へのアプローチ」、
社団法人 日本国書館協会
- 豊田恭子はか著 2000 『専門図書館のマネジメント』図書館員選書22、社団法人 日本国書館協会
- 日本図書館協会用語委員会編 1996 『図書館用語集 改訂版』、社団法人 日本国書館協会
- 根本彰はか著、三多摩郷土資料研究会編 1999 『地域資料入門』図書館員選書14、社団法人 日本国書館協会

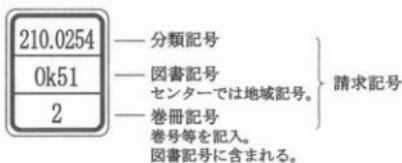


図1 図書ラベルの例
(竹富町の遭難、発掘調査報告書第2巻の場合)

鷹島海底遺跡体験記

Report of the Experience in Takashima Underwater Site

片桐 千亜紀・中山 晋
KATAGIRI Chiaki・NAKAYAMA Shin

ABSTRACT: The text describes about our participation in the investigation of Takashima underwater site from September 11 to 14, 2002. The Takashima site is located in Takashima-cho, Nagasaki prefecture, and is known to have been related to the Mongolian invasions in the 13th centuy. We actually dived to observe the underwater investigation methods that were quite different from the dry-site excavation. In the course of three dives, we learned the entire process of the underwater excavation and the various methods. Although it was merely a three- days experience, we could acquire a number of knowledge about the unknown world of archaeology. We hope to share our splendid experience and to raise the reader's in the underwater archeology.

【鷹島海底遺跡の概要】

鷹島海底遺跡の在する鷹島町は長崎県の北西部に位置する離島である。鷹島は元寇の舞台ともなった島で、南岸に広がる伊万里湾は「元寇・弘安の役（1281年）」の際に暴風雨によって大部分の軍船が破壊的打撃を受けた海域とされている。島の南岸一帯は元寇関係遺物を包蔵する海底遺跡として、1981年には150万m²が周知の遺跡として指定された。

東アジア中世史の重要な事件である元寇を解明する手掛かりとして、学術調査や緊急発掘調査が数次にわたって実施されており、2001年と2002年は九州沖縄水中考古学協会と鷹島町教育委員会の調査により過去にない成果を挙げている。

鷹島海底遺跡の詳細については鷹島町教育委員会から報告書が刊行されているので、参考文献として最後に紹介する。

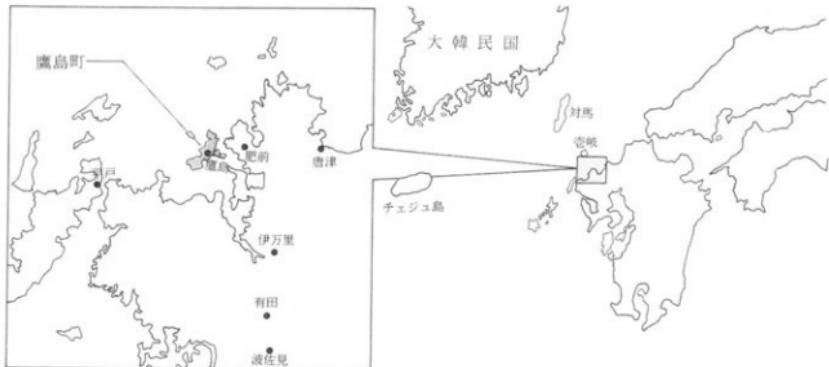


図1 鷹島町の位置

【出発】

9月11日（水）。鷹島町に行くルートはいくつかあるが、我々が採用したのは以下のルートである。

①空路（那覇空港→福岡空港、約1時間40分）

福岡へ行く飛行機はK・Nとも慣れていたので、熟睡。

②電車（福岡空港→唐津駅、約1時間50分）

二人とも電車の旅は久しぶりである。電車は福岡県から佐賀県へ横断し、車窓からは竹林や山々とともに風光明媚な田舎の風景が見える。沖縄育ちのNは「いいね～」「じつにいいね～」とずっと連呼していた。

③バス（唐津駅→星賀、約1時間）

バスに乗ってとても驚いたことがある。なんと、ブザーをならせば自宅前がバス停になるのである。Nが沖縄に帰ったあと本土出身の知人に話すと「そんなの普通」と言われたが・・・。

④船（星賀港→日比港、約15分）

鷹島に渡る船は接続が悪く、1時間以上小さな港で待ち続けた。二人でボートと体育すわりをしながら、並んだ船と透き通る海中の魚を眺めて過ごした。腹が減ってはなんとやらと、船の切符売り場兼食堂のチャンポンに舌鼓を打ちつつ、期待を膨らませた。

いよいよ出港。目指す島が目前となったとき、Kの隣ではTシャツだったはずのNがYシャツ姿になっていた。気合いを入れ始めた。約15分波に揺られ、目的の鷹島に到着した。

鷹島町教育委員会の松尾昭子氏に面識がなく、おどおどしている二人にテンションの高い女性が近づいてきた。松尾氏は我々の緊張をほぐそうと、色々話をしながら現場まで案内してくれた。そこには、まるで我々の知る発掘現場とは思えない空気が漂っていた。

【調査見学初日】

9月12日（木）。いよいよ水中調査の見学である。重たい器材を背負い、調査員の小川光彦氏から潜水中の現場での注意等を聞いている間、二人の柔な心臓はバクバクと轟音をたてていた。



写真2 現場事務所遠景 (神崎港)



写真1 星賀港にて船を待つ (N)



写真3 事務所内の通信設備

潜水開始・・・。始めはダイビングに慣れているKからである。一番始めに感じたことは「透明度が悪く、周囲が全然見えない。」ことである。青く透き通った沖縄の海しか潜ったことのない我々は、2・3m先ぐらいしか見えない海は恐怖であった。遺物が検出されている現場まで泳いで行く間、調査員の小川氏から絶対離れないよう必死について行った。やがて、グリットの境界を示すロープが縦横に張られた場所に到着し、現在作業中の現場に至った。水深は13mぐらいである。どこにどのような遺物が検出されているかまるでわからないため、決して足を水底に付けずに注意して泳いだ。途中、縦横に張られたロープがタンクに絡まり「ドキッ」としたこともあった。恐怖でいっぱいである。

小川氏に遺物の場所を教えていただき、観察することができた。注意深く薄暗い水底を観察すると、船の残骸と思われる巨大な木材や、陶磁器、剣、鎧があたり一面に散乱しているのがほんやりと見えた。完形に近い形で残っている遺物が多量にある。なんという保存状態の良さ。この海で、本当にモンゴル軍は沈んだのだという思いがどんどんこみあがってきて、とても感傷的になっている

自分に気づいた。遺跡を目の当たりにし、呼吸が速くなる。スキューバダイビングにおいて、呼吸が乱れるのは良くないが、まるで落ち着くことができなかつた。楽しい時間はあつという間にすぎ、約30分程で潜水は終了し浮上した。緊張と興奮、感動が交互にやってきて、くたくたであった。

その後、Nも小川氏にエスコートされ調査現場へ。透明度についてはKと同じ印象を受けたが、ダイビング歴8本という貧相な経験のため無意識に足が海底につき、砂がまいあがって目の前的小川氏が見えなくなってしまった恐怖は今でも忘れられない。潜水の前に小川氏が「周りが見えなくなった時はその



写真4 小川光彦氏から説明を受ける（N）



写真5 潜水準備（左がK）



写真6 青磁盤検出状況



写真7 兜検出状況

場を動かないでじっとしてて」と言わされたことを何度も自分に言い聞かせ透明度が良くなるのをじっと待っていた。小川氏が見えた時の安堵感といったら、涙がでるほどであった。

【調査見学 2 日目】

9月13日（金）。2日目もKからである。Kは実測の補助をすることになった。沖縄でも水中発掘調査を実践していきたいと思っているが、水中での発掘調査は未知の分野でいったいどのように調査を実施しているのか、その一部でも体験することが今回の目的であったため、よろこんでお手伝いをさせて頂いた。実測方法は？ 使用する道具は？ レベルの計り方は？ 等々疑問がたくさんあった。

現場に到着し、目に入ったのは検出された遺物群の上に設置された2m四方の実測機（50cm単位のメッシュがくまれたもの）である。陸上のように水平に設置され、動かないように水底深く四隅に棒が打ち込まれているようだ。水底は砂地であるため、よほど深く打ち込まなければ簡単に動いてしまうであろうが、我々が実測機金属部の辺に乗ってもピクともしなかった。しっかりとしている。さて、気になる実測道具は・・・

?マイラーである。さらに鉛筆・コンベも陸上と同様である。とたんに私は水中発掘調査に対する親近感が湧いてきた。実測したい位置にピンボールを立て、メッシュからの距離をコンベで計測するのだ。レベリングについてはさすがに光波等は使用できないため、実測機の四隅の棒にあらかじめ計測した絶対標高をマークしておき、その標高をもとに水糸とスタッフを使って遺物のレベルを計る。ということは水中での調査も陸上の発掘と変わらない、同様の技術水準をたもっている。もつとも実感したことは、やはり陸上と異なり呼吸・時間・バランス・思考等様々な制約の中で行う水

中実測は、想像以上にストレスがたまる。この調査を実際、我々調査員が実施するには相当な潜水技術が必要であると感じた。しかし、実際に調査している人達がいる以上、なんとかなるのかな。

この日は2本実測の補助をさせていただいた。少しずつ現場に慣れてきて、感じるだけでなく、自分の頭でいろいろ考える余裕ができた。今の私は自分の位置もわからず、方向感覚すらないことに始めて気づいた。周囲を見渡すと・・・、あいかわらず視界が悪い。実測をしている調査員すらよく見えないので。海底の遺物と、私の位置より高く縦横に張られたロープが見える他は何も見えない。実測をしているこの場所から離れたらどうやって陸間に帰ろうか、などと考えていた。どこかで、潜水士が使っているサンド・ポンプ・リフト（サンド・ポンプのスクリューの回転力により水流をつくり、海底の土砂を周囲の海水ごと吸引する水中掘削機）のゴーという音がする。遺物を検出していけるのだろうが、水中では音の伝導が良すぎてどこでやっているのかわからない。



写真8 レベリングの補助 (K)



写真9 実測の様子 (小川光彦氏)

エアーが十分に残っている間は実測を統け、2本目が終えようとしていた。4日目の最終日は飛行機に乗るので潜水を行うことはできない。2日間で計3本の潜水であった。学生時代から水中考古学に興味をもち水中発掘調査の体験を望み、ようやく実現したものが終わろうとしていた。得たものは大きく、知りたいことがまだまだたくさんあったが、限られた時間ではこれが限界であろう。いつか必ず沖縄でも水中遺跡を見発見してやる、と思いながら最後の浮上をしたのをよく憶えている。

NはKが1本目を終えた後、またしても小川氏にくつづいて遺跡の案内をしてもらった。完全にお客様扱いで申し訳ない思いをしながら、今後沖縄で水中考古学を実践するにあたって、技術的な課題が多くすぎることを痛烈に感じた。Kが2本目の実測補助をしている間も、調査地点の海面に無数の気泡が浮いてくるのを見ながら色々と頭の中で整理していた。煮詰まったところでまずはシヌーケリングから、と調査の邪魔にならないところで浮き沈みしていた。それを見ていて不憫に思ったのか、九州・沖縄水中考古学協会の会長である林田憲三氏から「一緒にどうですか?」と誘われ、仲良く手をつないで現場をまわった。サンド・ポンプ・リフトを持った潜水士が目の前を通り過ぎていく時は、吸い込まれたらどうしよう~、などと考えてしまいかなり緊張した。



写真10 船での移動



写真11 鷹島埋蔵文化財センター内の保存処理施設（含浸タンク）

【最後の夜～沖縄】

最終日は鷹島町名物（？）モンゴル村なるところに泊まった。モンゴルから輸入した本物のゲルに泊まれるのである。鷹島町は元寇により2度も島内を蹂躪された苦痛の歴史をもつにもかかわらず、現在はモンゴル国ホジルト市と姉妹都市として、友好を結んでいるのである。時が全てを洗い流して



写真12 モンゴル村のゲル群



写真13 鷹島町最後の朝、ゲルの中 (N)

くれたのであろうか。

夕方はモンゴル村内にある温泉にはいった。露天風呂から見える眺めは抜群で、海が一望に見渡せた。この海からモンゴル軍が迫ってきたのだろうかなどと思いをはせながらゆったりとした時間は過ぎていった。夕食はモンゴル村の焼き肉屋でお別れ会をしていただいた。2時間後、酔っ払い二人がウロウロしていたらしい。翌日二人はさまざまな思いを胸に沖縄へと発った。

【おわりに】

周囲が海に面した沖縄は、先史時代から現代に至るまで海と関係の深い歴史を歩んできた。当然周辺海底には先史遺跡から沈没船のような遺跡が埋蔵されている可能性が高い。事実、海岸やリーフ内では遺物等がしばしば表面採集され、報告されている例もある（知名1979年）。水中考古学は、沖縄の歴史を多面的に理解する一つの方法として大きな可能性を秘めている。

今回、海底遺跡をどう考えていいのか、また実際水中の調査を実施していくにあたっての技術的な面などについて様々なことを学ぶ機会に恵まれた。この貴重な体験を活かして、沖縄での水中考古学をより発展させていくよう日々努力していきたい。

【謝 辞】

鷹島海底遺跡見学にあたり、私達を快く受け入れて下さった小田嘉和教育長、神田稔事務局長、松尾昭子氏、内田比加里氏をはじめとする鷹島町教育委員会のみなさん、九州・沖縄水中考古学協会の林田憲三会長、石原涉副会長、小川光彦氏、野上建紀氏、加藤隆也氏、横田浩氏、山本祐司氏、並びに、現場の潜水士のみなさん、今回の機会を与えて下さった安里嗣淳所長、盛本勲調査課長に深く感謝いたします。

(かたぎり ちあき：調査課 専門員)
(なかやま し ん： 同 上)

〈参考文献〉

- 知名定順1979年 「沖縄本島糸満市名城海岸リーフ採取の石器について」『花綵』沖縄国際大学考古学研究会O.B会
鷹島町教育委員会1992年 『鷹島海底遺跡－長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』
鷹島町教育委員会1993年 『鷹島海底遺跡Ⅱ－長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』
鷹島町教育委員会1996年 『鷹島海底遺跡Ⅲ－長崎県北松浦郡鷹島町神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書』
鷹島町教育委員会2001年 『鷹島海底遺跡Ⅳ－鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書①』
鷹島町教育委員会2001年 『鷹島海底遺跡Ⅴ－長崎県北松浦郡鷹島町神崎港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書②』
鷹島町教育委員会2002年 『鷹島海底遺跡VI－鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書③』
鷹島町教育委員会2002年 『鷹島海底遺跡VII－長崎県北松浦郡鷹島町神崎港改修工事に伴う発掘調査概報』

マリアナ諸島テニアン島マルボ遺跡採集資料

Archaeological Collections from the Marupo site in Tinian, Mariana Is.

安里 嗣淳

ASATO Shijun

ABSTRACT: I found some archaeological artifacts from the surface of the Marupo site in Tinian island, Mariana Is in 2002. The site is located in a small valley near the Marupo natural spring in the south east part of the island.

The artifact consist three tridacna shell adzes, one stone adze, three sling stones and several rim fragments of the pottery. The shell adzes are made of the edge part of the Tridacna shell. The stone adze is more likely to be a gauge, bearing a body thicker than the blade width. The sling-stones are made of limestone, and are of the oval type with two pointed ends. All the pottery shards are the Mariana plain-ware type.

はじめに

2002年6月上旬にマリアナ諸島のテニアン島を訪れる機会があった。その際にいくつかの遺跡を踏査したが、マルボ遺跡でちょうど椰子の苗を植えるために耕耘機で耕作した直後の畑があり、そこでいくつかの遺物を採集したので報告しておきたい。

この遺跡は2001年にも帰りの空港へ向かう途中に訪れたが、かんたんに一瞥しただけではほとんど観察できなかった。今回は耕作によって雑草が除去され、しかも耕土が露出していたことから、表面には無数の貝殻や土器片、石片などが散らばっているのが観察できた。これらのなかから石斧、シャコガイ製貝斧、投弾、土器口縁部サンプルを採集した。

マルボ遺跡はテニアン島の東南地域、空港の東側にある。島全体が比較的低平な石灰岩台地であるが、この一帯は東海岸に高いカロリナスの丘を望み、西側には空港のあるチューロの台地を控える小盆地である。この谷間の奥に島唯一の自然湧水があり、島の貴重な水源として戦前の日本統治時代から「マルボ井戸」と呼ばれて利用してきた。遺跡はそのすぐ下方の赤土平坦地に形成されている。一帯は作物や雑草が繁っていて全城を踏査することはできなかったが、耕作土の露出した畑地だけでも長さ百mほどはあった。マルボ水源を拠点にした集落遺跡とみられる。

採集遺物

1. 石斧

2001年の訪問時に採集したものである。図4の2、図版1の10。刃先部分のみが残り、斧身部のはとんどを欠落している。刃の幅が斧の基部よりもせまいわゆる狭刃形石斧である。断面形は楕円形で、その形を維持しながら刃部に向かって細くなる。刃縁は平面形がゆるい弧状をなし、側面觀はおむね相称形を呈する。刃の正面觀は刃縁が片側に傾く弧状をなして、相称形を呈しない。これは相称形の刃部の片面に、さらに研磨をかけたことによって刃縁の正面觀が直線でなく弧状になったものである。この研磨面だけが特に円滑になっていて、使用痕とみられる無数の条痕がタテ方向（刃に対して直交方向）に残されている。全体的に敲打と研磨によって均整がとれ、円滑な面をもつ斧に

仕上げられている。製作時の打割痕や剥離痕は残されず、側面に敲打調整痕がわずかに認められる。使用痕から判断して、ヨコ斧（斧刃が斧の柄に対して直交）形と考えられる。

2. シャコガイ製貝斧

2002年6月に採集したもので、シャコガイの腹縁部の肋を斜め方向に切り取って斧としたものである。図3・4の1、図版2。図3の2点は肋部に対して45度ほど斜めに切り取り、全体的の平面形は三角形でいわゆる撥形をなす。三角の頂部には多少の相違があり、図3の2は頭部がゆるやかな丸味を帯び、図3の1は丸く尖っている。図4の1は一見短冊形に見えるが頭部を欠いており、長三角形の可能性もある。全体的には二枚貝腹縁部利用の特徴から、すべて平たい。いずれも外表面側には貝の波状模様が残され、内表面には肋の凹凸面がそのまま残されている。すなわち、表裏ともほとんど自然面のままで、加工はほとんど施していない。したがって、側面観は二枚貝のもつ自然のカーブがそのまま利用されて内側に傾き、ヨコ斧形の手斧を形成している。

加工は頭部、側面、刃部に施されている。頭部は丸くつくる。図3の2の貝斧は片側の側面がいわゆる定角式で、平たい面をつくり表裏との境界に稜線をもつ。しかしもう一方の側面は貝の縁端部にあたることからすでに薄くなっていて、定角をなさない。図4の1は両側面とも縁がだいぶ薄くなり、定角を刃部付近にわずかに認められる程度である。刃部はすべて外表面側のみを加工した片刃である。刃縁は平面、正面とも直線形である。全体でも刃の幅が最大幅となっている。刃面における使用痕の観察は困難である。全体形が内側にカーブすること、外側にスロープをもつ片刃であることから判断して、ヨコ斧形の手斧と考えられる。

3. 投弾

サンゴ石灰岩またはサンゴ石を利用したものである。図5、図版3。図5の1・3は石灰岩、図5の2はサンゴ石である。全体としてアメリカンフットボールの形状をしているが、図5の1・2は断面が楕円形で平たい。図5の3は楕円形で丸い。いずれも先端が円錐形状に尖る。3個とも片方の先端が欠落しているが、これまでに知られている類例から本来は残存している反対側と同様に円錐形であったことは疑いない。

4. 土器

遺跡表面には無数の土器破片が散乱していたが、いくつかの口縁部片のみを採集した。図2、図版1の1～9。すべて小片であるため。全体器形は窺えない。器厚は全体的に13～20mmと厚いものが多く、6mm程度の薄手もある。胎土には粗い粒はあまり含まれないが、微砂粒や石英粒のようなものがみられる。しかし専門家による分析を経ていないので、まだ判明しない。器面は比較的よく撫で調整されていて、円滑である。口縁器形は次のような種類がある。

- ① 直口形 口縁からまっすぐ胴部に向かうものである。口唇部は平たくつくられるが、内外器面との境界は丸みを帯びている。
- ② 内湾形 内側に傾くもので、頸部から傾きながら口縁では上に向くものと、頸から口縁にかけて内側に傾き続けるものがある。
- ③ 肥厚形 口縁が逆三角形に大きく肥厚するもので、装飾的な面よりも把手としての機能をもつ肥厚とみられる。

文様は施されていない。口唇部に細い曲線がみられるものがあるが、意匠文かどうか判別できない。

従来の類例からすると、これらの土器群はマリアナ無文土器の属するものと考えるが、未だマリアナ考古学の専門家の分析を経ていないので、確定的ではない。

結び

マルボ遺跡はテニアン島で従来知られている先史遺跡のなかでは比較的内陸部の遺跡に属するが、それはおそらく島の唯一の水源マルボ湧水に依存したことによるものであろう。シャコガイ製貝斧、投弾の存在は他のマリアナ諸島の多くの遺跡に類似する。この遺跡の年代的、時期的位置づけについては私は所論を述べる力をもたない。

沖縄の南琉球先史文化との比較で検討すると、まず狭刃石斧が注目される。狭刃石斧は南琉球先史時代の特徴的な石斧のひとつである。厳密にはマルボ遺跡のそれは厚い楕円形で、南琉球は少し平たいという相違はあるが、胴部よりも刃の幅が狭いという特徴は共通する。これは北琉球にはあまり見られない現象で、南方系といわれている南琉球の石器文化の様相や文化圏を検討する上で貴重であり、今後東南アジアからオセアニアにかけての類例を集めて、どのようなことが見えてくるのか是非追跡していきたい石器文化のひとつである。

シャコガイ製貝斧は腹縁部利用型が突出するミクロネシアの貝斧文化の様相をよく表している。この型は同じく貝斧文化をその特徴のひとつとする南琉球においては一個も発見されていない。南琉球の貝斧文化がミクロネシアとは直接的関係を有しない証拠ともいえる。ただし、私は貝斧文化は東南アジア島嶼地域で発生し、その後東のミクロネシア・メラネシアへの道と、北の琉球への道とに分かれて広がっていったと考えているので、このマルボ遺跡の貝斧文化も、南琉球の貝斧文化とは、その源流を東南アジアに求めるという点においては共通する。

投弾もミクロネシア先史文化遺跡からよく出土しているが、沖縄では未だ明確な投弾は出土していない。このことも、貝斧の型の相違と同様に、彼我に直接的関連がないことの証拠になり得る。しかし、投弾は広く分布する石器文化であり、沖縄においても存在した可能性はあるので、注意はしていくべきであろう。

土器は文様がないことからマリアナ無文土器であろうとしたが、当該土器の観察に慣れていないので、いずれ専門家の分析を経て、それをもとに時期についても検討したい。

なお、マルボ遺跡で採集した資料は基本的にはテニアン市の文化財展示室に返還（寄贈）することしたい。ただ、当地の資料室は無人の「倉庫」のような施設であり、適切な保管と自由な利用があまり期待できない。同市と協議の上、場合によってはサイパンの北マリアナ国博物館に提出することになるかも知れない。

小文に紹介した資料の実測は上原園子・大城聖子、トレイスは外間瞳、写真撮影は光嶋香・宮崎典子の各氏があたり、レイアウトは比嘉優子があたった。記して感謝の意を表すものである。

（あさと　しじゅん：所長）

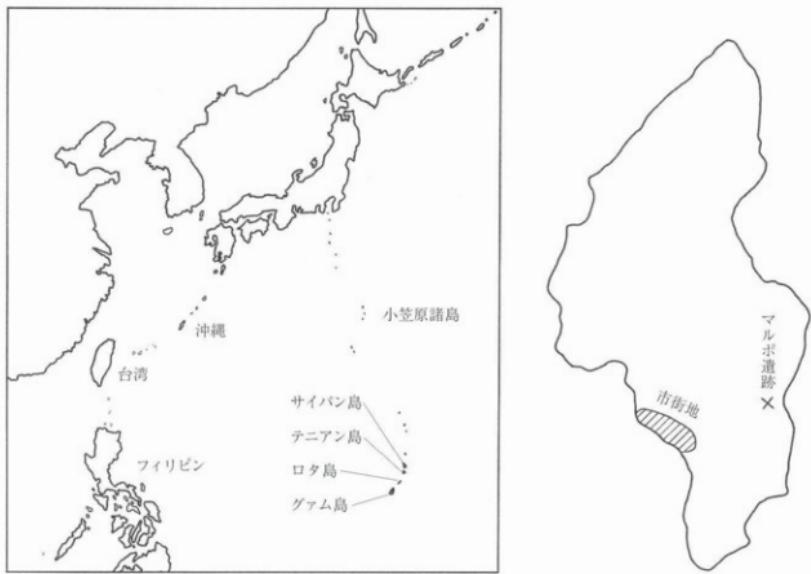


図1 テニアン島 マルボ遺跡の位置 Location of the Marupo Site.

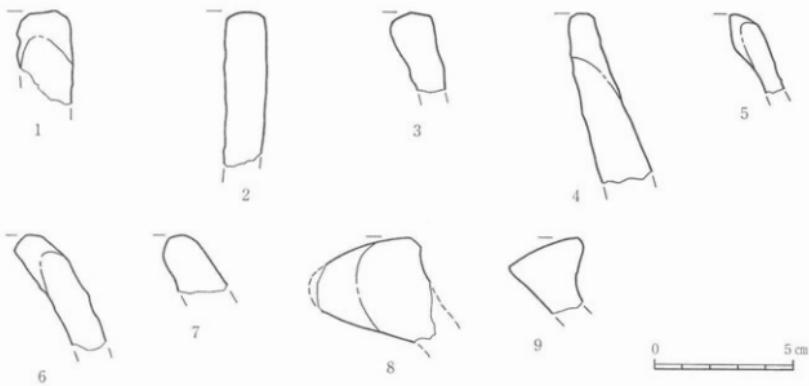
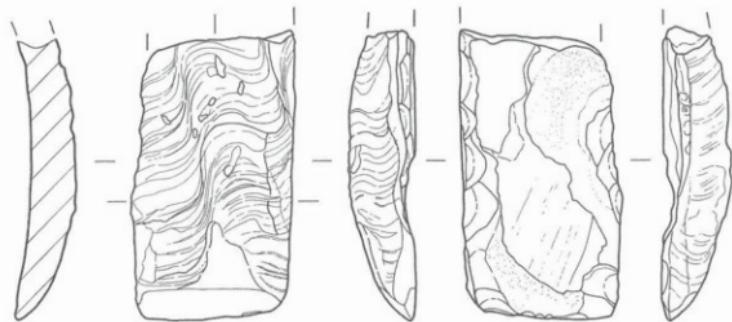


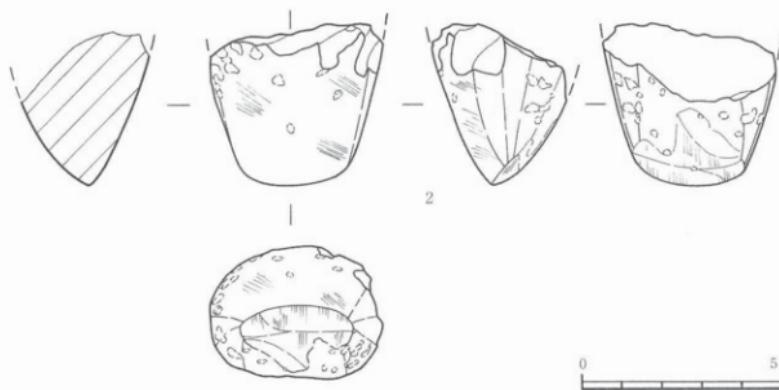
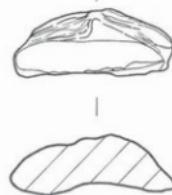
図2 土器口縁部片 Potteny shards



図3 シャコガイ製貝斧 Tridacna shell adzes



1



2

0 5 cm

図4 シャコガイ製貝斧・石斧 1:Tridacna shell adze 2:Stone adze

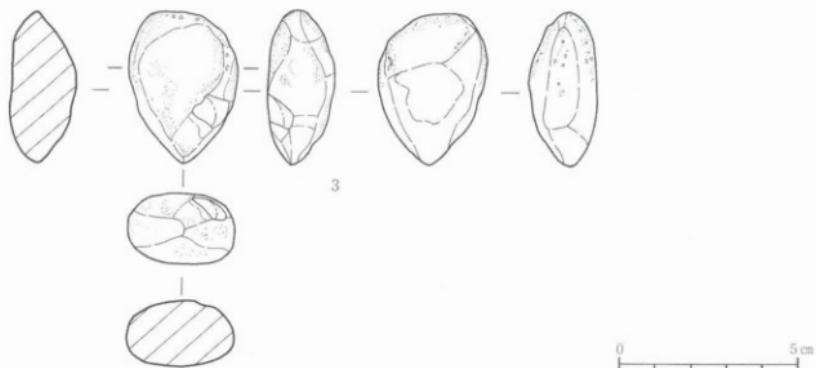
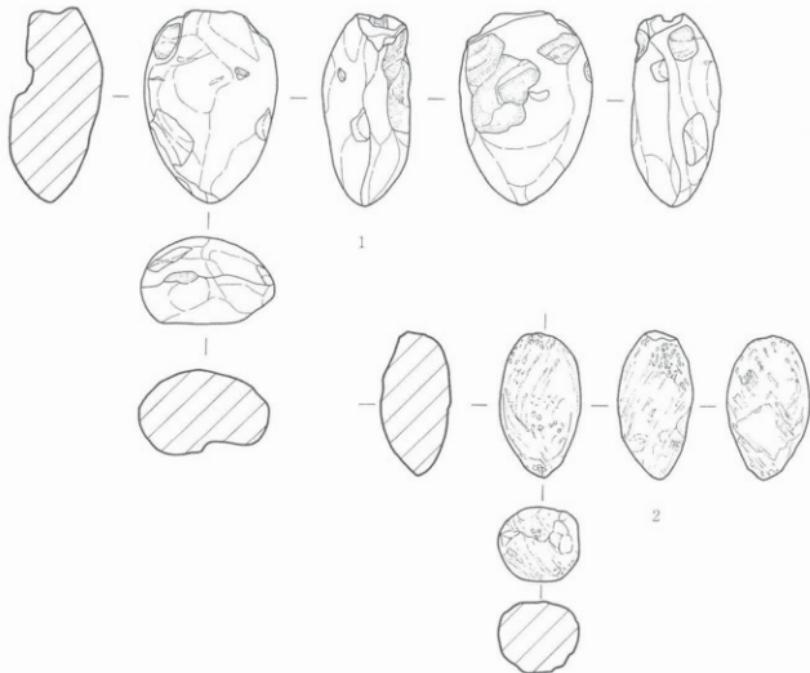
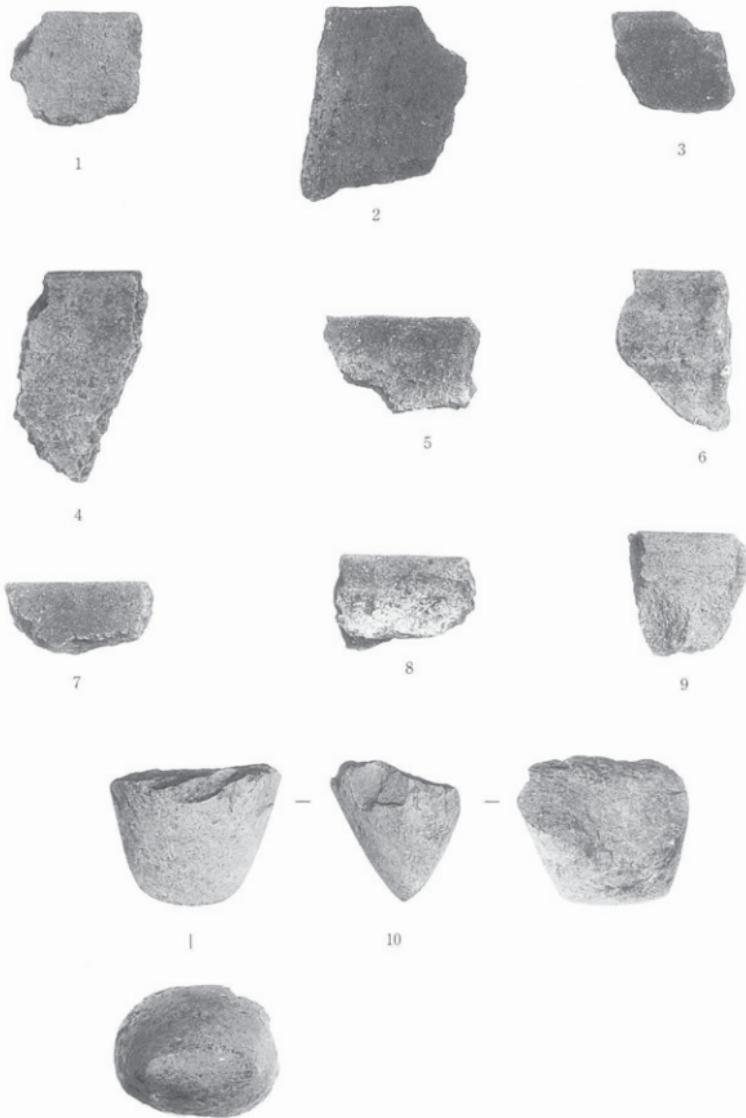


图 5 投弹 Slingstones



図版 1 土器口縁部片 Potteny shards (1~9)
石斧 Stone adze (10)



図版2 シャコガイ製貝斧 Tridacna shell adzes



1



1



1

2



1



3

图版3 投弹 Slingstones

琉球諸島考古学文献散歩（1）

Book Review on Ryukyu Archaeology (1)

安里 喬淳

ASATO Shijun

神田孝平 著 『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS OF JAPAN』

日本石器時代図譜』（著者蔵版）1884 の周辺

— 椅の原型石斧の発見と資料の動き —

1884（明治17）年に著者蔵版として出版されたこの本は、琉球関係の考古資料を最初に掲載した文献である。神田が収集した石器を種別に収録したもので、琉球諸島関係資料は薩摩国（現在の鹿児島県）大島発見の5点の石斧である。この石斧は後に「椅の原型石斧」と命名された丸ノミ型石斧や亀頭状石斧で、最近の調査成果で南九州を中心に関連した縄文時代草創期に属する石器文化であることがわかり、注目されている。

1. 報告された石斧

奄美発見の5点の石斧が掲載された、同書中の該当項目を示す。

Plate IV. Raifu or Thunder-bolts

Fig. 3. Point groove-shaped. A head at the upper end. Chlorite-schist.

Locality of discovery, Oshima in Satsuma.

Plate V. Raifu or Thunder-bolts

Fig. 5&6. Point chisel-shaped. A head at the upper Chlorite schist.

Locality of discovery, Oshima in Satsuma.

Fig. 7&8. Point groove-shaped. A head at the upper end. Talc-schist.

Locality of discovery, Oshima in Satsuma

このPlateのリストは左側ページにあり、右側には折り込み実測図が示されている。見開きで両方の情報がわかるようにとの配慮である。神田は1886年に図を省略した邦訳本を『日本古石器考』と題して出版した。その該当項目は次のとおりである。

第四版 第三圖、壺刃ニシテ上部ニ頭ヲ具セリ質ハ綠泥板石ナリ出所ハ薩州大島ナリ

第五版 第五圖、片刃ニシテ上部ニ頭ヲ具ス質ハ綠泥板石ナリ出所ハ薩州大島ナリ

第六圖、第五ニ同シ

第七圖、壺刃（ニ）シテ上部ニ頭ヲ具ス質ハ滑板石ナリ出所ハ第五ニ同シ

第八圖、第七ニ同シ

RaifuはThunder-boltsと英語表記されているように雷斧すなわち石斧のことで、江戸時代以来の呼称が明治前期にも使用されていることがわかる。神田はこの石斧の特徴をとらえて刃部を「壺刃」および「片刃」と記している。壺刃とは丸ノミ形のことである。「頭ヲ具セリ」とは石斧の頭部がふくらみをもっている形態を指している。この二つの特徴こそが「椅の原型石斧」の独特的な形態であり、すでに最初の文献で指摘されていることが興味深い。神田孝平がこの石斧を入手した経緯については不明である。また、神田が報告した奄美発見の石斧はこの5点であるが、別の文献に挿すると実際には

9点所蔵していたようである。また、発見地は奄美大島笠利町の赤木名であることも判明している。

2. 神田孝平の経歴

神田孝平は1830（天保元）年に美濃国（岐阜県）に生まれ、名を孟格といい通称を孝平（こうへい）といったが、1872（明治4）年以降は「たかひら」と称した。「淡崖」「唐通」などの号をもつ。漢学、のちに蘭学も学ぶ。33歳のとき江戸幕府の蕃書調所の数学出役となり、後に開成所教授並となる。明治新政府になると、いくつかの要職を経て1872（明治4）年に兵庫県令に任命される。本書の表紙に英文で「Ex-Governor of Hiogo」とあるのはこの職を指している。刊行時にはすでに他の職に移っているにもかかわらずこの職を記しているのは、現在でいう県知事職にあたるからであろう。1876年に地方官会議幹事長、翌1877年に元老院議官となる。同年に一時文部小輔に就き、1881（明治14）年に再び元老院議官となって元老院廃止まで務める。本書が刊行されたのは、この元老院議官の頃で、表紙には「Member of Genroin」と記されている。貴族院の開設に伴って勅撰の議員となるが、病気のため翌年辞退。1898（明治31）年7月5日逝去。男爵授与。

神田は多方面に業績を残した人である。『経済小学』『数学教本』『和蘭政典』などの著書があり、「経済」という用語を確定した人としても知られている。また、明治初期の知識人の集まりである「明六社」の活動に参加し、財政経済論などを『明六雑誌』に寄稿している。1880年に東京学士会院が設立されたことに伴い、委員に選任される。院の会長は幕末の長崎遊学時に知り合い「明六社」でも一緒に活動した福沢諭吉であった。

3. 神田孝平と考古学

(1) モースとのかかわり

1877（明治10）年の秋、東大に招聘されていたアメリカの動物学者モースが大森貝塚を発掘したのが、日本における近代的な考古学の開始となった。実はこのときの文部小輔はその年の2月に任せられたばかりの神田であった。神田はモースの発掘品を天皇に見せたいと考え、時の太政大臣三条実美に上申書を提出してこれを実現している。1879年に大森貝塚の報告書が英文で刊行された。また、モースの発掘に参加した佐々木忠次郎、飯島魁によって『陸平貝塚篇』が、そしてハインリヒ・シーボルトの英文『日本考古学』などが刊行された。神田は当然これらに接したわけで、本書を英文で著したものも当然のことであった。なお、神田の身内には英文化者もあり、あるいはその手助けもあったかとも考えられる。一方では神田は『和蘭政典』を著すほど外国语になじんでいる人もあるので、自身の英文かもしれない。多才な人物ではある。

(2) 東京人類学会とのかかわり

神田が本書を刊行した年の1884（明治17）年は、東大学生の坪井正五郎や白井光太郎らを中心となつて人類学会が発足した年でもある。その第三回の会合が開かれた後に、午後から9人の参加者が神田孝平宅を訪れ、蒐集品を見学している。当時、神田は官吏、知識人としてすでに有名な人であった。おそらくこのときに、奄美発見の丸ノミ石斧も披露したのであろう。1887年に神田は推されて東京人類学会会長となった。そして機関誌『東京人類学会雑誌』に39篇の論考を寄せている。

(3) 鳥居龍藏とのかかわり

1890年に徳島から上京した鳥居龍藏は、翌年のある日駿河台の神田孝平宅を訪ねている。そして、神田から学問上のさまざまな話を聞き、好印象をもつと同時に研究課題についても影響を受けたと述懐している。周知のように鳥居は沖縄考古学の開拓者として業績を残した人であるが、両者が東京で親交があつたことも興味深い。

(4) 奄美発見の石斧の入手経路

神田がどのような経緯で奄美発見の石斧を入手したかについては、未だに不明である。次にふれる本山彦一の図録に「赤木名」の名があり、私が現物を実見した際にも石斧に「赤木名」の注記を確認したので、奄美発見であることは確かである。おそらく一括して発見された「埋納品」ではないかと察せられる。当時全国各地に江戸時代からの伝統をひく蒐集家がいたようだが、薩摩には「白野」なる人物がいたらしい。あるいはこの人物を介した可能性も考えられるが、定かではない。

4. その後の神田資料

- (1) 若林勝邦の再報告 「種子島及ビ大島ノ石斧」『東京人類学会雑誌』第七卷

第七十一号 1892年

若林勝邦が1892年に神田所蔵の石器のうち、奄美大島笠利町赤木名発見の石斧10点と、若林自身が日向（宮崎県）に赴いた時に実見した石斧1点とを実測図を添えて、上記の文献に記載している。若林は人類学会の初期からのメンバーで、坪井正五郎とともに会の運営にあたっている。おそらく当時会長を務めていた神田とは会の運営を通して近い関係にあったことから、神田所蔵の石斧を扱ったのだろう。

若林が奄美発見石器のみを選んで扱った動機は、九州南部の島嶼地域および奄美地域においては石器時代遺物が未発見であったことから、これを最初の知見として発表したかったということが、序文からうかがえる。若林は平面図、側面図をとり、縮尺を付して10点の大島発見石斧を掲載した。神田の著作では5点のみであったが、これにより実は10点であったことが判明した。

- (2) 神田資料が本山彦一へ渡る

神田孝平は1898（明治30）年に逝去したが、彼が所蔵していた考古資料は関西の本山彦一に渡った。本山は1853年に熊本で生まれ、1871年に上京して洋学を修め、さらに福沢諭吉のもとで学んだ。兵庫県学務課長や神戸師範学校長を歴任し、その後1882年以降は新聞業界で活躍するようになった。1888（明治21）年に大阪毎日新聞社相談役、1903年には51歳で同社の社長になっている。1930年に貴族院議員に勅任され、1932（昭和7）年に80歳で逝去した。

新聞社の社長時代に京都大学の発掘を援助したり、自ら遺跡調査を企画するなど考古学への趣味にも熱心であった。晩年に神田孝平の蒐集品約1300点を譲り受け、自己の所蔵資料とあわせて『富民協会』の三階に「農業博物館・本山考古室」を設けて陳列した。このときに、奄美発見の石斧も引き取られたのである。

1932（昭和7）年本山彦一翁が逝去した。その一年忌にあたり、京都大学の末永雅雄が編集し、濱田耕作、梅原末次の修正を経て、とりあえず収蔵品の写真集として『本山考古室図録』が刊行された。これは一年忌に間に合わせるために、以前から編集中であった陳列品目録から急遽写真図録のみを出版したものである。そして、1934（昭和9）年に一部の実測図をつけた陳列品の遺跡地名表を内容とする『本山考古室目録』が刊行された。さらに後にこの二冊がまとめられて『本山考古室要録』と題する合冊本となった。上記の目録のなかに、奄美発見の石斧も一部実測図付で収録されている。

- (3) 本山資料が関西大学博物館へ渡る

本山彦一の逝去後、末永雅雄の尽力により関西大学が本山家から「本山考古室」の所蔵品を購入した。そして、同大の考古学等資料室、現在の大学博物館に収蔵され、現在に至っている。私は1996年11月に同大で該当石斧を実見し、撮影した。しかし、現存するのは6点だけであった。

- (4) 現在の神田資料

これまでの経緯は下記の通りである。神田孝平は10点所蔵、本山彦一は8点所蔵していた。関西大学には6点所蔵されている。4点が所在不明ということである。

神田孝平著作	若林勝邦論考	本山彦一目録	関西大学
五版 6 図	第一図	190左	現存
五版 8 図	第二図	?	×
	第三図	?	×
五版 7 図	第四図	○	現存
五版 5 図	第五図	190右	現存
四版 3 図	第六図	?	×
	第七図	○	現存
	第八図	○	現存
	第九図	○	現存
	第十図	?	
計 5 点	計 10 点	計 8 点	計 6 点

註 本山彦一所蔵資料は図示としては 2 点のみだが、目録では 8 点とある。

?マークの 4 点のうち、いずれか 2 点が関西大学への譲渡時には不明。

5. その後の椿ノ原型石斧の発見

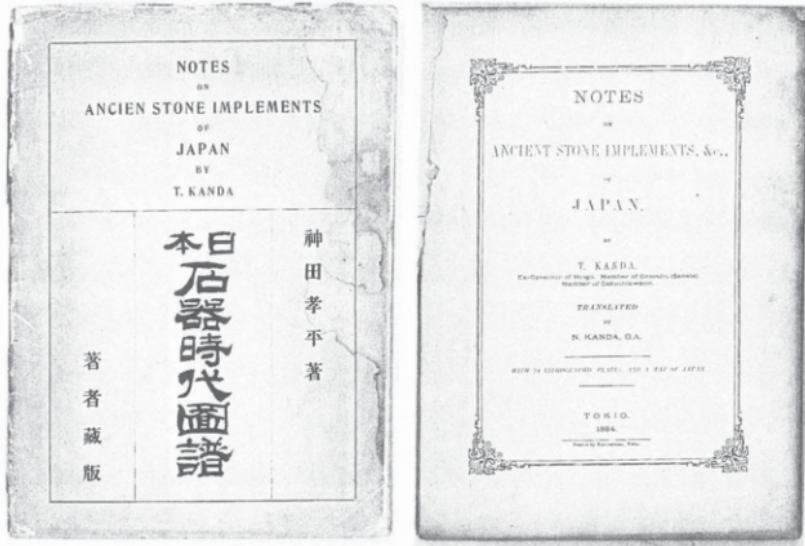
神田孝平が報告した石斧は頭がふくらみをもつ「亀頭形」と、刃部の片面がスプーン状にくぼむ「丸ノミ形」が基本的な特徴で、両方の特徴を備えるものを基本形として一方だけの特徴のものも含めて、戦後南九州地域で相次いで発見されている。

1962 年、沖縄島北部のカヤウチバンタ遺跡から、同類の石斧が宇栄原宗貴氏によって表面採集された。これは宮城長信によって『南島考古だより』第 14 号（1974）に、「辺戸石山遺跡出土の石器について」と題して写真付で紹介されている。この時点では珍しい丸ノミ石斧という認識にとどまっていた。また、1993 年鹿児島県加世田市椿ノ原遺跡で初めて正式の発掘調査において出土した。しかも薩摩火山灰の直下から出土し、その時期が縄文草創期に属することが明らかとなった。（『椿ノ原遺跡』1994 年、加世田市教育委員会）カヤウチバンタ採集の石斧とほとんどソックリであることから初めて注目され、これまでの文献探しが開始された。

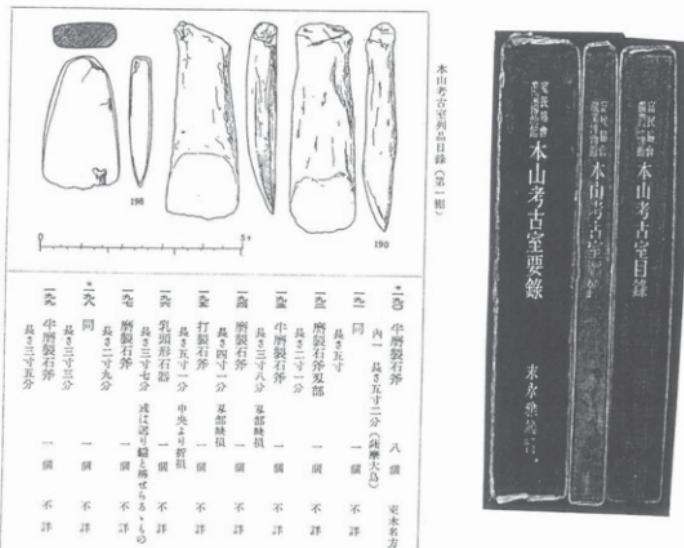
そして、小田静夫の研究で既に他の遺跡でも発見されていることがわかり、南九州を中心として分布することが明らかとなったのである。小田はこれを著書『黒潮圏の考古学』（2000 年、第一書房）のなかにまとめている。この石斧の系譜をめぐっては小田が東南アジアとの関連を想定したが、新田栄治は「椿ノ原型石斧は東南アジアから伝わったのか」（『南九州縄文通信』1995 年、南九州縄文研究会）でこれに批判を加えた。しかし小田はその後も南方との関連を示唆する言動をしている。（黒潮紀行：縄文人は丸木舟でやってきた—椿ノ原型石斧を追って—』『高知大学黒潮圏研究所報』1996）

最近、種子島西之表市の鬼ヶ野遺跡で薩摩火山灰とみられる層の下から椿ノ原型石斧が複数出土している。来年度には発掘報告書が刊行されることになっている。南九州地域で、縄文時代の古い時期に展開した石斧文化であることが、発掘によって確認されつつあるといえる。沖縄のカヤウチバンタ遺跡発見のそれは表面採集であることから、遺跡への帰属性が問題である。あるいは外來品かもしれない。神田孝平が琉球諸島最初の文献に紹介した椿ノ原型石斧は、琉球諸島新石器時代の開始期をめぐる重要な資料として注目されているのである。

（あさと しじゅん：所長）



神田孝平著 “NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c., of JAPAN の表紙・中表紙



本山彦所蔵資料『本山考古室目録』の奄美発見石斧の掲載頁
実測図は二点のみだが、下の目録に八個とある。
「東木名」方は「赤木名」の誤り。

Plate IV.

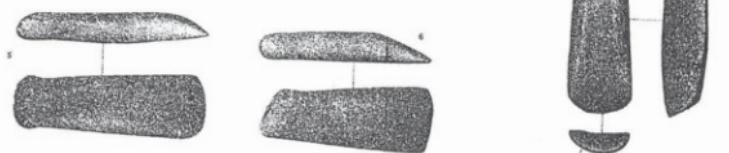
Fig. 3. Point groove-shaped. A head at the upper end. Chlorite-schist. Locality of discovery.—Oshima in Satsuma.



Plate V.

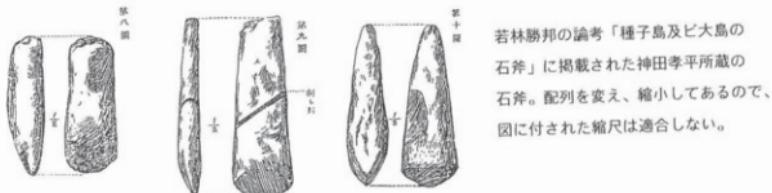
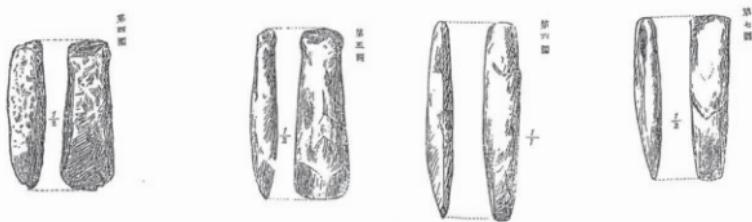
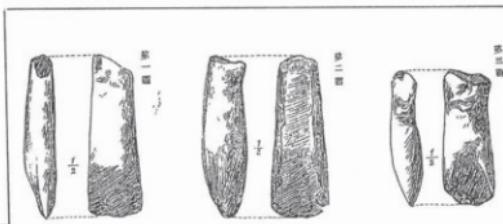
Figs. 5 & 6. Point chisel-shaped. A head at the upper end. Chlorite-schist. Locality of discovery.—Oshima in Satsuma.

Figs. 7 & 8. Point groove-shaped. A head at the upper end. Talc-schist. Locality of discovery.—Oshima in Satsuma.



神田孝平著 “NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c., of JAPAN” に掲載された奄美発見の石斧。縮尺なし。

図版IV・Vより関係する図のみを抽出。



若林勝邦の論考「種子島及ビ大島の石斧」に掲載された神田孝平所蔵の石斧。配列を変え、縮小してあるので、図に付された縮尺は適合しない。

紀 要

沖縄埋文研究 1

発 行 年 2003年（平成15）3月20日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

印 刷 (株)ちとせ印刷
〒901-2131 沖縄県浦添市牧港2丁目1番5号
TEL 098-879-5814

BULLETIN
OF
THE ARCHAEOLOGICAL STUDY OF OKINAWA
No.1

Original Articles

Perforators Unearthed from the Prehistoric Sites in Ryukyu Archipelago	Morimoto, Isao (1)
Reconsideration on the Chronological Position of Tuguru-bana Site in Yonaguni island	Asato, Shijun (11)
Pit Burial and Rock-walled Grave of Gusuku Period — Excavated Examples —	Seto, Tetsuya (25)
Analyses on Tenkai-ji Temple — from the Excavation Results —	Yamamoto, Masaaki (35)
The Coins unearthed from the Shuri Castle Site	Chinen, Takahiro (47)
Bead-ornaments of Gusuku and Modern Periods	Kishimoto, Takemi (55)
Quing Ceramics Unearthed in Okinawa	Arakaki, Tsutomu (73)
Turtleback Tomb of Modern Ryukyu: A Study of Historical Records on Tomb Construction	Kawamoto, Tetsuya (89)

Reports

Preservation of the Iron Artifacts Excavated from Inafuku Site	Aoyama, Nao (97)
War Sites Described in the Cultural Property Archives (1)	Nagamine, Hitoshi (103)
The Archive Classification Method in Okinawa Prefectural Archaeological Center of Buried Cultural Property	Nakama, Rumi (121)
Report of the Experience in Takashima Underwater Site	Katagiri, Chiaki and Nakayama, Shin (125)
Archaeological Collections from the Marupo Site in Tinian, Mariana Is.	Asato, Shijun (131)
Book Review on Ryukyu Archaeology (1)	Asato, Shijun (141)

2003

OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER